

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十六冊

前田東・中村遺跡Ⅲ

2006. 3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
西日本高速道路株式会社

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十六冊

前田東・中村遺跡Ⅲ

2006. 3

香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
西日本高速道路株式会社

序 文

前田東・中村遺跡は、四国横断自動車道建設事業に伴い発掘調査が行われた香川県高松市前田東町に所在する遺跡です。

発掘調査は、香川県教育委員会からの委託で、財団法人香川県埋蔵文化財調査センターが平成9年度から同11年度まで実施し、弥生時代から江戸時代にかけての遺構が検出されました。特に古代の土器や瓦、陶印などが発見されたことから当時の生活・文化を知るための貴重な資料となりました。

このたび、平成17年4月から同年11月まで実施しました整理事業が終了し、「四国横断自動車道建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十六冊 前田東・中村遺跡Ⅲ」として刊行することになりました。

本報告書が香川県の歴史研究の資料として広く活用されますとともに、埋蔵文化財に対する理解と関心が一層深められる一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から出土品の整理・報告にいたるまでの間、関係機関並びに地元関係者各位には多大なご援助とご協力をいただきました。ここに深く感謝の意を表しますとともに、今後ともご支援を賜りますようお願い申し上げます。

平成18年3月

香川県埋蔵文化財センター

所長 渡部 明夫

例　　言

1. 本報告書は、四国横断自動車道高松～高松間（高松市内区間）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書の第56冊で、香川県高松市前田東町に所在する前田東・中村遺跡（まえだひがし・なかむらいせき）の報告を収録した。

なお、前田東・中村遺跡の報告書は5調査区を収録した第55冊と、3調査区を収録した第56冊の2分冊で構成しており、第55冊については、平成17年10月に刊行した。

2. 発掘調査は、香川県教育委員会が日本道路公団から委託され、香川県教育委員会が調査主体、財團法人香川県埋蔵文化財調査センターが調査担当者として実施した。

3. 発掘調査は平成9年9月から平成11年6月まで実施した。発掘調査の担当は以下のとおりである。

平成9年度 喜岡永光、山元素子、宮崎哲治、住野正和、森川 歩、藤澤正則

平成10年度 喜岡永光、宮崎哲治、溝潤大輔、住野正和、佐々木明子、秋山 亮

平成11年度 宮崎哲治、増井泰弘、糸山 晋

4. 調査に当たって、下記の関係諸機関等の協力を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

国土交通省四国地方整備局・西日本高速道路株式会社・香川県土木部横断道対策総室（当時）・四国横断自動車道前田地区対策協議会（当時）、地元自治会・地元水利組合・川田 勇

5. 本報告書の作成は、香川県埋蔵文化財センターが実施した。本報告書の執筆・編集は宮崎が行った。

6. 報告書の作成に当たっては、下記の方々のご教示を得た。記して謝意を表したい。（順不同、敬称略）

谷山 稔（元香川大学）、平川 南（国立歴史民俗博物館）

7. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標系第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位（T.P.）を基準としている。また、遺構は基本的に下記の略号により表示している。

SA 構列跡 SB 捏立柱建物跡 SD 溝状遺構 SE 井戸跡 SF 窟跡

SH 竪穴住居跡 SK 土坑 SP 柱穴跡 SR 自然河川跡 SX 不明遺構

8. 本報告書で使用する遺構名は、現地調査段階のものに小調査区名を冠したものをそのまま使用する。

そのため、作業の進捗に伴い欠番となったものや、上記の遺構略号と一致しないものも存在する。

例：K①区 SD02 → K①SD02

9. 遺構断面図の水平線上の数値は、水平線の標高値（単位m）を示している。

10. 石器実測図中、平面図中の濃いトーン部分および輪郭線の周りの実線は摩滅痕を、輪郭線の周りの点線は潰れを表す。なお、現在の折損は黒く塗りつぶしている。

11. 土器実測図中、平面図中の淡いトーン部分は付着した炭化物・ススを表す。

12. 遺物観察表中の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準土色帖1993年版」による。

13. 添付CD-ROM内の写真図版のビューワーは、株式会社トリワークス（<http://www.kuraemon.com>）『デジカメ蔵衛門2005』を使用した。

本文目次

第1章 調査の経緯	1
第2章 調査の成果	
第1節 土層序	8
第2節 K区の調査	8
第3節 N区の調査	17
第4節 O区の調査	48
第5節 木製品	63
第3章 自然科学調査の成果	
第1節 前田東・中村遺跡から出土した木製品の樹種	88
第2節 前田東・中村遺跡から出土した金属器の材質	102
第4章 遺構の変遷	105

挿図目次

第1図 遺跡位置図	
第2図 調査区割図 (1/2,000)	
第3図 土層断面図① (K・N区) (天地1/40、左右1/160)	
第4図 土層断面図② (O区) (天地1/40、左右1/160)	
第5図 K①SD13断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第6図 K①SX02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第7図 K②SK01平・断面図 (1/50)	
第8図 K②SX01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)	
第9図 K①SB01平・断面図 (1/100)	
第10図 K②SB01平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/4)	
第11図 K②SB02平・断面図 (1/100)	
第12図 K①SD01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2)	
第13図 K①SD02断面図 (1/50)	
第14図 K①SD03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4)	
第15図 K①SD05断面図 (1/50)	
第16図 K②SD01断面図 (1/50)	
第17図 K①SK02平・断面図 (1/50)	
第18図 K①SK04平・断面図 (1/50)	
第19図 K①SX01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4)	
第20図 K①SD11断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第21図 K①SP10平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第22図 K①SP49断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第23図 K①SP50断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第24図 K①SP53平面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第25図 K②SP01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第26図 K②SP38断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第27図 K①SP52平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第28図 K①SP83断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第29図 K①SP92平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第30図 K①SP30平・断面図 (1/50)	
第31図 K①SP84平・断面図 (1/50)	
第32図 K①SP69平・断面図 (1/50)	
第33図 K区包含層出土遺物 (1/2、1/4)	
第34図 N③SR01断面図 (1/50)、出土遺物① (1/4)	
第35図 N③SR01出土遺物② (1/4)	
第36図 N③SR01出土遺物③ (1/4)	
第37図 N③SR01出土遺物④ (1/2、1/3)	
第38図 N①SD07・08・09断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第39図 N②SD07断面図 (1/50)	
第40図 N②SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第41図 N③SD10・11・15断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第42図 N③SD13断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第43図 N③SD15断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	
第44図 N③SD14断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)	

- 第45図 N③SK01平・断面図 (1/50)
 第46図 N①・②SR01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4)
 第47図 N①SB01平・断面図 (1/100)
 第48図 N③SB01平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/2、1/4)
 第49図 N①SD01・SD01-03重複部断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4、1/5)
 第50図 N①SD02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第51図 N①SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第52図 N②SD02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第53図 N②SD03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第54図 N②SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第55図 N②SD09断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第56図 N②SD10断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第57図 N③SD01・02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第58図 N③SD04断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第59図 N③SD07平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4)
 第60図 N③SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第61図 N①SX01土器集中部平面図、平・断面図 (1/20)
 第62図 N①SX01出土遺物 (1/3、1/4、1/5)
 第63図 N②SX02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/3、1/4、1/5)
 第64図 N①SD03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第65図 N③SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第66図 N③SP34断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第67図 N②SP09平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第68図 N②SP20断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第69図 N②SP24断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第70図 N③SP26平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第71図 N③SP24平・断面図 (1/50)
 第72図 N②SP07平・断面図 (1/50)
 第73図 N①区包含層出土遺物 (1/4、1/5)
 第74図 N②区包含層出土遺物 (1/4、1/5)
 第75図 N③区包含層出土遺物 (1/2、1/4、1/5)
 第76図 O①SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第77図 O①SX03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/3、1/4)
 第78図 O①SR01断面図 (1/50)、出土遺物 ① (1/4、1/5)
 第79図 O①SR01出土遺物 ② (1/3、1/4、1/5)
 第80図 O①SB01平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/4、1/5)
 第81図 O②SH01平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/4)
 第82図 O①SD04断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第83図 O③西SD01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第84図 O③西SD02・03・SX01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第85図 O③西SD04断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第86図 O③東SD07断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第87図 O③東SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第88図 O③西SX01出土遺物 (1/4、1/5)
 第89図 O③西SX03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第90図 O③東SD06断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第91図 O③東SD09断面図 (1/50)
 第92図 O③東SK04平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/5)
 第93図 O①SP01平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第94図 O①SP18平・断面図 (1/50)
 第95図 O①SP18出土遺物 (1/3)
 第96図 O①SP21平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)
 第97図 O②SP06平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第98図 O③東SP07断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第99図 O③東SP08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)
 第100図 O③東SP20平・断面図 (1/50)
 第101図 O②SB01平・断面図 (1/100)
 第102図 O③東SB01平・断面図 (1/100)
 第103図 O③東SP16断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2)
 第104図 O区包含層出土遺物 (1/4、1/5)
 第105図 H①SE01井戸枠模式図(1/40)、木製品実測図①(1/12)
 第106図 木製品実測図② (1/5、1/6、1/12)
 第107図 H②SE01井戸枠模式図(1/40)、木製品実測図③(1/12)
 第108図 木製品実測図④ (1/6、1/12)
 第109図 木製品実測図⑤ (1/2、1/4、1/5、1/6)
 第110図 木製品実測図⑥ (1/5、1/6)
 第111図 木製品実測図⑦ (1/2、1/4、1/5、1/6、1/12)
 第112図 木製品実測図⑧ (1/2、1/4、1/5、1/6)
 第113図 木製品実測図⑨ (1/6)
 第114図 木製品実測図⑩ (1/6)
 第115図 木製品実測図⑪ (1/4、1/5、1/6)
 第116図 L③SE01井戸枠模式図(1/40)、木製品実測図⑫(1/12)
 第117図 木製品実測図⑬ (1/2、1/4、1/12)
 第118図 木製品実測図⑭ (1/6)
 第119図 木材(1)
 第120図 木材(2)

第121図 木材(3)	第126図 成分分析結果（試料488）
第122図 木材(4)	第127図 成分分析結果（試料159）
第123図 木材(5)	第128図 遺構変遷図① (1/2,000)
第124図 木材(6)	第129図 遺構変遷図② (1/2,000)
第125図 木材(7)	第130図 遺構変遷図③ (1/2,000)

表 目 次

第1表 整理作業の体制	第4表 時期別・用途別種類構成
第2表 整理作業工程表	第5表 調査資料一覧
第3表 木製品樹種同定結果	第6表 成分分析結果表

CD 目次

OMNa-2005-ikou

画像1 K①区全景（東から）（航空写真）	画像24 N①区第2面全景（東から）
画像2 K①区全景（西から）	画像25 N②区第1面全景（北から）
画像3 K①区全景（南から）	画像26 N②区第1面全景（北から）
画像4 K①区西壁土層断面（東から）	画像27 N②区南壁土層断面（北から）
画像5 K②区全景（南から）（航空写真）	画像28 N②区第2面全景（南から）（航空写真）
画像6 K②区全景（南西から）（航空写真）	画像29 N②区第2面全景（西から）（航空写真）
画像7 K②区全景（西から）	画像30 N②区第2面全景（北から）
画像8 K②区全景（東から）	画像31 N③区第1面全景（南から）（航空写真）
画像9 K②区南壁土層断面（北から）	画像32 N③区第1面完掘（西から）（航空写真）
画像10 K②区西壁土層断面（東から）	画像33 N③区第1面全景（北から）
画像11 K①SD13土層断面（北から）	画像34 N③区第1面全景（東から）
画像12 K①SB01全景（西から）	画像35 N③区西壁土層断面（東から）
画像13 K①SB01全景（南から）	画像36 N③区第2面全景（南から）（航空写真）
画像14 K①SD01鉄製品出土状況（北から）	画像37 N③区第2面全景（西から）（航空写真）
画像15 K①SD05・12土層断面（東から）	画像38 N③区第2面全景（東から）
画像16 K①SD11土層断面（西から）	画像39 N③区第2面全景（北から）
画像17 K①SP84柱痕出土状況（南から）	画像40 N③SR01全景（北から）
画像18 K①SP69柱痕出土状況（南から）	画像41 N③SR01北壁土層断面（南から）
画像19 N①区第1面全景（東から）	画像42 N③SR01北壁土層断面（南東から）
画像20 N①区第1面全景（北から）	画像43 N②SD07土層断面（南から）
画像21 N①区南壁土層断面（北から）	画像44 N②SD08土層断面（北東から）
画像22 N①区第2面全景（南から）（航空写真）	画像45 N③SD10・11・14・15全景（北から）
画像23 N②区第2面全景（東から）（航空写真）	画像46 N③SK01土層断面（北から）

画像47	N①SB01全景（東から）	画像69	O③区全景（南から）（航空写真）
画像48	N③SB01全景（北から）	画像70	O③区全景（西から）（航空写真）
画像49	N①SD01土層断面（北から）	画像71	O③区全景（西から）
画像50	N②SD02土層断面（北から）	画像72	O③区全景（東から）
画像51	N②SD09土層断面（東から）	画像73	O③西区北壁土層断面（南から）
画像52	N③SD02土層断面（南から）	画像74	O③東区北壁土層断面（南から）
画像53	N③SD08土器出土状況（南から）	画像75	O①SD05土器出土状況（南から）
画像54	N③SD08土器出土状況（西から）	画像76	O①SR01全景（西から）
画像55	N①SX01遺物出土状況（東から）	画像77	O①SR01土層断面（北から）
画像56	N①SX01全景（西から）	画像78	O①SB01全景（北西から）
画像57	N①SD03土層断面（東から）	画像79	O②SH01全景（西から）
画像58	N③SD04・05土層断面（東から）	画像80	O①SD04土層断面（北から）
画像59	N②SP09柱痕検出状況（東から）	画像81	O③西SD01土層断面（南から）
画像60	N②SP07柱痕検出状況（東から）	画像82	O③東SD08土層断面（東から）
画像61	O①区全景（西から）	画像83	O③東SK04人骨出土状況（北から）
画像62	O①区全景（西から）	画像84	O③東SK04人骨出土状況（北から）
画像63	O①区南壁土層断面（北から）	画像85	O②SP06土器出土状況（北から）
画像64	O②区第1面全景（西から）	画像86	O③西SD01～03全景（北から）
画像65	O②区南壁土層断面（北から）	画像87	O③東SB01全景（北から）
画像66	O②区第2面全景（南から）（航空写真）	画像88	N③区第2面作業風景（南から）
画像67	O②区第2面全景（西から）（航空写真）	画像89	N③区第2面作業風景（南東から）
画像68	O②区第2面全景（北から）		

OMNa-2005-ibutu

画像90	17	画像104	60	画像118	94
画像91	17	画像105	62	画像119	94
画像92	23	画像106	62	画像120	94
画像93	23	画像107	63	画像121	95
画像94	29	画像108	64	画像122	95
画像95	29	画像109	66	画像123	97
画像96	36	画像110	70	画像124	97
画像97	36	画像111	70	画像125	100
画像98	43	画像112	72	画像126	100
画像99	43	画像113	80（左）・81（右）	画像127	100
画像100	53	画像114	87	画像128	117
画像101	57	画像115	87	画像129	117
画像102	59	画像116	92	画像130	127
画像103	59	画像117	93	画像131	127

画像132	128	画像170	221	画像208	342
画像133	142	画像171	221	画像209	342
画像134	144	画像172	225	画像210	349(左)・350(中)・351(右)
画像135	144	画像173	225	画像211	349(左)・350(中)・351(右)
画像136	150	画像174	247	画像212	354
画像137	150	画像175	247	画像213	354
画像138	156	画像176	263	画像214	354
画像139	156	画像177	265	画像215	356
画像140	156	画像178	265	画像216	365
画像141	159	画像179	276	画像217	365
画像142	159	画像180	286	画像218	370
画像143	159	画像181	286	画像219	370
画像144	165	画像182	287	画像220	370
画像145	165	画像183	289	画像221	370
画像146	181	画像184	291	画像222	383
画像147	181	画像185	294	画像223	384
画像148	185	画像186	297	画像224	384
画像149	185	画像187	300	画像225	387
画像150	185	画像188	300	画像226	387
画像151	195	画像189	304	画像227	387
画像152	195	画像190	304	画像228	392
画像153	198	画像191	304	画像229	392
画像154	198	画像192	314	画像230	395
画像155	198	画像193	314	画像231	395
画像156	199	画像194	321	画像232	398
画像157	199	画像195	321	画像233	398
画像158	200	画像196	322	画像234	399
画像159	201	画像197	322	画像235	400
画像160	201	画像198	322	画像236	400
画像161	201	画像199	324	画像237	403
画像162	203	画像200	331	画像238	403
画像163	203	画像201	331	画像239	403
画像164	205	画像202	331	画像240	409
画像165	206	画像203	336	画像241	409
画像166	206	画像204	337	画像242	413
画像167	207	画像205	341	画像243	413
画像168	214	画像206	341	画像244	413
画像169	214	画像207	342	画像245	416

画像246	416	画像278	465	画像310	500
画像247	416	画像279	465	画像311	501
画像248	420	画像280	465	画像312	501
画像249	420	画像281	465	画像313	502
画像250	420	画像282	465	画像314	502
画像251	420	画像283	465	画像315	503
画像252	420	画像284	474	画像316	505
画像253	422	画像285	474	画像317	505
画像254	422	画像286	474	画像318	506
画像255	425	画像287	477	画像319	506
画像256	425	画像288	477	画像320	506
画像257	426	画像289	477	画像321	507
画像258	426	画像290	477	画像322	507
画像259	430	画像291	477	画像323	507
画像260	430	画像292	477	画像324	511
画像261	434	画像293	483	画像325	511
画像262	434	画像294	483	画像326	512
画像263	437	画像295	483	画像327	512
画像264	437	画像296	486	画像328	512
画像265	440	画像297	486	画像329	519
画像266	440	画像298	486	画像330	519
画像267	440	画像299	497	画像331	523
画像268	440	画像300	497	画像332	523
画像269	441	画像301	497	画像333	526
画像270	441	画像302	497	画像334	547
画像271	441	画像303	498	画像335	547
画像272	465	画像304	498	画像336	549
画像273	465	画像305	498	画像337	549
画像274	465	画像306	498	画像338	551
画像275	465	画像307	499	画像339	551
画像276	465	画像308	500	画像340	552
画像277	465	画像309	500	画像341	552

観察表

遺構配置図

遺構配置図① (K区)

遺構配置図② (N区第1面)

遺構配置図③ (N区第2面)

遺構配置図④ (O区第1・2面)

第1章 調査の経緯

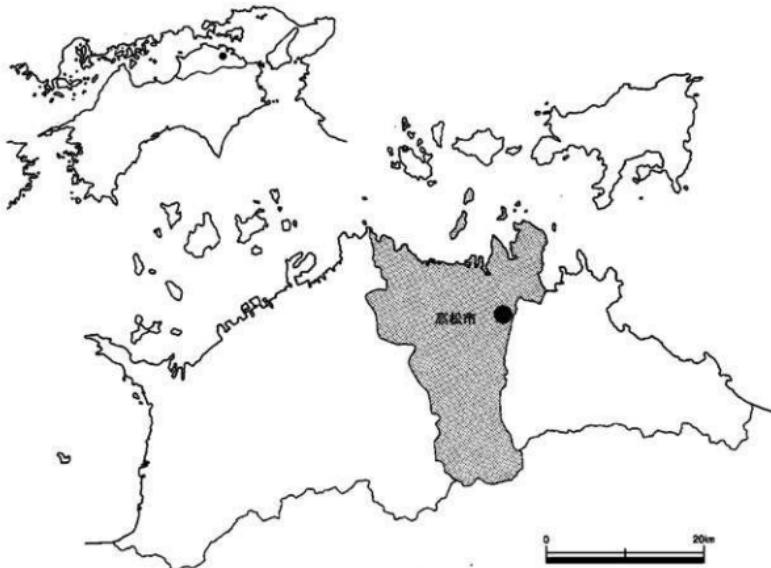
前田東・中村遺跡は、高松市前田東町に位置し、昭和63年度から平成5年度にかけて高松東道路（国道11号高松東バイパス）建設事業に伴い、埋蔵文化財の発掘調査が行われた遺跡である。

このたびの四国横断自動車道高松～高松間（高松市内区間）建設事業に伴い、高松東インターチェンジ建設予定地として高松東道路の両側について埋蔵文化財発掘調査を実施した。調査期間は平成9年9月から平成11年6月の3ヵ年、調査対象面積は13,146m²である。

整理作業は、平成16年4月から平成17年11月の2ヵ年にわたって実施した。平成16年度整理作業分については、『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第五十五冊 前田東・中村遺跡Ⅱ』として報告書を刊行した。『前田東・中村遺跡Ⅱ』では調査対象地の西半部を中心とする遺構、遺物（土器・石器・金属器）を掲載した。

平成17年度の整理作業分が本報告書『前田東・中村遺跡Ⅲ』として報告するものであり、調査対象地東半部の遺構、遺物（土器・石器・金属器）及び木製品を掲載する。

なお、整理作業の体制は第1表、作業の工程は第2表のとおりである。



第1図 遺跡位置図

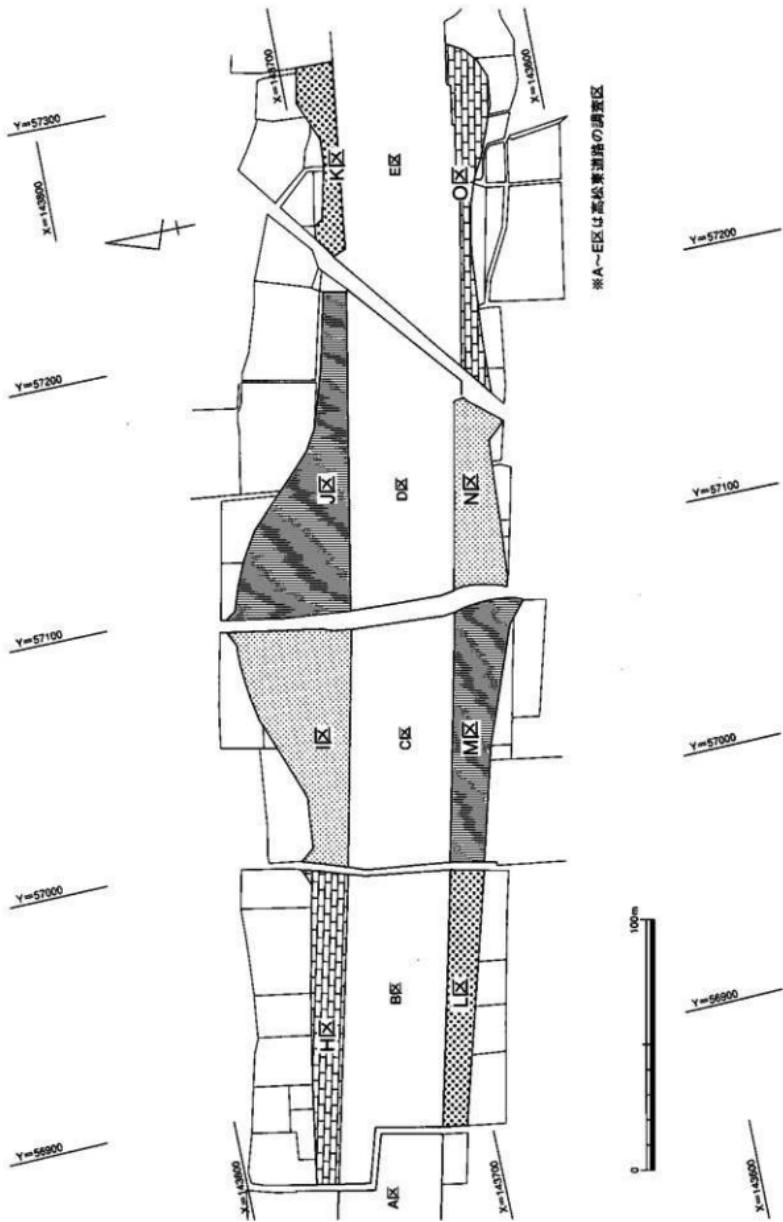
平成17年度					
香川県教育委員会事務局文化行政課			香川県埋蔵文化財センター		
総括	課長	吉田光成	総括	所長	渡部明夫
	課長補佐	中村植伸		次長	神原正人
総務・芸術文化グループ	副主幹	河内一裕	総務課	課長(次長兼務)	タ
	主任	堀本由紀		副主幹兼係長	松崎日出穂
	主任主事	八木秀憲		主査	塩崎かおり
文化財グループ	課長補佐	藤好史郎	資料普及課	主査	田中千晶
	主任	山下平重		課長(調査課長兼務)	廣瀬常雄
	文化財専門員	信里芳紀		文化財専門員	宮崎哲治
				臨時職員	市川孝子
					佐々木博子
					岡本基公美
					池内妙子
					池田梨沙
					北濱敦子
					朝田加奈子

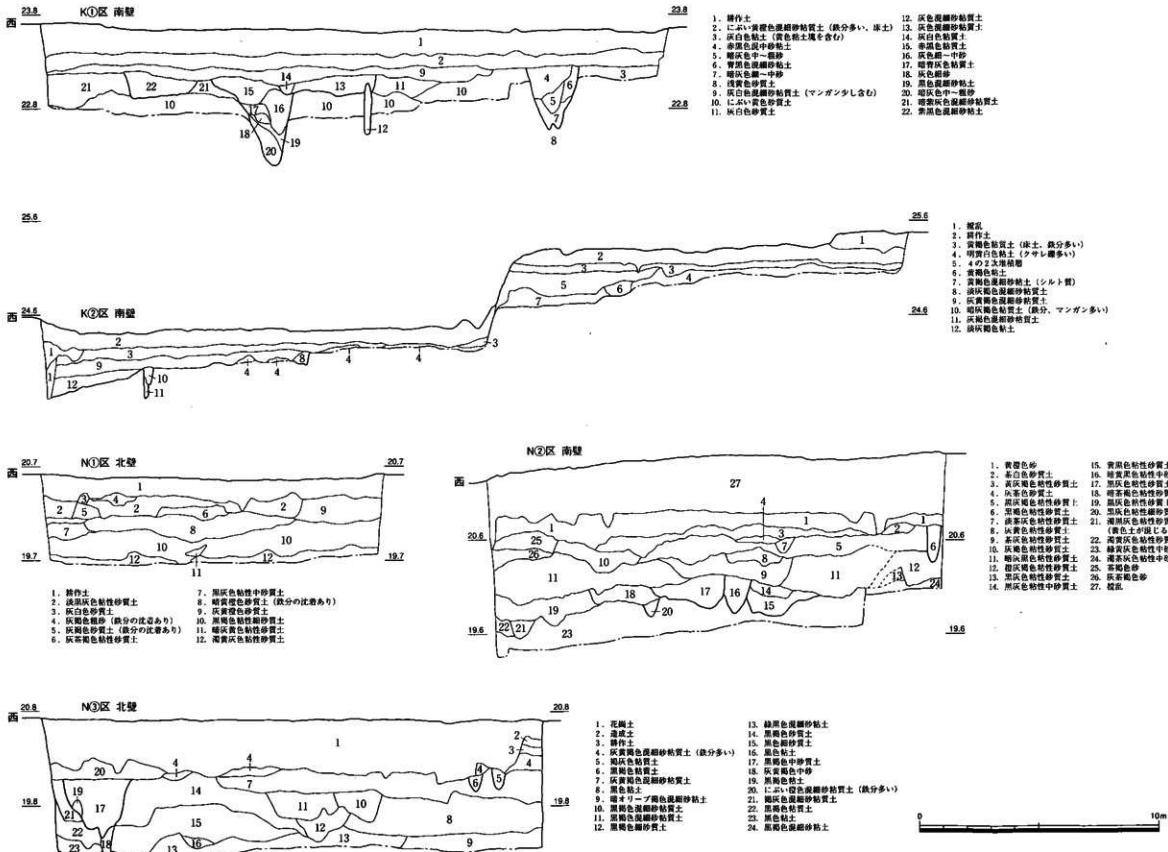
第1表 整理作業の体制

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月
遺物の注記								
遺物の接合、石膏復元								
報告遺物の抽出								
遺物の実測								
遺物図面のチェック								
遺物挿図原稿の作成								
遺構整理								
遺構挿図原稿の作成								
付図、表原稿の作成								
遺物写真撮影								
原稿作成								
編集								
遺物の収納、台帳整備								

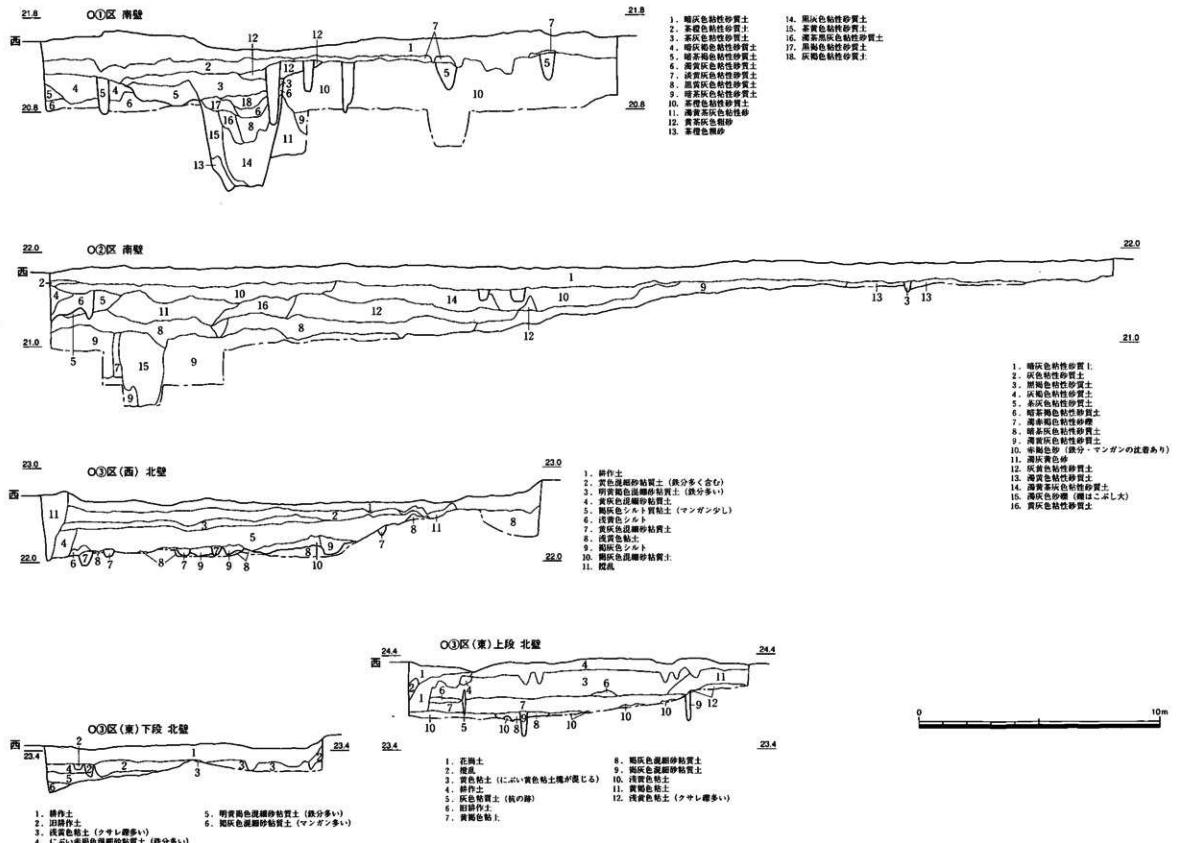
第2表 整理作業工程表

第2図 調査区割図 (1/2,000)





第3図 土層断面図① (K・N区) (天地1/40、左右1/160)



第4図 土層断面図② (O区) (天地1/40、左右1/160)

第2章 調査の成果

第1節 土層序

調査対象地は扇状地の緩傾斜面に立地している。現地形は東から西へ向かって傾斜しており、東西両端では約8mの比高がある。調査対象地内には複数の自然河川の形成した小谷地形が埋没しており、その付近では遺構検出面が2面（部分的には3面存在する箇所もある）存在する以外は、基本的に1面となっている。

本書収録の調査区を概観する。高松東道路の北側調査区の東端であるK区では黄色系粘質土層が分厚く堆積して安定した地盤となっており、これは南北方向に伸びる尾根状の高まりに相当する。K区はこの尾根の西斜面に当たり、後世の開墾により階段状の削平を受けている。尾根は南に連続しており、ちょうどK区に相対する南側調査区東端のO区でも同じ黄色系粘質土層が認められる。O区も後世の開墾によって階段状に削平を受けている状況が認められる。削平は著しく、現代の耕作土直下に黄色系粘土層が存在しており、削平を免れた包含層の一部がわずかに残る程度である。

この黄色系粘質土層は、西に向かうにつれて徐々に深く潜り込みながらシルト質に変化していく。O①区からN①・②区辺りがその部分に相当する。この付近では黄色系粘土～シルト層上面とその上位に堆積した暗褐色粘質土層上面がそれぞれ遺構検出面となっている。N③区からM②区にかけては谷地形となっており、N③区では自然河川跡1条を確認した。この自然河川跡は黒色粘土層と灰白色中～粗砂層の堆積の繰り返しが複数見られ、滞水と流水を繰り返しながらこの谷が埋積していくと判断できる。自然河川跡の上面には古代以降の遺構が認められることから、遅くとも古代以前に谷の埋積は終了していたことがうかがえる。

土層序等から復元した旧地形と調査区の対応を見ると、尾根状の微高地（K・O区）と谷地形（N区）ということになり、谷地形は北側調査区のJ区と連続するものである。

第2節 K区の調査

1. 調査区の概要

南北幅14～22m、東西長75mの範囲を占めるK区は、2つの小調査区に分けて調査を行った。高松東道路調査区E区西半部の北側に隣接する調査区である。標高はおよそ23.7～25.3mで、東西両端で約1.6mの標高差を有する。調査前は畑地として土地利用されていた。K②区は後世の開墾によって2段の階段状に造成されており、K区全体としては3段の階段状を呈している。

K区では耕作土直下で1面の遺構面を確認しており、弥生時代や古代・中世の遺構を同一遺構面上で検出している。

2. 調査の成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

K①SD13（第5図）

K①区のはば中央部で確認した。検出長7.7m、幅1.4m、深さ0.5mの規模を有する溝状遺構である。



第5図 K①SD13断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

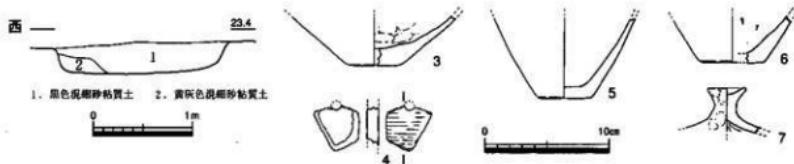
等高線に斜行した北東から南西方向に調査区内を横切り、南側で高松東道路調査E区 SD05に連続すると見られる。断面形状は逆三角形を呈する。

出土遺物は1・2の弥生土器がある。1は外方に強く屈曲する口縁部を有し、上方に拡張した端部に凹線を巡らせた壺である。2は平底の壺の底部である。土器の形態から、弥生時代後期前半に位置付けられる。

K①SX02 (第6図)

K①区の東半で確認した遺構である。長径4.3m以上、短径2.4m、深さ0.3mの規模を有する長椭円形の土坑状の平面形を持つ。断面形状は逆台形を呈し、床面には凹凸が顕著である。

埋土から弥生土器が出土している。3は壺の底部、5・6は甕の底部である。いずれも平底を呈している。4は高杯の脚部破片で、細いヘラ描き沈線が10条以上認められる。7は壺の摘み部分で壺の蓋と考えられる。これらは形態から弥生時代後期に属するものと判断できるが、いずれの土器も磨滅が著しく、二次的に堆積した可能性が高い。



第6図 K①SX02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

(2)古代の遺構・遺物

K②SK01 (第7図)

K②区東半で検出した長椭円形の土坑である。1.2m × 0.7mで深さは0.1mを測る。断面形状は浅い皿形を呈している。底面には凹凸が見られる。周辺には柱穴跡が多数分布しており、建物に伴った土坑の可能性がある。

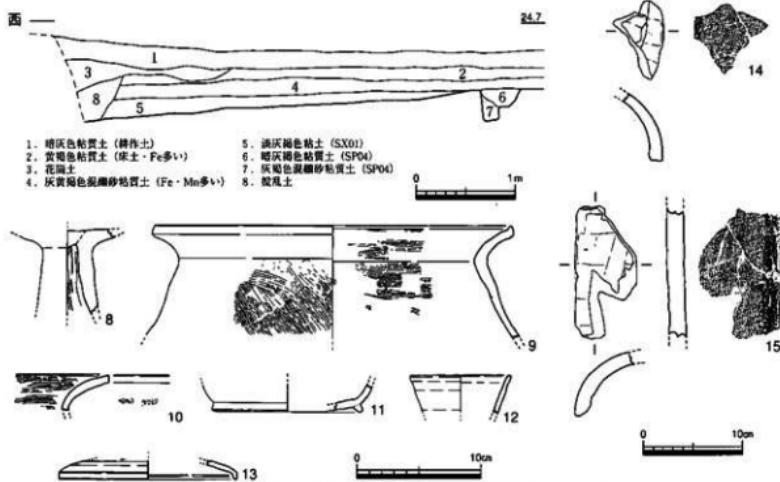
同化できなかったが、平安時代に属すると判断できる土師器細片がわずかに出土している。

K②SX01 (第8図)

K②区西端で検出した性格不明遺構である。検出長5.1m × 検出幅4.3mで、深さは0.2mを測る。底面は西に向かって緩やかに傾斜しており、削平を免れた包



第7図 K②SK01
平・断面図 (1/50)



第8図 K②SX01断面図 (1/50)、出土物 (1/4, 1/5)

含層の一部である可能性も否定できないが、ここでは遺構として扱った。埋土は淡灰褐色粘土層の1層のみである。

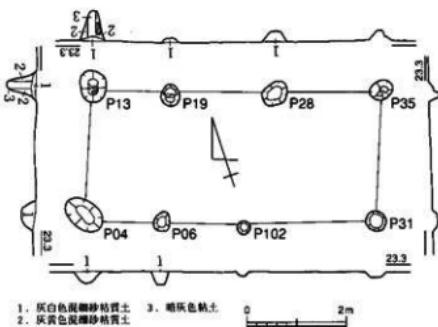
埋土中からは8~15の遺物が出土している。8は弥生土器高杯である。円盤充填法による成形が認められる「下川津B類土器」である。9・10は土器底窓で、ともに口縁部内面のハケメが顕著である。11は貼付高台を持つ土器底窓である。12は須恵器平瓶の口縁部、13は須恵器の蓋である。14・15は軌質の丸瓦で、直接接合はしないものの同一個体の可能性が高い。内面の布庄痕が顕著である。弥生時代後期の土器の混入が認められるものの、土器や須恵器の形態から8~9世紀を中心とした年代が想定できる。

(3) 中世の遺構・遺物

K①SB01 (第9図)

K①区西半で検出した1間×3間の掘立柱建物跡である。2.7m×5.8mの規模で、床面積は15.7m²を測る。建物主軸はN72°Wの方向を有する東西棟である。建物跡を構成する柱穴跡のうちSP13・19・35の3基には土層観察から柱痕を確認することができた。

柱穴跡からは、固化できなかったが、中世に属すると判断できる土器片などがわずかに出土している。近在する中世の溝状遺構SD01・05と方向を同じくしているこ



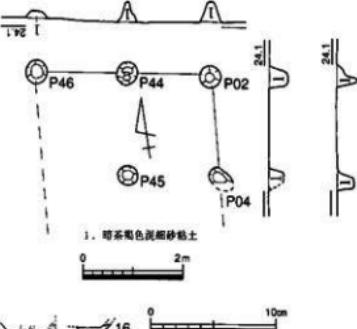
第9図 K①SB01平・断面図 (1/100)

とも、この建物が中世に属することの傍証と言える。

K②SB01 (第10図)

K②区西端部で検出した2間×1間以上の掘立柱建物跡である。建物の北東隅付近を確認ただけであり、調査区外西・南側に続いている。規模は2.0m×3.5m以上を測り、床面積は7.0m²以上となる。建物主軸は北側の柱穴跡でN 79°Wの方向を有しているが、現状では東西棟か南北棟かは判断できない。

先述したK②SX01が埋没した後に作られており、建物跡を構成する柱穴跡からは、K②SX01から混入したと思われる10世紀代の須恵器杯片16以外に、中世に属する土師器片が出土していることから、中世の掘立柱建物跡と判断できる。

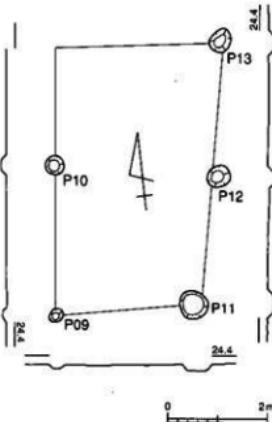


第10図 K②SB01平・断面図(1/100)、出土遺物(1/4)

K②SB02 (第11図)

K②区中央付近で検出した1間×2間の掘立柱建物跡である。2.8m×5.2mの規模で、床面積は14.6m²を測る。建物主軸はN 85.5°Eの方向を有する南北棟である。北西隅の柱穴跡が調査区外のため確認できていないが、さらに北方へ続く可能性もある。

確認した柱穴跡5基は、後世の削平を受けて深さが10cm弱しか遺存していない状況であった。固化できなかったがSP11からは中世に属すると判断される土師器片・黒色土器片がわずかに出土しており、この建物も中世に位置付けることができる。



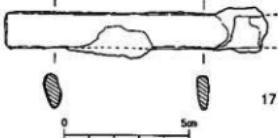
第11図 K②SB02平・断面図(1/100)

K①SD01 (第12図)

K①区南西隅付近で検出した検出長6.6m、幅1.1m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。掘立柱建物跡K①SB01の西・南側を取り巻くように、ほぼ直角に屈曲する形態を示す。断面形状は浅い皿形から逆台形を呈し、西側部分でN 19°Eの方向を有している。

埋土からは、固化できなかったが、胴部に格子タタキ目を施した土師器足釜片が出土している。17は銅製品で、鏡面を欠損した手鏡の柄である可能性が高い。

中世に属する溝状遺構と判断できる。



第12図 K①SD01断面図(1/50)、出土遺物(1/2)

K①SD02 (第13図)

K①区南西隅付近で検出した検出長2.0m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形で、N 67°W の方向を有する。K①SD01の屈曲部分に接続しており、同時期に機能したものと判断できる。



第13図 K①SD02
断面図 (1/50)

K①SD03 (第14図)

K①区西半中央付近で検出した検出長2.9m、幅0.8m、深さ0.1mの規模を持つ土坑状を呈した溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、N 17°E の方向を有する。

埋土から18~20の遺物が出土している。18は土師器足釜である。口縁部外面に粘土紐を巡らせて鍔としている。19は土師器小皿である。これらの形態から13~15世紀の年代が想定される。20は緑泥片岩製の柱状片刃石斧の破片で、基部付近の表面が剥離したものである。混入品である。



第14図 K①SD03断面図 (1/50)、
出土遺物 (1/2, 1/4)

K①SD05 (第15図)

K①区の中央部を縦断するような形で検出した検出長22.5m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形で、N 71°W の方向を有する。図化できなかったが、埋土からは古代~中世の土器小片が出土しており、中世に属する溝状遺構と判断できる。

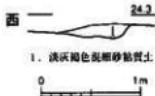
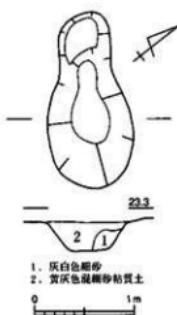


第15図 K①SD05
断面図 (1/50)

K②SD01 (第16図)

K②区西半中央付近で検出した検出長6.3m、幅0.8m、深さ0.2mの規模を測るほぼ直線的な溝状遺構である。断面形状は逆台形状を呈し、N 35°E の方向を有している。北端で西側へ鋭角に折れ曲がったのち、途切れている。

埋土からは、図示できなかったが土師器碗や須恵器壺細片が出土しており、中世の年代が想定できる。



第16図 K②SD01
断面図 (1/50)

K①SK02 (第17図)

K①区の中央付近で検出した、平面形態が縦長のだるま形を呈する土坑である。1.8m × 0.9m、深さ0.3mの規模を有する。断面形状は逆台形をしている。後述するK①SX01の埋没後に掘られた土坑である。

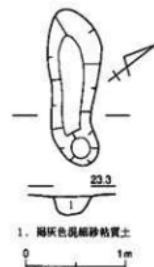
図化できなかったが、埋土から須恵器細片と土師器細片がわずかに出土していることから中世に属するものと想定できる。

第17図 K①SK02
平・断面図 (1/50)

K①SK04 (第18図)

K①区の東半中央付近で検出した長楕円形を呈する土坑である。1.5m × 0.6m、深さ0.2mの規模を有する。断面形状は逆台形を呈している。土坑の東側の端部は一段掘り進められて、柱穴状を呈している。

埋土は褐灰色混細砂粘質土の1層で、平瓦片、土師器細片等が出土している。図示できなかったが、その形態から中世に属する遺物と見ることができる。

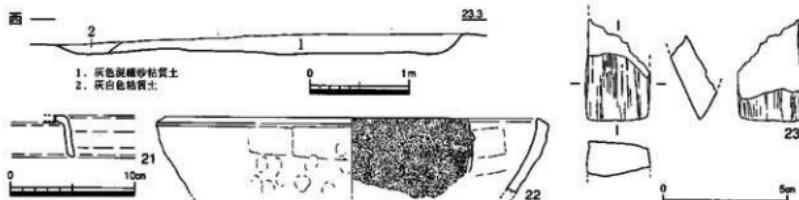


第18図 K①SK04
平・断面図 (1/50)

K①SX01 (第19図)

K①区の中央部の南壁沿いで検出した不整楕円形を呈する土坑である。南側は調査区外に連続しているため、検出部分で4.1m × 2.7m、深さ0.2mの規模を持つ。断面形状は浅い皿形を呈している。

埋土から須恵器蓋21、土師器すり鉢22、柱状片刃石斧23等が出土している。土師器すり鉢は内面に2条以上の卸し目を施すもので、形状から14世紀頃の年代に位置付けられる。他の2つは混入品と判断できる。これらの遺物以外に瓦器碗片や土師器土釜片等があり、この土坑の年代は中世に属するものと判断できる。



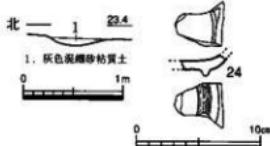
第19図 K①SX01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2, 1/4)

(4)近世の遺構・遺物

K①SD11 (第20図)

K①区西半の北側付近で検出した検出長9.0m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い三角形を呈し、N72°Wの方向を有する。

埋土から土師器や須恵器の細片に混じって、24の磁器碗片が出土した。呉須による模様が描かれており、18世紀頃の年代が想定される。

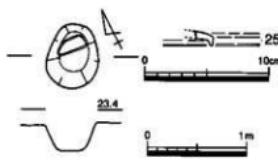


第20図 K①SD11断面図 (1/50)、
出土遺物 (1/4)

(5)K区の柱穴跡・遺物

K①SP10 (第21図)

K区の西壁中央付近で検出した。60cm × 50cm、深さ28cmの楕円形を呈する。柱穴跡の底には、40cm × 17cm程の板石が置かれていた。礎石か柱を固定する目的で入れられた石と考えられる。



第21図 K①SP10平・断面図
(1/50)、出土遺物 (1/4)

埋土からは、須恵器や土師器の細片がわずかに出土している。25は須恵器蓋である。口縁端部を折り曲げた形状から、9世紀代の年代が想定できる。

K①SP49 (第22図)

K①区の西半北壁付近で検出した。80cm × 70cm、深さ51cmの楕円形を呈している。

埋土から12世紀代に位置付けられる土師器小皿26が出土している。

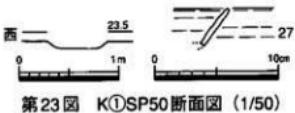


第22図 K①SP49断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K①SP50 (第23図)

K①区の西半北壁沿い、K①SP49に隣接して検出した。60cm × 50cm、深さ7cmの楕円形を呈する柱穴跡である。

埋土から須恵器杯27が出土している。9世紀代に属するものと想定できる。

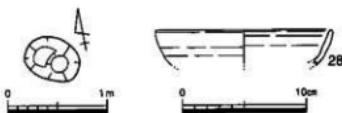


第23図 K①SP50断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K①SP53 (第24図)

K①区の西半北壁沿いで検出した。55cm × 40cmの楕円形を呈し、柱穴跡底面で柱の痕跡を確認した。

埋土から土師器杯28が出土している。形状から12世紀代に位置付けられる土器である。



第24図 K①SP53平面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K②SP01 (第25図)

K②区の西端付近で検出した柱穴跡である。30cm × 25cm、深さ14cmの楕円形を呈している。

埋土から土師器羽釜29が出土した。鉢の下には炭化物が付着する。12世紀代に位置付けられる。

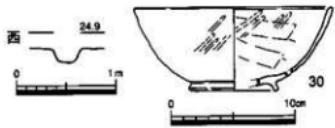


第25図 K②SP01断面図 (1/50) 出土遺物 (1/4)

K②SP38 (第26図)

K②区の中央付近で検出した。30cm × 25cm、深さ14cmの規模で楕円形を呈する。

30は内面のみに炭素を吸着させた黒色土器碗である。12世紀代に位置付けられる。

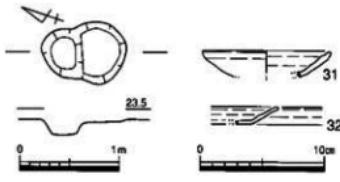


第26図 K②SP38断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K①SP52 (第27図)

K①区の中央付近の北壁沿いで検出した。90cm×50cm、深さ16cmの規模を持つだるま形をした柱穴跡である。柱穴跡底面で柱痕を確認した。

埋土から土師器杯31・32が出土した。形状から14世紀代に位置付けることができる。



第27図 K①SP52 平・断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K①SP83 (第28図)

K①区の西半中央付近で検出した柱穴跡である。K①SD05の埋没後に掘られている。20cm×15cm、深さ6cmの梢円形を呈している。

33は土師器足釜である。外面にススが付着している。14～15世紀代の年代が想定できる。

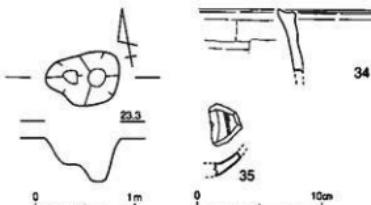


第28図 K①SP83 断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)

K①SP92 (第29図)

K①区の中央付近の南壁沿いで検出した。70cm×50cm、深さ43cmの不整梢円形を呈している。底面で柱痕を確認した。

埋土から、土師器足釜34と青磁碗35が出土している。足釜の口縁部の形状から、14～15世紀代に位置付けることができる。



第29図 K①SP92 平・断面図 (1/50)
出土遺物 (1/4)



K①SP30 (第30図)

K①区の西半の南壁付近で検出した。50cm×40cm、深さ20cmの梢円形を呈する。底面で柱痕を確認した。

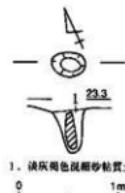
図示できなかったが、土師器・須恵器の細片がわずかに出土しており、9～10世紀代の年代が想定できる。

第30図 K①SP30
平・断面図 (1/50)

K①SP84 (第31図)

K①区の東半中央付近で検出した。30cm×25cm、深さ45cmの梢円形を呈する柱穴跡である。柱穴跡内には柱材の一部が残っていた。

柱穴跡内からの遺物の出土はなく、時期の特定は困難だが、中世に属する構造遺構の埋没後に掘られていることから、中世以降の時期が想定できる。



第31図 K①SP84
平・断面図 (1/50)

K①SP69 (第32図)

K①区の東半部分、北壁沿いで検出した。一部が北壁に掛かっているため、全体の規模は明らかではないが、直径40cm程度、深さ40cmの梢円形を呈する柱穴跡とみられる。柱穴跡の底面付近には柱材の一部が残っていた。

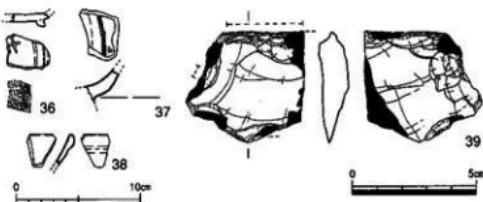
柱穴跡内からの遺物の出土が見られなかったため、時期の特定はできない。先述したK①SP84の北方2.5mに位置しており、この2つを結んだ方向は条里地割の方向と合致している。のことから両者が組み合って機能していたことがうかがえるが、建物の配置にはならず、柵列の一部である可能性が高い。



第32図 K①SP69
平・断面図 (1/50)

(6)包含層出土遺物 (第33図)

36~38はK①区の包含層から、39はK②区の包含層から出土した遺物である。36は須恵器碗である。底部外面にはヘラ書きの文字あるいは記号の一部が認められる。8~9世紀に属するものである。37は中国産の青磁碗である。内面の見込み



第33図 K区包含層出土遺物 (1/2, 1/4)

部分に文様を巡らせている。外面の施釉部分に貫入が著しい。38は玉縁口縁を有した白磁碗である。39はサヌカイト製の打製石庖丁である。半分を欠損するが、端部には紐を掛けるための孔が施されている。弥生時代に属するものである。

(7)小結

K区では弥生時代後期から近世にかけての遺構・遺物を検出した。

弥生時代のものは少なく、K①区の溝状遺構K①SD13と不明遺構K①SX01の2つだけである。いずれも弥生時代後期の遺物が出土しているが、その量は少なく、周辺に居住域の存在を感じさせるような出方ではない。

古墳時代の明瞭な遺構・遺物は確認していない。

古代になると柱穴跡が認められるようになる。特に、尾根上に当たるK②区は後世の著しい削平を受けているにもかかわらず柱穴跡が認められることから、建物跡こそ確認できなかったが、当該地が居住域として土地利用されたことは想像に難くない。

中世になっても居住域としての土地利用は継続したものと見られ、掘立柱建物跡3棟や溝状遺構が認められる。これらはいずれも条里方向と合致する方向を持っていることは、すでに報告した他の地区的状況と同じである。

近世の遺構としては、溝状遺構K①SD11の1条のみを確認しただけであり、居住域としてではなく、耕作地として土地利用がなされたものと見られる。

第3節 N区の調査

1. 調査区の概要

南北幅20~28m、東西長85mの範囲を占めるN区は、3つの小調査区に分けて調査を行った。高松東道路調査D区の南側に隣接する調査区に当たる。標高はおよそ20.0~22.0mで、東西両端で約2mの標高差を有している。調査前は宅地及び水田として土地利用されていた。宅地であったN②・③区だが、かつては水田であり、旧耕作土上に花崗土を盛土して宅地としていた。

N区では遺構検出面を1~2面確認している。西から順に、N③区、N①区、N②区と並ぶが、いずれも上から第1面が古代以降、第2面が弥生時代以前となっている。N②区については、遺構の埋土とベース層の識別が困難な部分もあり、遺構検出面を上・中・下層の3面と認識して調査を行ったが、今回の整理作業において中層が分離できることが判明したため、2面にまとめ直して報告を行っている。

なお、N区は縄文時代の遺物は弥生時代以降の遺物と一緒に出土していることから、縄文・弥生時代をまとめて報告する。

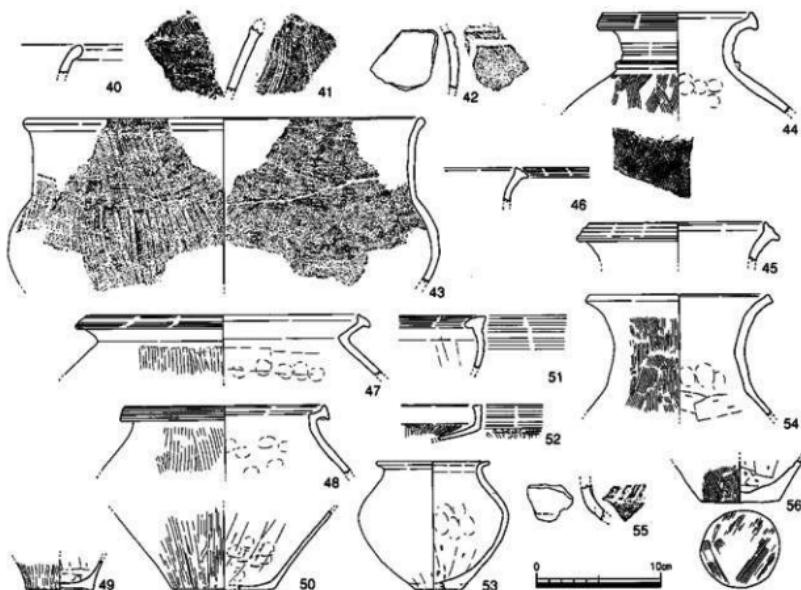
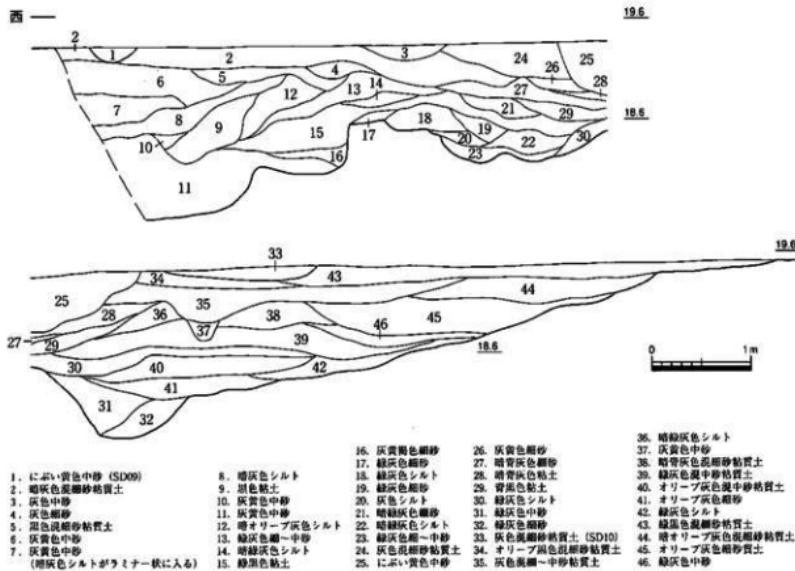
2. 調査の成果

(1)縄文・弥生時代の遺構・遺物

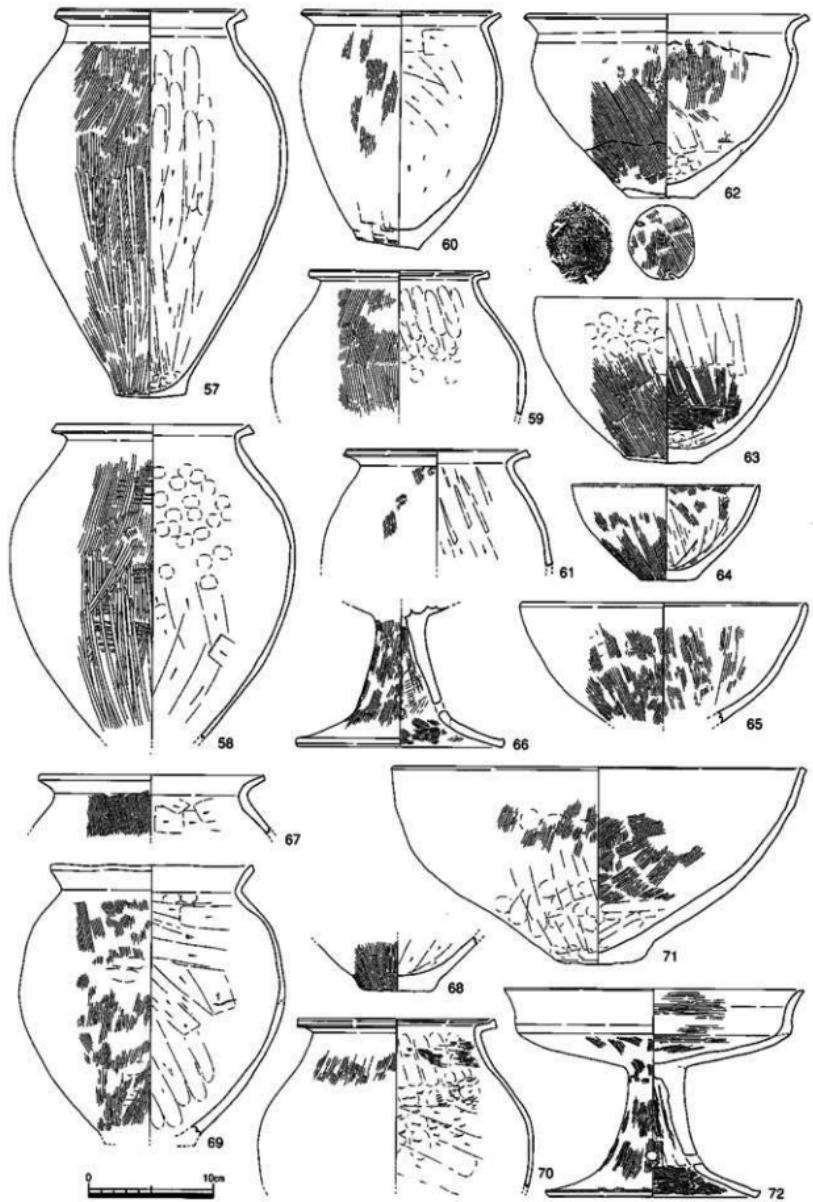
N③SR01 (第34~37図)

N③区西半、第2面で検出した自然河川跡である。横断面調査J④・③区で検出した自然河川跡が、高松東道路調査D⑤区を経由(SR01)して、N③区に連続してきたものである。北東から南西に向かって流下していたものである。西側の岸部はN③区とM①区の境となる市道の下で、確認することはできなかったため、検出した部分で長さ17.9m、幅11.5m、深さ1.7mの規模を測る。河川の底面には著しい凹凸が認められ、流路を変えながら削っていった結果と考えられる。埋土は砂層と粘土層に大別され、それらが互層をなしながら堆積している状況がうかがえる。すなわち、J④・③区やD⑤区でも見られたように、流水と滝水を繰り返しながら次第に埋没していったことがわかる。これらの埋土は、概ね上・下層に二分してとらえることが可能であるが、調査時は土質の変化を単位として掘り下げ・遺物の回収を行っており、それに従って報告をする。遺物の出土状況を概観すると、下層の最下部の砂層中に縄文時代後期の遺物が小量含まれる以外は下層に遺物はほとんど見られないのに対し、上層では砂層・粘土層を問わず、弥生時代中期末~後期の土器を中心とする遺物が含まれているという違いが見られる。また、上層の弥生土器は河川の北寄りの場所からまとめて出土した。

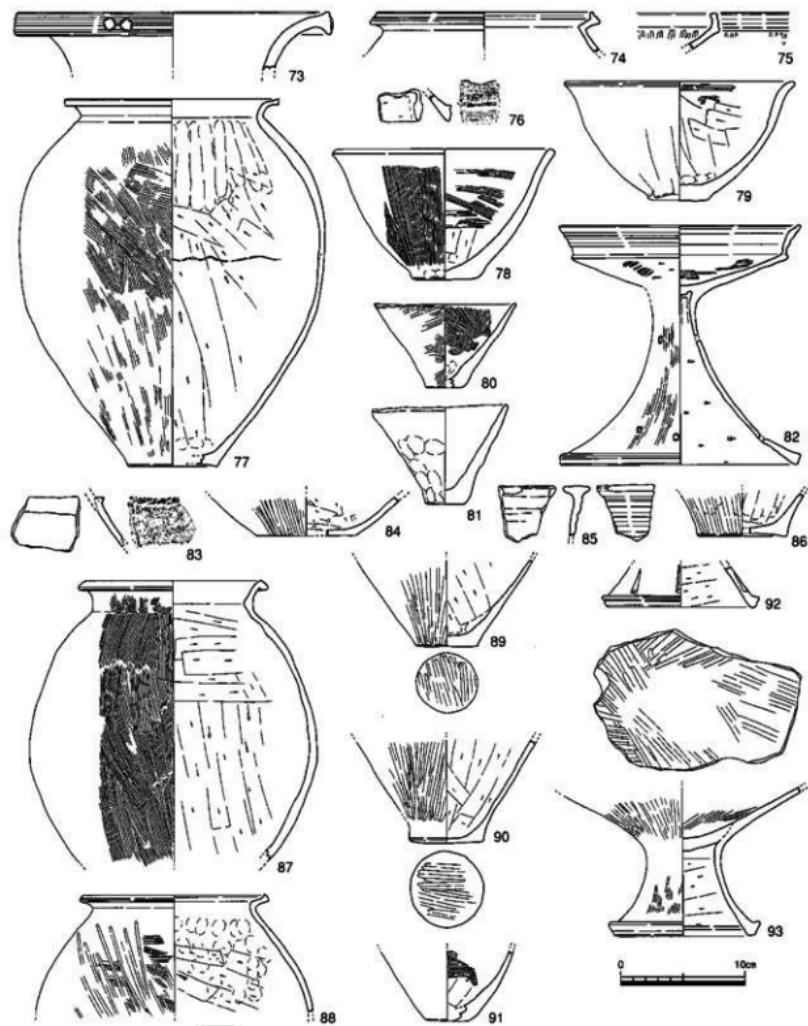
40~43、94~99は下層の砂層から出土した遺物である。40・41・43は縄文土器深鉢、42は縄文土器浅鉢である。40は口縁端部を肥厚させている。41は山形口縁を持つものと思われ、内面には刻み目状の沈線文、外面には複数の弧状の沈線文を施している。43も口縁端部を肥厚させた深鉢で、外面には櫛状工具による多条線文が見られる。42は浅鉢の体部で太い沈線文の間に縄文が認められる。これらは永井I~II式に相当するもので、縄文時代後期前半に位置付けられる。94~99はサスカイト製の打製石器である。94は有舌尖頭器である。長身で幅が狭いもので短い舌部と基部に返しを有する。縄文時代草創期に位置づけられる。95・97はスクレイバーと判断した。95は片面に自然面を残しているものの、片側の側縁部に刃部加工を施している。97は一端を欠損している。96は石匙としたがスクレイバーの可能性も残る。自然面を残しており製作途中のものの可能性がある。98・99は石斧である。



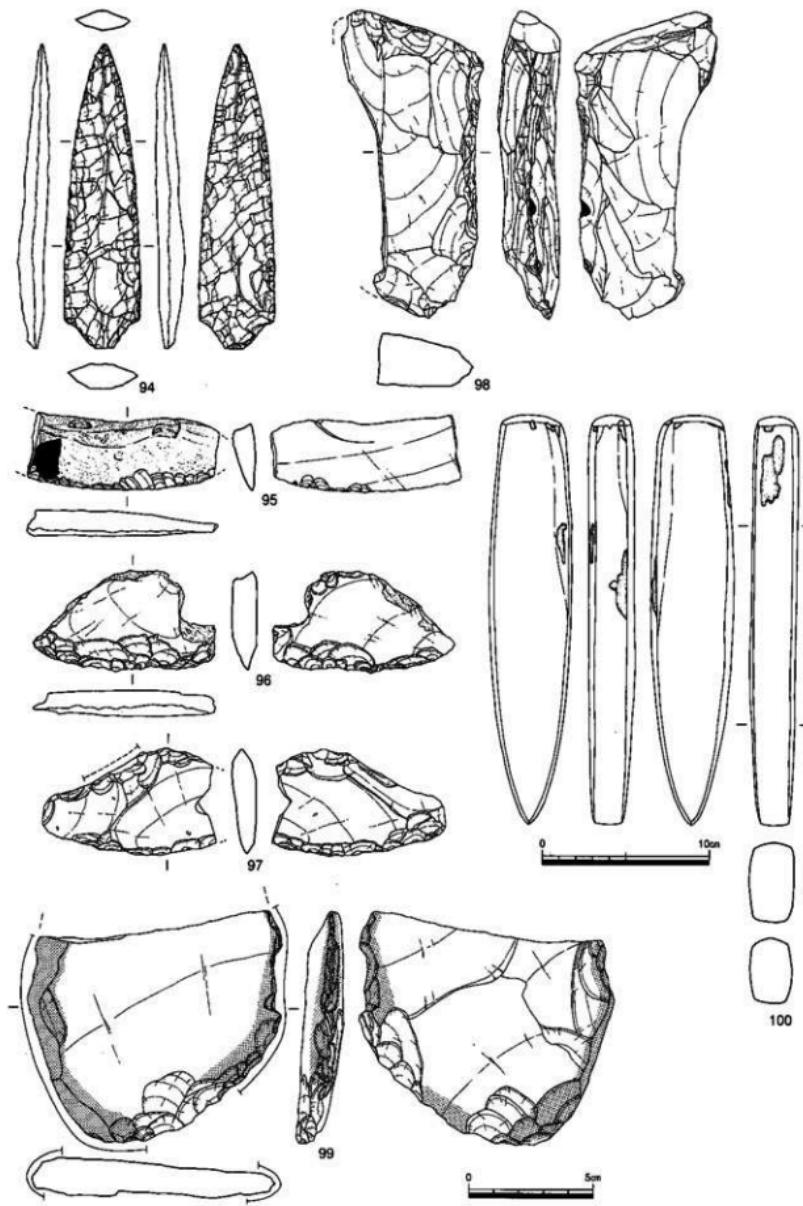
第34図 N③SR01断面図 (1/50)、出土遺物① (1/4)



第35図 N③SR01 出土遺物② (1/4)



第36図 N③SR01出土遺物③ (1/4)



第37図 N③SR01出土遺物④ (1/2, 1/3)

98は使用痕が見られず製作途中で折損したもの、99は刃部に使用痕が認められ使用中に折れたものと考えられる。

44～52は上層の褐色細砂層から出土した遺物である。44～46は弥生土器壺である。いずれも外方に開く口縁部を持ち、端部は上下に拡張して凹線を巡らせている。44は頸部に貼付突帯を1条巡らし、胴部上半には工具（ハケ原体）による格子状の模様を施す。47～50は弥生土器壺である。47・48は強く屈曲する口縁部を持ち、端部を上下に拡張して凹線を巡らせている。49・50は壺の底部で平底である。51は内弯気味に立ち上がる口縁部を持つ弥生土器鉢である。口縁端部は拡張し上面及び外面に凹線を巡らす。52は弥生土器高杯である。屈曲して直立する口縁部で端部をわずかに拡張している。外面には凹線を巡らす。これらはその形状から弥生時代中期末の年代が想定される。

53～72は上層の黒褐色粘土層から出土した遺物で、このうち68～72は自然河川の北寄りで確認した土器集中部から出土した遺物、67は8～9世紀代の土師器壺で古代の遺構からの混入品である。53～56は弥生土器壺である。53は扁球形の胴部に強く外反する口縁部が付く形態のもので、平底をしている。54は緩やかに外方に開く口縁部で、外面のハケメ調整が顕著である。55は肩部の破片で、ハケ原体の小口による刺突文を巡らしている。56は平底の底部である。57～61は弥生土器壺である。57～59は倒卵形の胴部に強く外方へ屈曲する口縁部を持つものである。58・59は底部を欠損するが、57と同様の平底であると思われる。ちなみに、57は特徴的な胎土を持つ「下川津B類土器」である。60・61は長楕円形の胴部になだらかな肩部を持つ壺である。62～65は弥生土器鉢である。短く外反する口縁部のもの（62）と内弯気味の直口口縁のもの（63～65）がある。底部の判明しているものはすべて平底である。62は底部外面に粉圧痕が認められる。66は弥生土器高杯の脚部である。屈曲して外へ開く形態で、屈曲部付近に4つの透かし穴を有している。68は弥生土器壺で、平底を有している。69・70は弥生土器壺である。球形の胴部に大きく外方に開く口縁部を持つ69と倒卵形の胴部で屈曲した口縁部を持つ70がある。71は直口口縁を持つ大型の弥生土器鉢である。72は弥生土器高杯である。屈曲して外反する口縁部を持つ杯部に途中で屈曲して開く脚部が付いた形態をしている。脚部には4つの透かし穴を施す。これら上層の黒褐色粘土層から出土した遺物は、土器集中部も含めて、その形状から弥生時代後期中葉に位置付けられる。

73～82は上層の黄灰色砂層から出土した遺物である。73は弥生土器壺である。大きく外方に開く口縁部で、端部を上下に肥厚させて凹線と2個1組の円形浮文を施している。74・77は弥生土器壺である。74は強く屈曲した口縁部で端部を上方に拡張して凹線を巡らせる。77は倒卵形の胴部に外反しながら屈曲する口縁部を持つ壺で、平底をしている。75・76・82は弥生土器高杯である。75は屈曲して短く立ち上がる口縁部の外面に凹線を巡らせている。76は端部を幅広く拡張気味に肥厚させた脚部で、外面に刺突文を施した「下川津B類土器」である。82は屈曲して短く外反する口縁部を持った杯部に緩やかに外反する脚部が付いた高杯である。口縁部外面には凹線を巡らせており、杯部の内外面は4分割ミガキで仕上げている。脚部には上下2段に透かし穴が穿たれている。78～81は弥生土器鉢である。内弯気味に立ち上がり端部付近を外反させるもの（78・79）と、直線的に外方へ開く形態を持つもの（80・81）があるが、いずれも平底である。これらはその形態から、弥生時代中期末に位置付けられるもの（73～76）と弥生時代後期後半に位置付けられるもの（77～82）に分けられるが、これらが混在した状態で出土している。

83～85は上層の灰色粘土層から出土した遺物である。83は刻み目突帯を巡らせた弥生土器壺の破片

と判断した。胴部上半外面にはヘラ描きの沈線文が施されている。頭部に刻み目突堤を貼り付けた凸蒂文系の小型の壺で、弥生時代前期に位置付けられよう。84は平底を呈する弥生土器壺としたが、壺の底部である可能性もある。85は口縁端部を内外に拡張した弥生土器鉢である。外面には凹線を巡らせている。84・85は弥生時代中期末～後期前半の年代が想定される。

86は弥生土器壺の底部である。平底を呈している。自然河川跡の埋没後に掘られたN③SD10に属する遺物の可能性が高く、弥生時代後期に位置付けられるものである。

87～93・100は層位の判明しないN③SR01の出土遺物である。87～90は弥生土器壺である。87は継長の球形をした胴部に外反気味に立ち上がる口縁部を持つ。口縁端部は外方へ折り曲げている。88は肩の張った倒卵形の胴部に強く屈曲する口縁部を有している。89・90は平底を呈しており、外面のヘラミガキ調整が顕著である。91は平底を持つ弥生土器鉢と判断したが、壺の底部である可能性も残る。92・93は弥生土器高杯である。92は直線的に裾が開いた形状の脚部で端部を肥厚させて凹線を巡らせている。外面には矢羽状の刺突文を施している。93は大きく外反する脚部で端面を拡張して凹線を巡らせている。杯部と脚部の接続は円盤充填を用いている。ヘラミガキ調整が顕著なものである。100は結晶片岩製の柱状片刃石斧である。これらは弥生時代中期末～後期前半に位置付けられるものであり、恐らく自然河川跡の上層の埋土に含まれていたものと想定できる。

遺物の年代観からみれば、N③SR01は縄文時代後期頃から埋没が始まり、度重なる流水・滌水を繰り返した弥生時代後期頃にはほぼ埋没を完了して、河川としての機能は失われたものと判断できる。

N①SD07（第38図）

N①区の南西隅付近、第2面で検出した検出長2.0m、幅0.8m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。北端は自然河川跡N①SR01に接続している。断面形状は逆台形を呈している。図示できなかったが、弥生時代後期に位置付けられる弥生土器壺・高杯の破片が出土している。

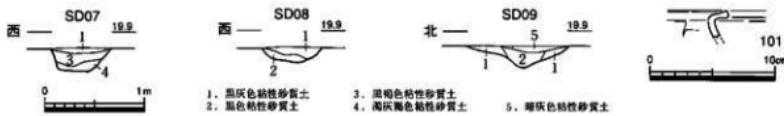
N①SD08（第38図）

N①区の中央部南壁沿い、第2面で検出した検出長3.7m、幅0.8m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。S字を描くように緩やかにカーブしている。断面形状は浅い逆台形を呈する。北西方向の延長線上にN①SR01の突出部があり、そこに接続していた可能性がある。弥生時代後期に位置付けられる弥生土器壺の破片が出土している。

N①SD09（第38図）

N①区の南壁沿い、第2面で検出した検出長8.2m、幅1.1m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。緩やかな弧を描いており、断面形状は浅い三角形を呈している。

101は強く屈曲する口縁部を持った「下川津B類土器」の弥生土器壺である。これ以外にも埋土中か



第38図 N①SD07・08・09断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

らは弥生土器壺・高杯の破片等が出土しており、弥生時代後期に位置付けられる。

N②SD07 (第39図)

N②区の西壁沿い、第2面で検出した検出長11.6m、幅0.8m、深さ0.2mの規模を有する溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈している。溝状遺構の方向が古代以降のものとほぼ一致する点に問題があるが、弥生時代後期に位置付けことができる弥生土器片がわずかに出土しており、ここでは弥生時代に属する溝状遺構と捉えておく。

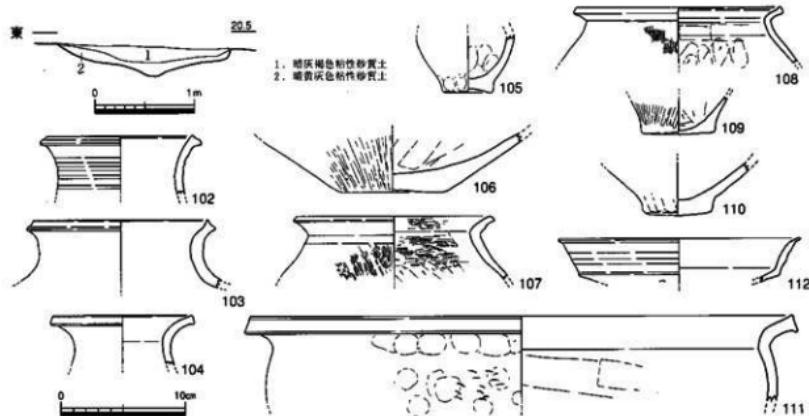


第39図 N②SD07
断面図 (1/50)

N②SD08 (第40図)

N②区の東半、第2面で検出した検出長15.0m、幅1.8m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。北東から南西方向に向かっており、高松東道路調査D②・③区のSD02に連続する溝状遺構である可能性が高い。断面形状は浅い三角形を呈しており、高松東道路調査D②・③区のSD02の下部と類似している。埋土がどちらも細砂・砂質土であることも溝状遺構の連続性を示す傍証となる。

埋土からは102～112の弥生土器が出土している。102～106は弥生土器壺である。102は緩やかに外反する口縁部を有しており、外面には4条の凹線が認められる。口縁端部は下方に拡張して凹線を巡らしている。103は外反の度合いが強いもので、端部をわずかに拡張し凹線を巡らす。104は直立気味の頸部に外反する口縁部を持つもので、端部は拡張気味である。105は小型品の胴部下半で、上げ底気味の平底である。壺の底部の可能性もある。106はやや凹み気味の平底をしている。107から110は弥生土器壺である。107・108は強く屈曲する口縁部を有するものだが、108は「下川津B類土器」で、肥厚気味の口縁端部を持っている。109は平底、110は突出気味の平底をしている。110は鉢の底部の可能性がある。111は弥生土器鉢である。大きく外方へ屈曲する口縁部を持った大型品である。112は弥生土器高杯の杯部である。屈曲したのち外方へ開く短めの口縁部を有し、外面に凹線2条を巡らせている。こ

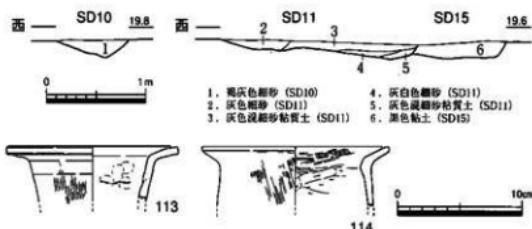


第40図 N②SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

これらはその形状から、102の壺は弥生時代中期、103の壺は弥生時代中期末頃、それ以外は弥生時代後期前半に位置付けられる。高松東道路調査D②・③区SD02出土遺物の年代とも合致しており、さらに溝状遺構の連続性を高めるものと判断できよう。

N③SD10・SD11（第41図）

N③区の中央付近、第2面で検出した溝状遺構である。調査区を南東から北西方向に横切っているもので、埋土は細砂・砂質土層となっている。調査時には南部部分をN③SD11と認識してい



第41図 N③SD10・11・15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

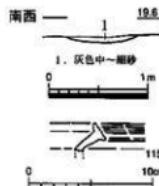
たが、北半部分については自然河川跡N③SR01の堆積層の一つの砂層と誤認して調査を行った。河川の断面観察中に溝状遺構の存在に気づきN③SD10の番号を付したが、整理の時点でのこの2条の溝状遺構は本来1条のものであることに改めて気付いたため合わせて報告する。断面形状は三角形から浅い皿形を呈しており、検出長19.0m、幅0.9~2.0m、深さ0.2mの規模を測る。

113・114はN③SD11から出土した弥生土器壺である。113はくの字形に外方へ屈曲する口縁部を持つもので、114は肩の張らない胴部に屈曲する口縁部が付くものである。どちらも弥生時代後期に位置付けられるもので、この年代観は、先にN③SD10に属する可能性を指摘した壺底部86とも齟齬はない。

N③SD13（第42図）

N③区の中央付近、第2面で検出した検出長12.2m、幅0.8m、深さ0.1mの規模を有する溝状遺構である。北西から南東の方向を持っており、断面形状は浅い皿形を呈している。北西部は自然河川跡N③SR01に重なっており、河川の埋没後に掘られたことがわかる。

埋土中からは弥生土器片がわずかに出土している。115は弥生土器壺である。屈曲する口縁部で、端部を上下に拡張して外面に凹線を巡らせていている。形状から弥生時代後期前半に位置付けられる。



第42図 N③SD13
断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

N③SD15（第41・43図）

N③区の東半、第2面で検出した不整形な弧状の平面形をした溝状遺構である。溝状遺構の両端は調査区東・北側へ連続すると推察されるが、東側のN①区では続きを検出できていない。検出長17.7m、幅2.8m、深さ0.1mの規模を測り、断面形状は浅い皿形を呈している。N③SD15南西の屈曲部付近でN③SD11と、また、南東辺ではN③SD14と重なりが認められ、これら2条の溝状遺構よりも先行して掘られた溝状遺構であることがわかる。

埋土の黒色粘土層から116~119の遺物が出土している。116・117は弥生土器壺である。116は大きく外反したのちに屈曲して直立する二重口縁を持つ壺である。内外面のヘラミガキ調整が顕著である。117は壺の底部で、平底を呈している。底部外面には押圧痕1個が認められる。118・119は弥生土器壺

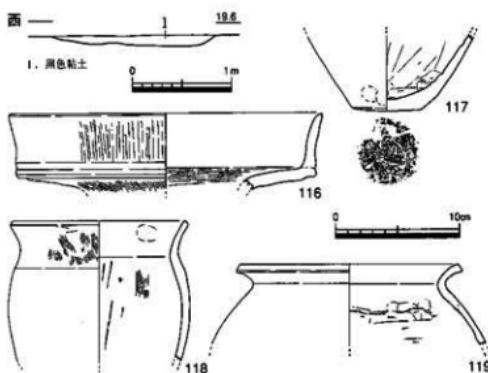
である。118は砲弾形の颈部に緩やかに外反する口縁部が付いたもので、外面のハケメ調整が顕著である。119は球形の颈部に短く外反する口縁部を持つものである。

これらの土器の形状から、弥生時代後期の年代が想定される。

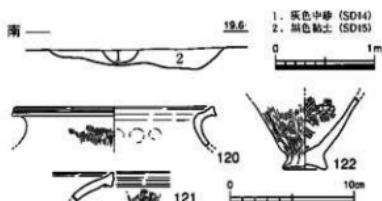
N③SD14（第44図）

N③区の南東隅付近、第2面で検出した検出長5.1m、幅0.5m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状構造である。断面形状は深いU字形を呈する。

埋土からは120～122の土器片が出土している。120は弥生土器壺で、肥厚させた口縁端部に凹線を1条巡らせた「下川津B類」である。121は弥生土器壺で、拡張させた口縁端部に凹線を巡らせる。122は弥生土器鉢である。突出した底部を有する。これらの土器はその形状から、弥生時代後期に位置付けられる。



第43図 N③SD15断面図(1/50)、出土遺物(1/4)



第44図 N③SD14断面図(1/50)、出土遺物(1/4)

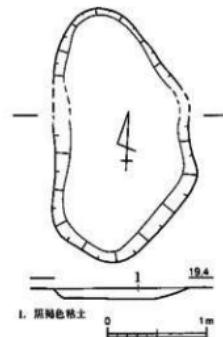
N③SK01（第45図）

N③区西半の南壁沿い、第2面で検出した不整長楕円形を呈する土坑である。2.5m × 1.4m、深さ0.1mの規模を測り、断面形状は浅い皿形を呈している。

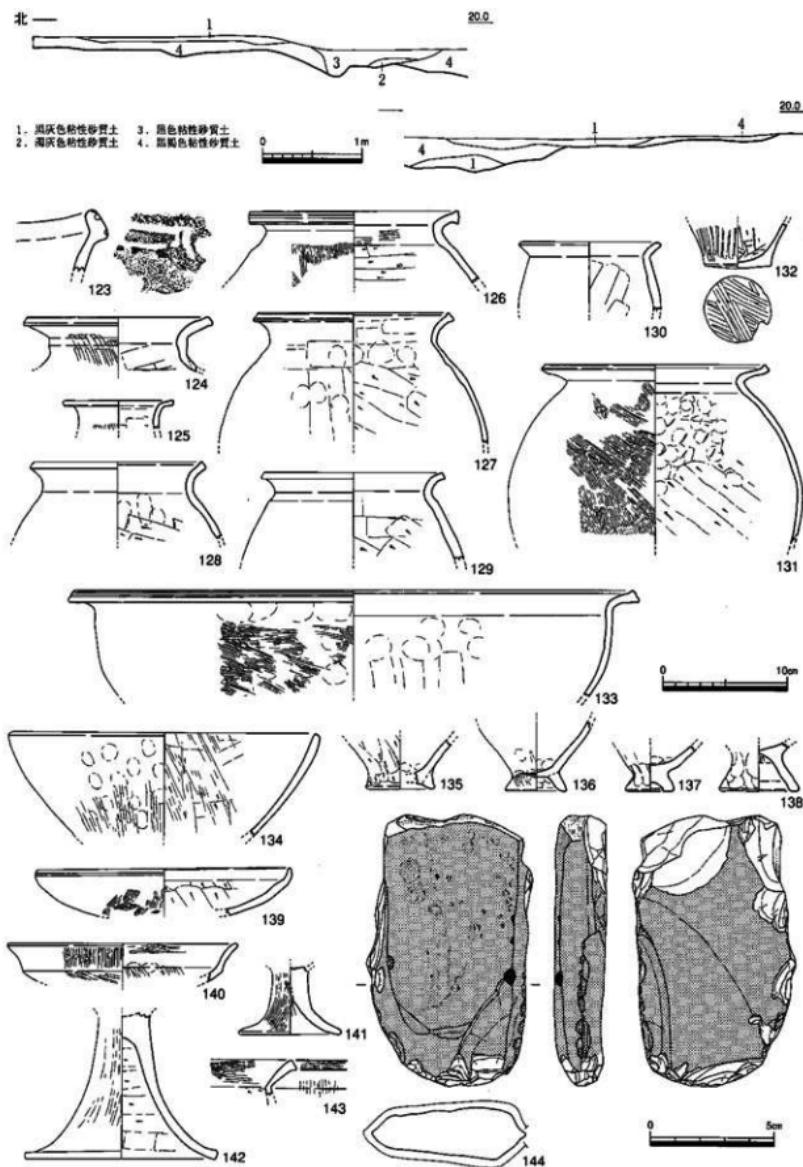
埋土は黒褐色粘土の単層で、弥生土器と想定される土器細片がわずかに出土しており、当該期に属する土坑と判断した。

N①・②SR01（第46図）

N①区北半およびN②区北西隅付近のいずれも第2面で検出した落ち込み状の遺構である。調査時には自然河川跡と認識したため、SRの遺構略号を付した。しかし、流路に相当する部分がなく、自然河川がオーバーフローした際の後背湿地に相当すると思われるが、今回はそのままの略号を用いて報告する。深さは20～30cmと浅く、底面にはわずかな凸凹が認められる。このN①・②SR01はN③区にも及んでいたが、N③区の調査時には第1・2面間の希薄な遺物包含層として掘り下げている。このN①・②SR01をもたらした自然河川跡（流路跡）についてはN区北側の高松東道路調査D②・③区を流下するSR02が想定できる。このD区SR02は南北方向から屈曲して南西方向に流下するもので、その延長



第45図 N③SK01
平・断面図(1/50)



第46図 N①・②SR01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4)

に相当する部分は横断面調査区の南部分では検出していない。N③区と北側の高松東道路調査D⑤区の間には工事用仮設道部分で未調査の部分があり、この箇所でN③SR01に合流しているものとみられる。D②・③SR02が屈曲して南西方向に流れを変えた南側にN①・②SR01が存在しているのである。すなわち、強い流れがあった際に遠心力の強く働く流れの外側に当たっていることも、N①・②SR01が河川の後背湿地に相当する傍証となり得る。

埋土からは土器を中心に123～144の遺物が出土している。123は縄文土器の深鉢である。山形口縁で、口縁端部には縄文を、外面には太い沈線文を施している。彦崎K I式の特徴を持ち、縄文時代後期前半に位置付けられよう。124～126は弥生土器壺である。124・125は直立する頸部から大きく外方へ開く口縁部を持つもので、125は「下川津B類」土器である。126は口縁端部をわずかに拡張させ、凹線を巡らしたもので、壺に含めたが壺の可能性もある。127～132は弥生土器壺である。丸く肩の張った胴部に外反する口縁部を持つもの（127～129）、肩の張らない胴部に外反する口縁を持つもの（130）、肩の張った球形の胴部に強く屈曲する口縁部を持つもの（131）などが見られる。131は「下川津B類」土器で、内面には成形時の指頭や爪の痕跡が明瞭に残る。132は底部で、平底を呈している。133～138は弥生土器鉢である。内湾して立ち上がり外方へ屈曲する口縁部を持つ133や内湾気味に立ち上がる直口口縁の134などが見られる。135は上げ底気味の鉢の底部としたが、外面の調整から製塩土器の可能性もある。136～138は脚台の付いた底部である。139～142は弥生土器高杯である。杯部の形態には、浅い椀状をした139と、途中で屈曲して外反する140の2タイプが見られる。141・142は脚部で、外反して開く裾部を持つ141と屈曲して開く142の2タイプがある。143は8世紀代の土器器壺口縁部で、後世の混入品である。144はサヌカイト製の打製石斧である。片面に自然面を残している。全体に稜が丸くなるほど使用による磨滅痕が認められ、長期間使用されたものと判断できる。

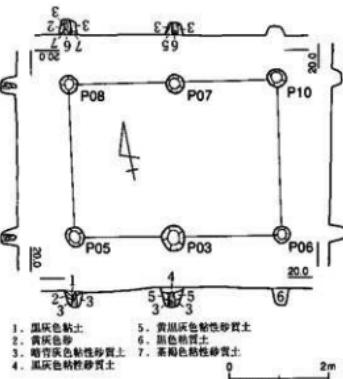
これらの土器はその形態から弥生時代後期後半に位置付けられるものである。大半の土器には磨滅が認められ、流路を流されてきたものが、オーバーフローしてここに留まったものと判断できる。

(2)古代の遺構・遺物

N①SB01 (第47図)

N①区の北東隅付近、第2面で検出したが、本来は第1面に属するものである。1間×2間の掘立柱建物跡である。4.2m×3.2mの規模で、床面積は13.4m²を測る。建物主軸はN81°Wの方向を有する東西棟である。建物跡を構成する柱穴跡のうち、SP03・05・07・08の4基には直径10cm程度の柱痕が遺存していた。礎石や詰め石等は認められない。

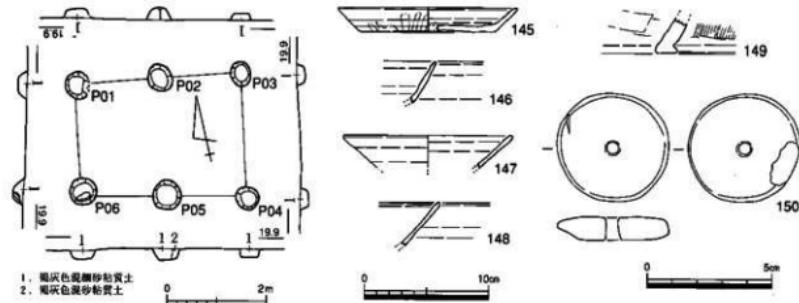
SP05の埋土から、古代に属すると見られる土器器の細片がわずかに出土しており、年代的な根拠に乏しいが、古代に位置付けられる建物と判断する。



第47図 N①SB01平・断面図 (1/100)

N③SB01 (第48図)

N③区南西隅付近、第1面で確認した1間×2間の掘立柱建物跡である。2.5m×3.4mの規模を持つ東西棟で、床面積は8.5m²を測る。建物主軸はN80°Wの方向を有している。145～150は柱穴跡(SP01・02・06)から出土した遺物である。145は内外面に火棒痕の残る須恵器皿、146は須恵器杯、147・148は土師器杯である。149は土師器瓶の底部で、一部に黒い焦げが見られる。150は砂岩製の纺錘車で、建物下位の自然河川に含まれた弥生時代の遺物が混入したものであろうか。150を除いた土器の年代観から、この建物は9～10世紀代に位置付けられる。



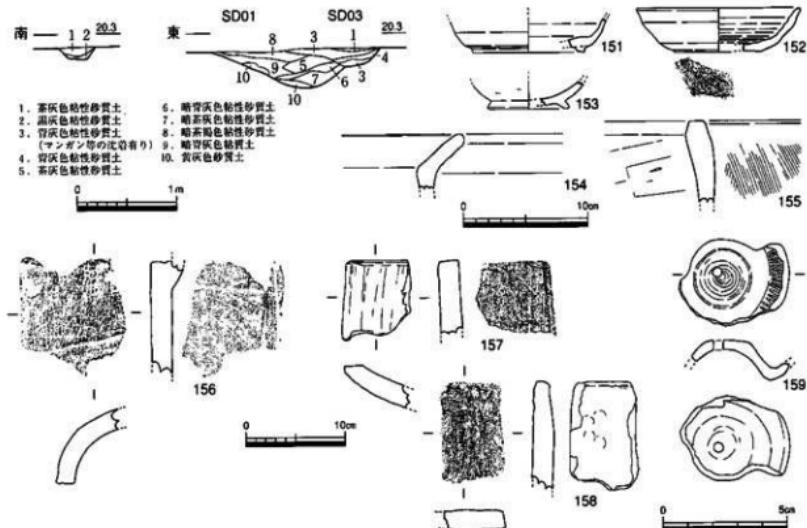
第48図 N③SB01 平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/2、1/4)

N①SD01 (第49図)

N①区中央付近、第1面で検出した検出長19.7m、最大幅2.5m、深さ0.2mの規模を持つ溝状造構である。調査区南東隅付近から北西方向を向いているが、途中で緩やかに屈曲して西方向へ向きを変えている。西壁付近ではN80°Wの方向を有している。この溝状造構の西方はN③SD04に連続するものと想定され、さらに西方へ伸びることになる。断面形状は、幅の広い南東部分が浅い逆三角形を呈し、幅の狭い西壁付近が逆台形を呈している。

埋土から151～159の遺物が出土している。151は須恵器碗である。逆台形の貼付高台を持つ。152は土師器杯である。底部の切り離しは回転糸切りによるものである。153は土師器碗である。外方に張り出す高台を付している。154は土師器甕の口縁部、155は土師器甕の口縁部である。156是有段式の丸瓦である。157・158は平瓦である。157は凹面に残るべき布が凸面に見られるもので、通常の平瓦とは異なる製作方法・使用をしたものであろうか。159は白銀色を呈した青銅製の用途不明品である。ソンブレロ帽によく似た形状を呈しており、周縁部を欠損しているため、本来の形状・規模は判明しない。中央の突出部の外面には同心円状の線状痕が、内面には回転力を利用したと思われる切削痕が明瞭に残っている。また、中心部をやや外れた位置に直径3mmの孔が穿たれている。周縁部の外面にはタガネ状工具による細かい敲打痕あるいは文様が施されている。この外側で折損しているのだが、その破断面の後に磨滅が見られる部分もある。仮具や密用具等の類例を探してみたが、該当するものは見当たらず、その全体の形状や用途等については現在のところ判明しない。

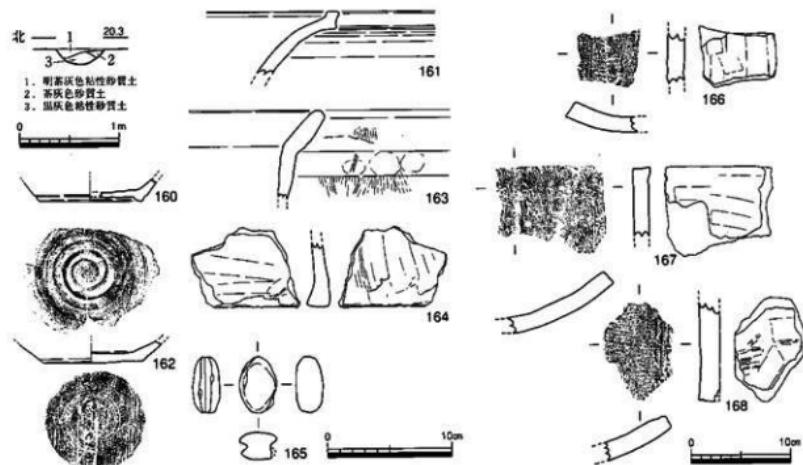
159を除いた土器の形態から、9～10世紀を中心とした年代が想定できる。



第49図 N①SD01、SD01・03重複部断面図 (1/50)、出土遺物 (1/2、1/4、1/5)

N①SD02 (第50図)

N①区の中央部、第1面で検出した検出長9.7m、幅0.7m、深さ0.2mの規模を持ち、緩やかに弧を描いた溝状遺構である。東端はN①SD01の下位に潜り込んでおり、西北端は中世の溝状遺構N①SD03と重なった所で途切れているらしく、その延長部分は確認できていない。断面形状は浅いU字形を呈して



第50図 N①SD02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)

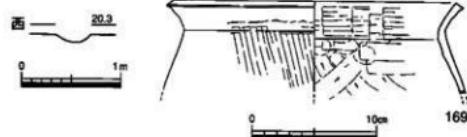
おり、直線的な部分ではN79°Wの方向を有している。

160～168は埋土から出土した遺物である。160は突出度の低い高台を付した須恵器壺である。161は須恵器壺で、口縁端部を上方へ拡張して面取りを行っている。162は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が見られる。163は土師器壺で、内外面にススが付着する。164は土師器の底底部である。165は土師器の有溝土鏡である。166～168は平瓦である。いずれも凹面に布圧痕が残り、凸面はタキ痕を板ナデで消している。

160は9～10世紀に位置付けられるが、161～163は12世紀代の年代が想定される。遺構の重複関係からN①SD02は古代のN①SD01に先行するものであり、160の遺物の年代が溝状遺構の年代と考えられる。161～163などの遺物の年代は、後述する中世の溝状遺構N①SD03と同じであり、これらの遺物は、北西端の重複部分において調査時に混入してしまった遺物と判断できる。

N①SD05（第51図）

N①区の東壁付近の中央、第1面で検出した検出長1.4m、幅0.4m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。南端はN①SD01の下位に潜り込み、北端はN①SD03直前で途切れている。断面形状は浅いU字形を呈し、N 6°Eの方向を有している。埋土から土師器壺169が出土している。その形状から9～10世紀に位置付けられる。

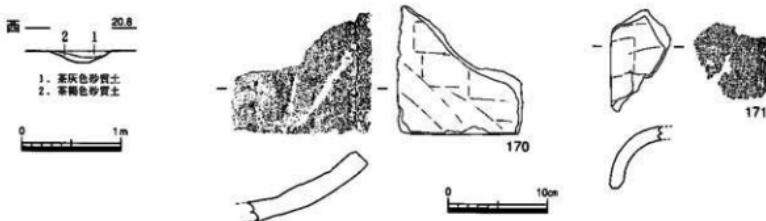


第51図 N①SD05断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

N②SD02（第52図）

N②区の西半、第1面で検出した検出長10.7m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を測る直線的な溝状遺構である。断面形状は浅いU字形を呈し、N 4°Eの方向を有している。

170・171は埋土から出土した瓦である。170は平瓦、171は丸瓦である。このほかに、図化できなかつたが、須恵器の壺や杯、内外面とも炭素を吸着させた黒色土器壺の破片等が出土しており、それらの形状から、9～10世紀代の年代が想定される。



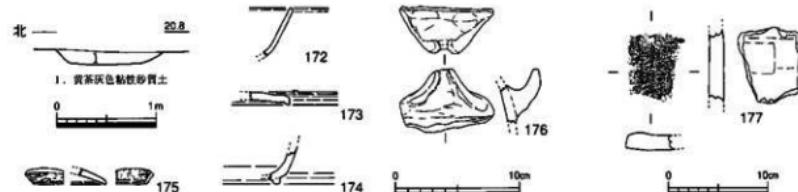
第52図 N②SD02断面図（1/50）、出土遺物（1/5）

N②SD03（第53図）

N②区の中央部、第1面で検出した検出長17.8m、幅1.3m、深さ0.2mの規模を測る直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈し、N87°Wの方向を有する。先述したN②SD02とは一部で重なる

が、N②SD03の方が先行する溝状遺構である。

埋土からは172～177の遺物が出土している。172は須恵器杯である。173は須恵器蓋で口縁端部を下方へ折り曲げて成形している。174は須恵器碗である。175は土師器蓋で、内外面に赤彩の痕跡が残る。蓋として固化したが、皿の可能性も残る。176は土師器窓の把手である。三角形の粘土板を貼り付けて把手としたものである。177は平瓦である。焼成は良好で須恵質を呈している。これらの土器の年代観から、N②SD03は8～9世紀代に位置づけることができる。



第53図 N②SD03断面図（1/50）、出土遺物（1/4、1/5）

N②SD05（第54図）

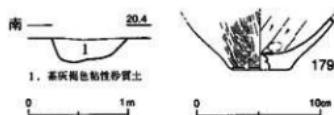
N②区東壁付近、第1面で検出した検出長7.4m、幅0.8m、深さ0.1mの規模を持つ蛇行した溝状遺構である。N②SX02の埋没後に掘られたもので、概ね北から南に向かって流下しているようである。高松東道路調査D②区で検出している溝状遺構（遺跡略号なし）に接続する可能性がある。断面形状は浅い逆台形を呈している。178は土師器杯である。これ以外に、固化できなかったが、平行タキを施した須恵器窓片があり、9～10世紀に位置づけることができる。



第54図 N②SD05断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

N②SD09（第55図）

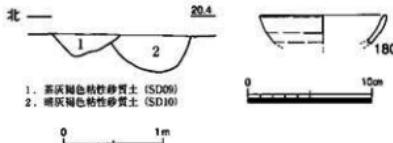
N②区中央付近の南壁沿い、第1面で検出した検出長7.5m、幅0.9m、深さ0.2mの規模を測る直線的な溝状遺構である。断面形状はU字形を呈し、N82°Wの方向を有している。埋土は茶灰褐色粘性砂質土の単一層で、固化できなかったが須恵器杯片のように、古代に位置付けられる土器片がわずかに出土している。固化した179は弥生土器窓の底部で、全体に磨滅が著しいもので、下位に存在するN②SD08の遺物の混入品である。



第55図 N②SD09断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

N②SD10（第56図）

N②区の南壁沿い、第1面で検出した検出長2.5m、幅0.8m以上、深さ0.4mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状はU字形を呈しており、短い検出長であるがN88°Wの方向を有している。先述した古代の溝状遺構N②SD09と



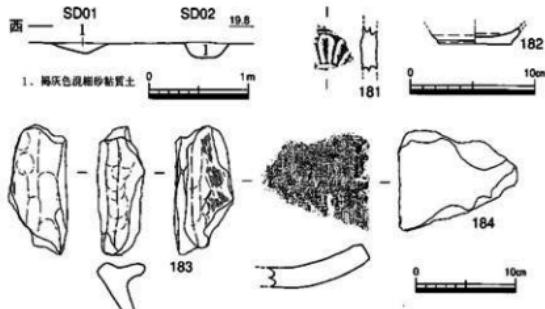
第56図 N②SD10断面図（1/50）、出土遺物（1/4）

ほとんど重複するように存在しており、N③SD09に先行する溝状遺構と判断できる。180は須恵器杯で、7～8世紀代に位置付けることができる。これ以外にも8世紀代に想定される須恵器片が出土している。

N③SD01（第57図）

N③区の中央部の北壁沿い、第1面で検出した検出長5.0m、幅0.7m、深さ0.1mの規模を測る直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆三角形を呈しており、N8°Eの方向を有する。隣接するN③SD02とはほぼ平行しており、同時に機能していた可能性が高い。181は軒丸瓦の瓦当の中央部の破片である。

全体の大きさはわからないが、細弁17葉と思われる。内区と外区の境に圓線2条、中房の周間に圓線1条を巡らせている。8世紀代に位置付けられる。これ以外にも、図化できなかったが須恵器杯、赤彩土器等があり、溝状遺構の年代は9世紀代に想定できる。181は近辺から混入したものと考えられる。



第57図 N③SD01・02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)

N③SD02（第57図）

N③区の北壁沿い第1面において、N③SD01に隣接して検出した検出長4.7m、幅0.9m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い逆台形を呈しており、N10°Eの方向を有する。埋土からは182～184の遺物が出土している。182は土師器杯である。9～10世紀に位置付けられよう。183は土師器壺、184は平瓦片である。

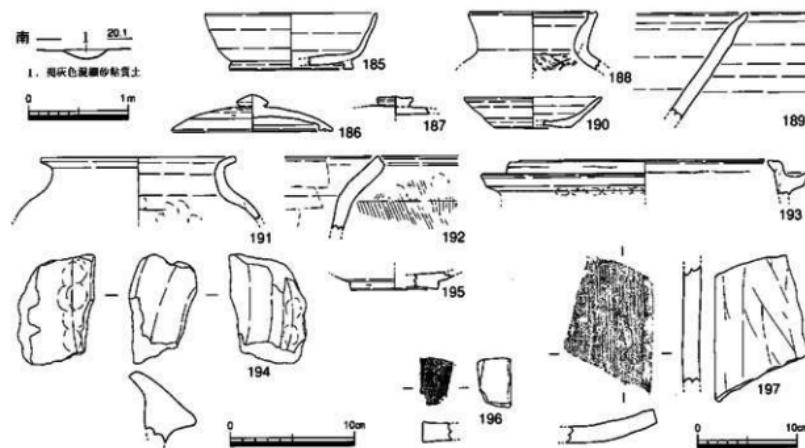
N③SD04（第58図）

N③区の西半中央付近、第1面で検出した検出長14.9m、最大幅1.0m、深さ0.1mの規模を測る緩やかに弧を描いた溝状遺構である。先述した溝状遺構N①SD01に連続するものと想定され、東半部分は後世の溝状遺構N③SD05によって壊されている。断面形状は浅い皿型を呈しており、概ねN63°Wの方向を有しているものと見られる。

埋土からは185～197の遺物が出土している。185は須恵器碗である。ハの字形をした高台を貼り付けている。186・187は須恵器蓋である。186の内面のかえりは口縁部よりも内側に入り込んでおり、やや扁平な宝珠様摘みを付している。187はさらに扁平な摘みを持っている。188は須恵器壺である。これらは8～9世紀に位置付けることができよう。189は須恵器鉢である。12世紀代の年代が想定できる、東播系ものである。190は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りで、10世紀代のものである。191は全体に磨滅が著しい土師器壺で、古墳時代に属する可能性がある。192は12世紀代の土師器壺、193は11

世紀代の土師器羽釜である。194は土師器竈の破片。195は削り出し高台を持った縁釉陶器椀で、全面に施釉を施している。9世紀代に位置付けられる。196・197は平瓦であるが、196は小破片ながら直線的な板状でカーブしておらず、埠の可能性がある。

これらの遺物の年代観から、N③SD04の年代は9～10世紀に想定することができ、8世紀代や12世紀代の遺物は他からの混入と判断できる。

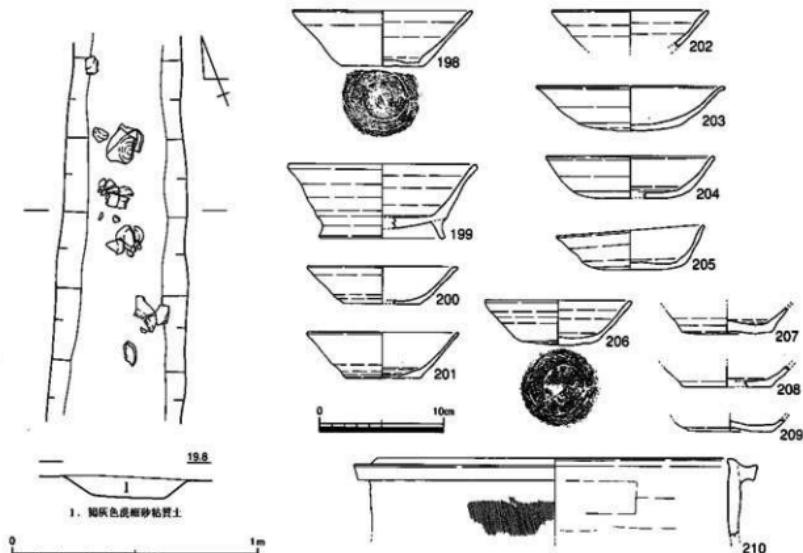


第58図 N③SD04断面図(1/50)、出土遺物(1/4、1/5)

N③SD07（第59図）

N③区の西半南寄り、第1面で検出した検出長8.4m、幅0.1m、深さ0.1mの規模を持つ溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、南半は直線的であるが北半はやや弧を描くような平面形をしている。北端で途切れた部分はかつての地境にあたり、北側が一段高くなっているが、その部分においてN③SD07の続きは確認できなかったため、さらに北に延びていたかどうかは定かではない。

溝状遺構の中央付近では、底面に密着した状態で土師器がまとまって出土した地点が1箇所認められた。埋土から出土した遺物198～210の中で、198～201、203～207、209の計10点がまとまって出土した遺物である。199の土師器椀、210の土師器羽釜以外は土師器杯であり、底部の確認できたものはすべて回転ヘラ切りであった。口径は12.0cm前後と15.0cm前後の2つに大別できるが、時期差を反映しているものではないと思われる。これらの土器群はその形状から、10～11世紀代に位置付けることができるものである。

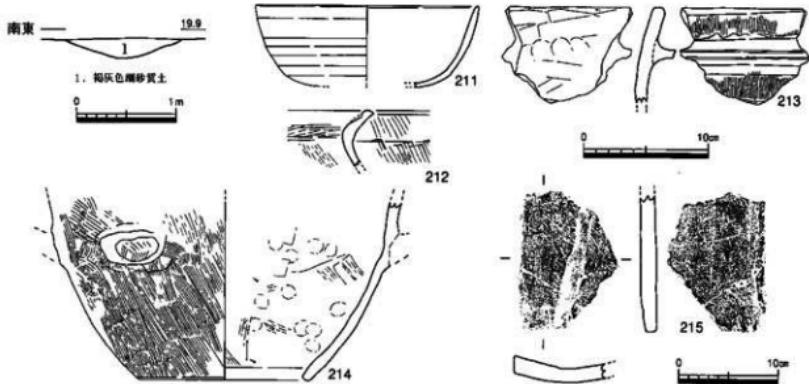


第59図 N③SD07 平・断面図 (1/20)、出土遺物 (1/4)

N③SD08 (第60図)

N③区の西半、第1面で検出した検出長4.5m、幅1.2m、深さ0.2mの規模を測るわずかに弧を描いているように見える溝状造構である。断面形状は浅い三角形を呈しており、N53°Wの方向を有している。北東端は古代の溝状造構N③SD07と重なっており、N③SD07に先行する溝状造構であることがわかる。埋土は褐色細砂質土層の単層で、211～215の遺物が出土している。

211は内弯気味に立ち上がる形状をした須恵器杯である。212は内外面のハケメ調整が特徴的な土師



第60図 N③SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4, 1/5)

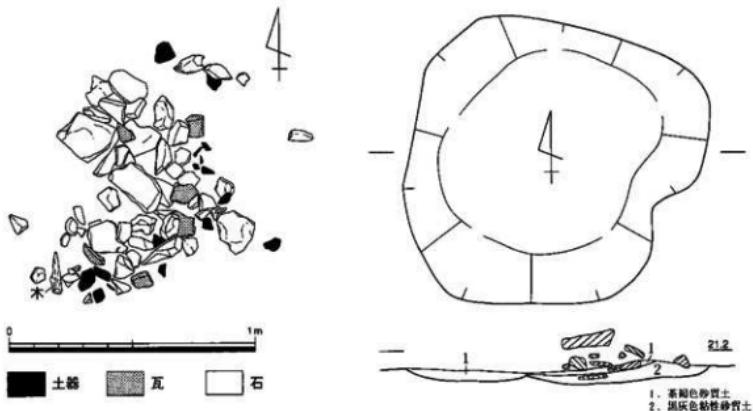
器壺である。213は口縁端部下に直線的な鋸部を有する土師器羽釜である。214は土師器壺で、把手が剥がれた痕跡が認められる。外面の著しいハケメ調整が特徴的である。215は平瓦である。これらの土器の形状から、9～10世紀代の年代が想定できる。

N①SX01 (第61・62図)

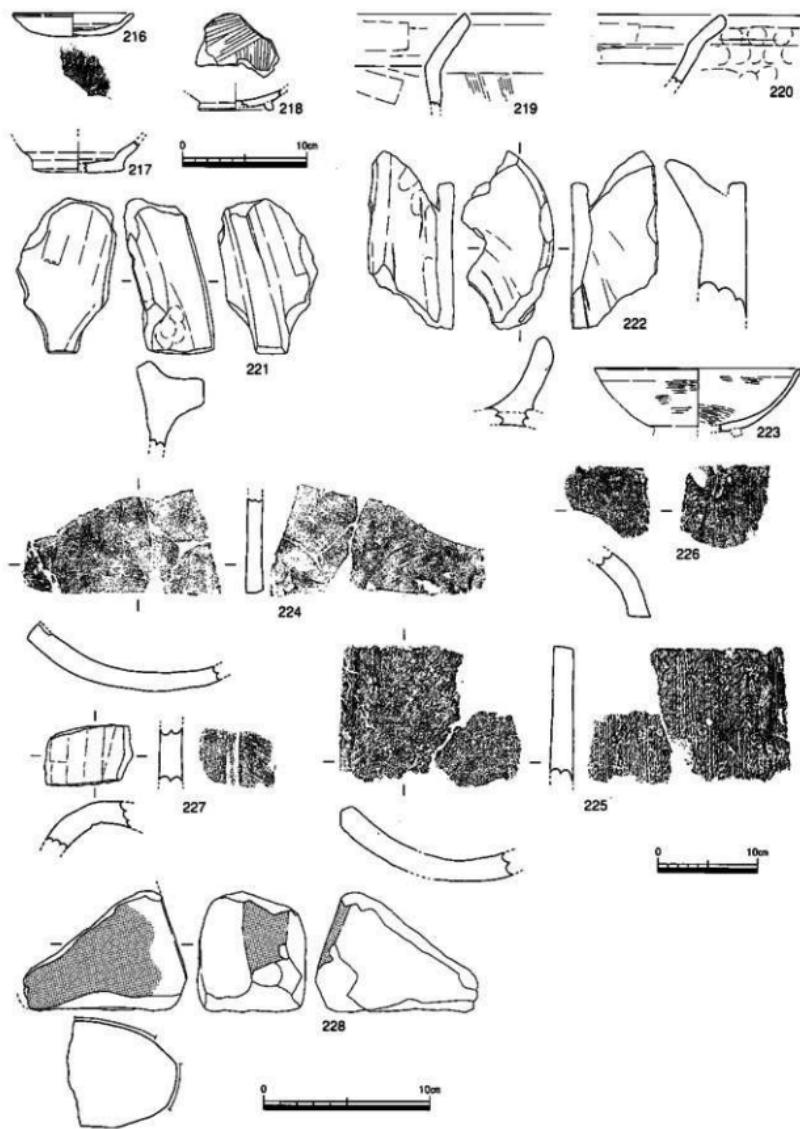
N①区の北東隅付近、第1面で検出した浅い土坑状を呈する性格不明遺構である。一部は調査区壁面に掛かっているが、ほぼ全容を確認することができた。遺構は1.2m×1.2mの規模で、一部が窪んだ隅丸方形状の平面形をしており、深さは0.1mを測る。断面形状は浅い皿形を呈しているが、底面には若干の凹凸が認められる。遺構の中央部付近には拳大～小児頭台の角礫・亜角礫が集中して認められた。石材には敷き並べたり、組み上げたりしたような人の手によるような様子は確認できず、むしろ無作為に放り込まれた状態と捉えられる。これらの石材の下や間からは土器片や瓦片等の遺物が出土しているが、これらの遺物も石材とともに放り込まれたものと判断できる状況にある。

216～228は石材とともに出土した遺物である。216は土師器皿である。底部は回転ヘラ切りで板状圧痕が認められる。217は土師器杯である。円盤状高台状をした底部である。218は土師器椀の底部である。内面はヘラミガキ調整を施している。219は土師器甕、220は土師器土鍋の口縁部である。220には外側にススが付着しており、煮炊きに使われたことがわかる。221・222は土師器壺の破片で、どちらもひさしの一部である。223は内面にのみ炭素を吸着させた黒色土器の椀である。ヘラミガキ調整の痕跡が残る。224・225は平瓦、226・227は丸瓦である。225・226の凸面には縄目タキの痕跡が残っている。228は砂岩製の砥石である。2面を砥面として使用しており、砥面と割れ面の状況から、使用中に折損したものと判断できる。これらの遺物の形状から、10～12世紀代の年代が想定される。

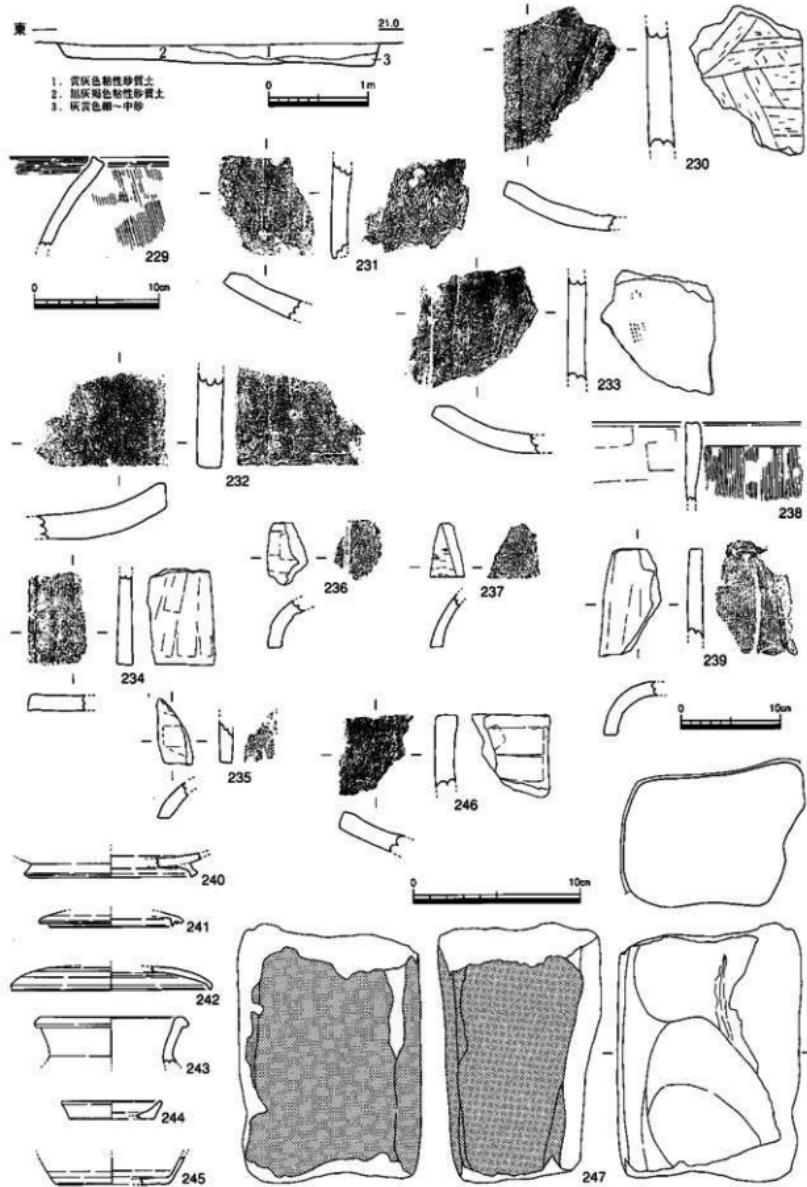
これらの状況や遺物の年代観から、N①SX01は12世紀代に属する廃棄土坑の可能性が高いものと思われる。



第61図 N①SX01土器集中部平面図、平・断面図 (1/20)



第62図 N①SX01出土遺物 (1/3、1/4、1/5)



第63図 N②SX02断面図 (1/50)、出土遺物 (1/3, 1/4, 1/5)

N②SX02（第63図）

N②区東壁沿い、第1面で検出した不定形な幅の広い溝状あるいは落ち込み状を呈する性格不明遺構である。南端部分は溝状に分岐している。遺構の一部は調査区壁面に掛かっており、全容は判明していない。検出長12.4m、検出幅4.2mmの規模で深さは0.2mを測る。断面形状は逆台形を呈しており、底面には平端部と複数の土坑状の窪みが見られ、凹凸が激しい。調査時にはこの窪みをそれぞれ不明遺構と判断したが、土層の堆積状況や出土遺物の時期の検討の結果、一つの遺構であると結論付けた。隣接する東道路調査D・E区、横断道調査のO区において、このN②SX02の延長と判断できる遺構は認められない。埋土は下位の細～中砂層と上位の粘性砂質土に大別できるが、出土遺物の時期は混在しており、時期差を反映してはいない。ただし、出土した土器の量に対して瓦の占める割合が比較的高いことは特筆される。

229～247は埋土から出土した遺物である。このうち229～237は概ね北半部から、238・239は南半部から、240～247は溝状に分岐した部分から出土している。229は土師器壺の口縁部としたが壺の底部片の可能性もある。230～234は平瓦、235～237は丸瓦である。いずれも凹面には布压痕が残っており、中には布の縫じ合わせの痕跡が残るものも見られる。凸面は繩目タキが基本であり、それをナデ消したものも認められる。234は平瓦としたが板状をしており、壺の可能性がある。238は土師器壺で、内面に炭化物の付着が見られる。239は丸瓦で、凹面に布の縫じ合わせ痕が認められる。240は須恵器高台付盤の底部、241・242は須恵器蓋である。241は端部に粘土小塊の溶着があり、重ね焼きをしたことわかる。243は口縁端部を肥厚させた須恵器の壺である。244は土師器小皿、245は土師器杯である。246は焼成の悪い軟質の平瓦である。247は砂岩製の砥石である。2面を砥面として使用している。土器の年代であるが、7世紀代のもの（241）や12世紀代のもの（244）等も見られるが、それらを除いた大半は、その形状から8～10世紀代に属するものと判断できる。

これらの年代観から、N②SX02は8～9世紀代を中心に埋没したもので、その下限は10世紀の遺構と判断される。

(3)中世の遺構・遺物

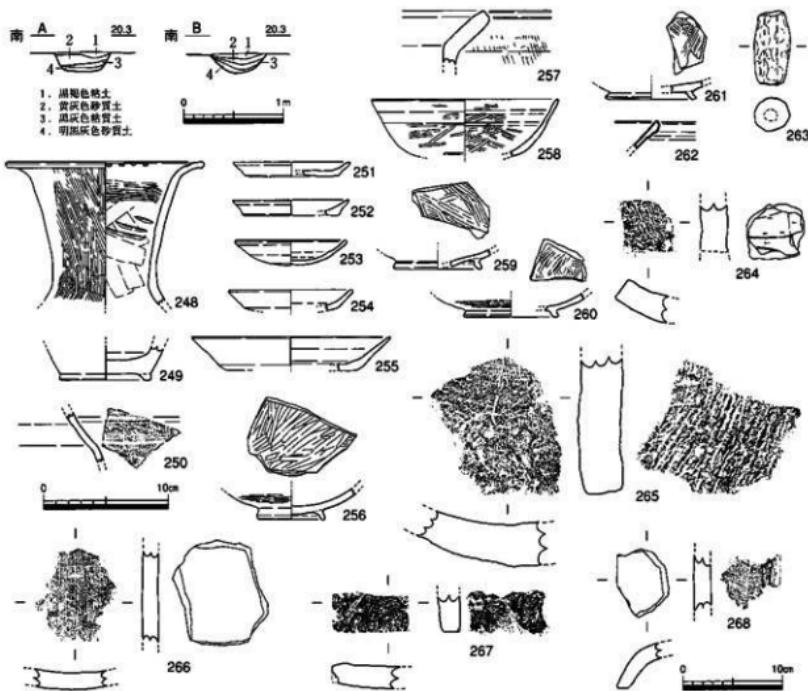
N①SD03（第64図）

N①区中央付近、第1面で検出した検出長21.8m、幅1.6m、深さ0.2mの規模を持つ溝状遺構である。調査区東南隅付近から直線的に北へ向かい、途中では直角に西へ向かって屈曲して調査区中央部を横切っている。屈曲後の東西方向ではN86°Wの方向を有している。断面形状は逆台形～浅いU字形を呈しており、土層堆積状況は砂質土と粘質土の互層が見られる。埋土中から248～268の遺物が出土している。

248は弥生土器壺である。直線的に外方に開く口縁部で、外面のハケメ調整が顕著である。弥生時代後期に属するもので、下位に存在するN①SR01のものが混入したものと考えられる。249・250は須恵器壺である。250は4条1組の波状文を2段に施した肩部の破片で、薄い施釉が認められる。251・252は土師器小皿、253～255は土師器杯である。いずれも底部は回転ヘラ切りによるものである。256はヘラミガキ調整が顕著な土師器碗である。257は土師器土鍋の口縁部である。258～261は黒色土器碗である。258・260・261は内外面に炭素を吸着させており、内面は分割ヘラミガキ調整で仕上げている。259は内面だけに炭素を吸着させている。262は口縁端部を肥厚させた白磁碗である。263は土師質の管

状土錐である。264～267は平瓦、268は丸瓦である。264は瓦当が剥離した痕跡が認められる。

これらの土器の年代は、その形状から9～12世紀に位置付けられるものであるが、古い遺物は先述したN①SD01からの混入の可能性が高い。したがってこの溝状遺構は12世紀を下限とするものと判断できる。また、N①SD01とはほとんど同じ場所に造られていることから、N①SD01が埋没して機能しなくなった後、新たに作りなおした溝状遺構がN①SD03であると考えられる。



第64図 N①SD03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4、1/5)

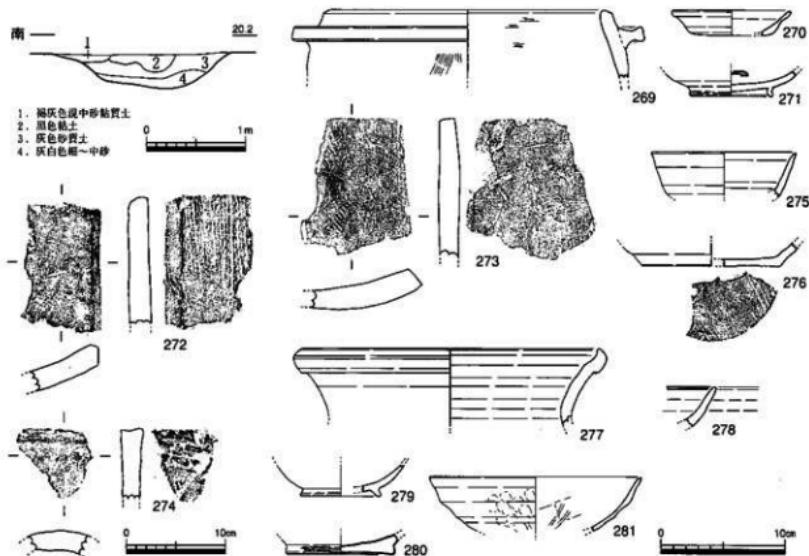
N③SD05 (第65図)

N③区中央付近、第1面で検出した検出長25m、幅2.5m、深さ0.3mの規模を持つ溝状遺構である。調査区東壁から北西隅に向かって、わずかに弧を描くように緩やかにカーブする平面形を持つ。断面形状は浅い皿形を呈しているが、部分的にテラス状の段を有している箇所も見られる。先述したN①SD03に連続するものと見られる。また、先行する古代の溝状遺構N③SD04とは東半分では重なり、西半分では並行している。埋土は上下層に大きく二分することができる。

國化した遺物のうち、269～274・281は上層の粘質土から、275～280は下層の砂質土から出土したものである。269は土師器羽釜で、鍔の形状にやや古い特徴を残している。270は土師器杯である。271は内面にのみ炭素を吸着させた黒色土器碗である。272・273は平瓦、274は丸瓦である。272は凸面に

ススが付着している。270や271の形状から、12世紀の年代が想定される。275は須恵器杯である。276は須恵器鉢で、底部には回転糸切りと板状圧痕の痕跡が見られる。277は口縁端部を肥厚させた須恵器甕である。278は土師器杯である。内外面に赤彩の痕跡がわずかに残る。279は内面に炭素を吸着させた黒色土器碗である。280は全面に施釉をした綠釉陶器碗で、底部は回転ヘラ切りを施している。281は指頭圧痕が顕著に見られる瓦器碗である。これらの土器は概ね8～13世紀に属するものであるが、古いものは下位のN③SD04に属する遺物が混入したものと見られる。

混入した遺物が多いものの、この遺構の年代は278や281等の形状から12～13世紀に埋没したものと判断できる。

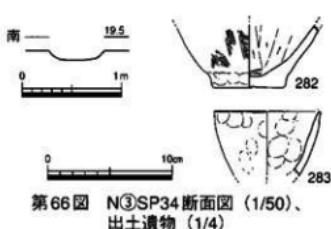


第65図 N③SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4, 1/5)

(4) N区の柱穴跡・遺物

N③SP34 (第66図)

N③区の南壁中央付近で検出した。50cm × 40cm、深さ10cmの楕円形を呈する柱穴跡である。埋土からは弥生土器片がわずかに出土した。282は弥生土器甕の底部である。283は弥生土器鉢で、外面のひび割れが著しい。どちらもその形状から弥生時代後期に属するものと判断できる。

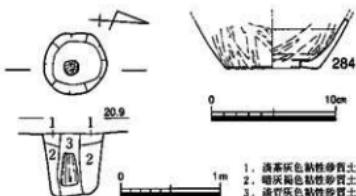


第66図 N③SP34断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

N②SP09 (第67図)

N②区の中央付近で検出した。直径60cm、深さ65cmのほぼ正円形の柱穴跡である。柱穴跡中央の底面付近には柱材の一部が遺存していた。直径25cm前後の柱を立てていたことがわかる。

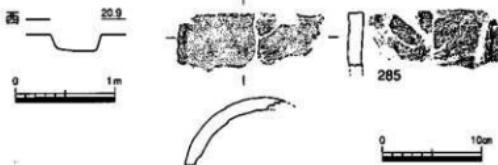
284は内外面に火櫻痕がのこる須恵器杯である。9世紀に属するものである。



第67図 N②SP09 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

N②SP20 (第68図)

N②区南東隅付近で検出した。直径50cm、深さ18cmの円形の柱穴跡である。N②SX02の埋没後には掘られている。埋土から丸瓦285の他に10世紀代と属する土師器片が出土している。



第68図 N②SP20 断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)

N②SP24 (第69図)

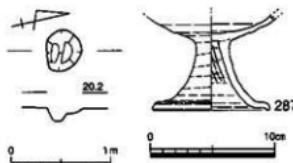
N②区の北東隅付近で検出した。直径80cm程度、深さ25cmの柱穴跡と推定できる。埋土からは平瓦286が出土している。凹面には指ナデが残る。N②SX02に先行する柱穴跡であり、10世紀以前に位置付けられる。



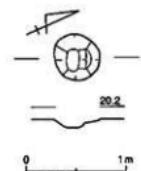
第69図 N②SP24 断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)

N③SP26 (第70図)

N③区北壁中央部付近で検出した。40cm×35cm、深さ15cmの楕円形を呈している。柱穴跡底面で柱の痕跡を確認した。埋土から須恵器高杯287が出土している。脚部の短い高杯で、その形状から8世紀代に属するものと判断できる。



第70図 N③SP26 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)



第71図 N③SP24 平・断面図 (1/50)

N③SP24 (第71図)

N③区北壁中央部付近で検出した。47cm×45cm、深さ10cmの円形を呈している。柱穴跡底面で柱の痕跡を確認している。埋土から想定できる土師器杯片がわずかに出土している。周辺には同じような規模を持つ柱穴跡が存在しており、調査区北方に延びる建物の一部であった可能性もある。

N②SP07 (第72図)

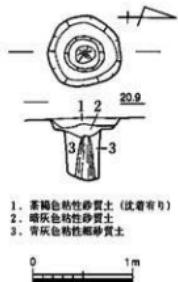
N②区北壁中央付近で検出した。74cm × 70cm、深さ62cmのほぼ円形を呈する柱穴跡である。底面には柱材の一部が遺存していた。断面観察からは直径30cm前後の柱を立てていたことがわかる。圓化することはできなかったが、土師器杯や甕の小片が出土しており、それらの形状から10世紀代の年代が想定される。

この柱穴の南2.5mには同規模の柱材を立てていたとみられるN②SP09が存在しており、周囲に見られる柱穴跡と組み合わさって掘立柱建物を構成していた可能性がある。

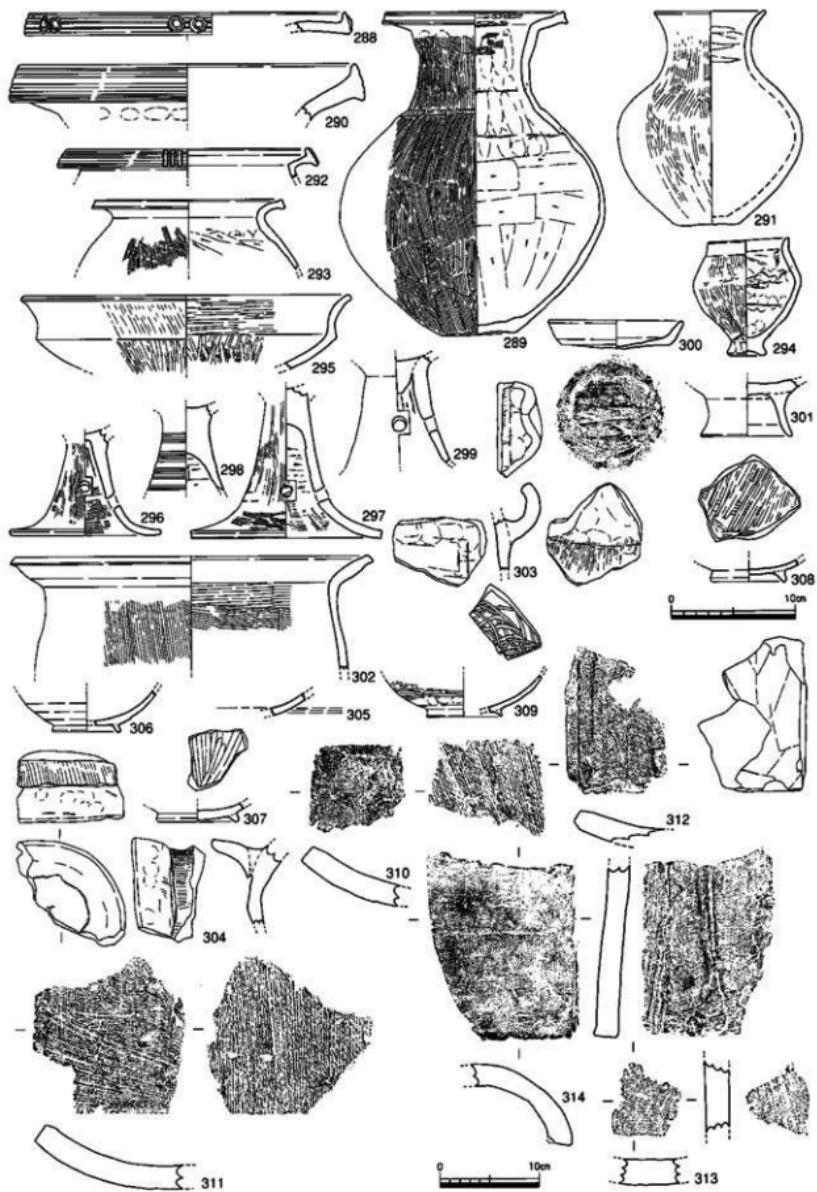
(5)包含層出土遺物 (第73～75図)

288～314はN①区出土の遺物である。288～291は弥生土器壺である。288は上方に拡張した口縁端部で、凹線を巡らした後に竹管文を施した円形浮文を1対単位で貼り付けている。289は扁球形の胴部に途中で外方へ屈曲する口頸部を有するものである。外面のハケメ調整が顕著である。290は口縁端部を上下に拡張しており、凹線を巡らしている。大型の壺の口縁部と判断したが、器台の可能性も残る。291はやや肩の張った扁球形の胴部に外反気味の口頸部が付くものである。底部は平底である。292・293は弥生土器甕である。292は強く屈曲する口縁部で、口縁端部は上下に拡張して凹線を巡らせている。さらに3条1組の棒状浮文を貼り付けている。293は口縁部が外方へ折り曲げたような形状をしており、口縁端部をわずかに拡張している。294は弥生土器鉢である。算盤玉のような胴部に短く直立気味の口縁部を有している。短い脚台が付けられており、底部はくぼみ底である。295～299は弥生土器高杯である。295は杯部で、屈曲して外反する口縁部を有している。ヘラミガキ調整が顕著である。296～299は脚部である。いずれもラッパを伏せたような裾部が大きく開く形状を呈するものと思われる。296・297・299には円形の透し穴が施されている。298には3条1組の細い沈線文が4段以上(12条以上)施されている。これらの弥生土器はその形状や、口縁端部にみられる拡張や凹線の多用から弥生時代後期前半に位置付けられるものである。300は土師器杯である。底部外面には回転ヘラ切り後に施された板状痕が認められる。13世紀代に位置付けることができる。301は土師器脚付小皿である。磨滅が著しいもののその形状から13世紀代に属すると判断できる。302は土師器甕である。内外面の粗いハケメ調整が特徴的で、9～10世紀に位置付けられる。303は土師器の把手である。甕か瓶に付けられていたものと考えられる。三角形の粘土板を貼り付けた後に上方へ折り曲げている。8世紀代のものと考えられる。304も土師器の把手であるが、303とは異なり、粘土帯を半円形に貼り付けている。把手の貼り付け時に内側から強く支えたらしく、器壁が大きく歪んでいる。器壁内面にはススが付着していることから、瓶の把手と判断される。305は京都産と見られる綠釉陶器の皿である。306～308は黒色土器碗である。306・308は内面にのみ、307は内外面両面に炭素を吸着させている。9～11世紀の年代が想定される。309は和泉型の瓦器柄で、12世紀代に位置付けられる。310～313は平瓦、314は丸瓦である。いずれも凹面には布疋痕が明瞭に残り、凸面に繩目タタキが残るものも見られる。

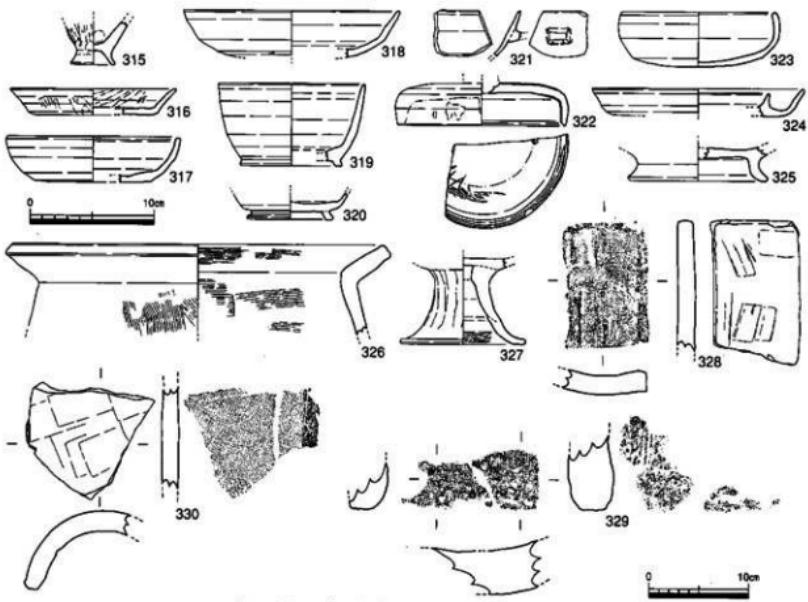
315～330はN②区出土の遺物である。315は製塙土器の脚部である。外面のヘラケズリ調整が明瞭なもので、その形状から弥生時代のものと判断できる。316は須恵器皿で、内外面に火拂痕が認められる。9～10世紀代に位置付けることができる。



第72図 N②SP07
平・断面図 (1/50)



第73図 N①区包含層出土遺物 (1/4、1/5)

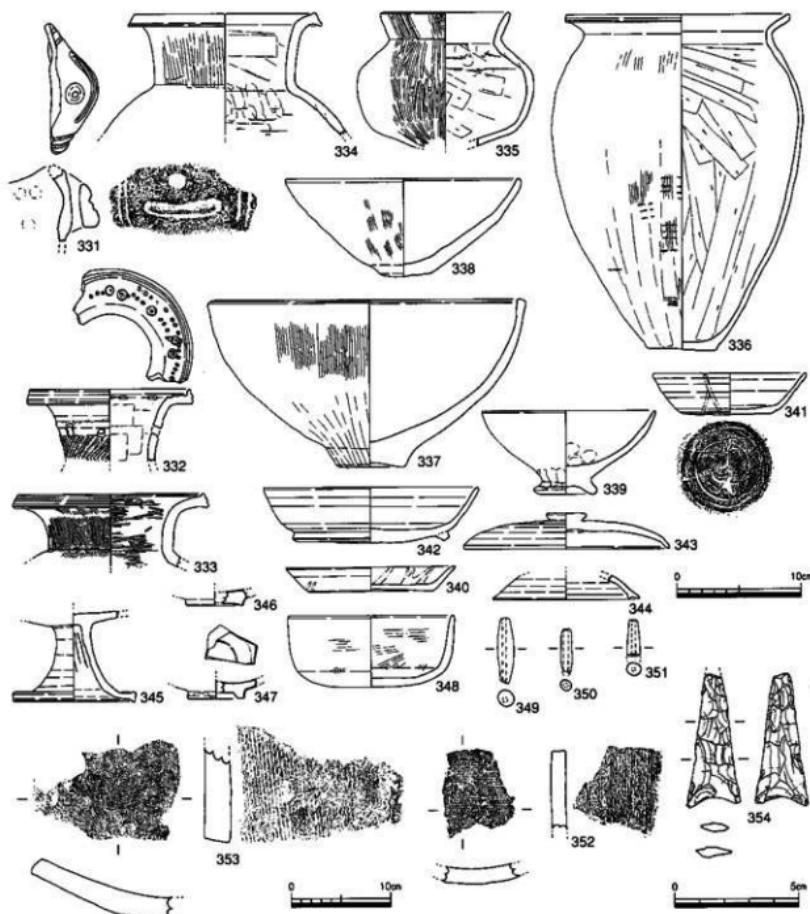


第74図 N②区包含層出土遺物 (1/4, 1/5)

317・318は須恵器杯である。319～321は須恵器碗である。319は内弯気味に立ち上がる口縁部を有している。320も319と同様の器形を呈するものと考えられる。321は折損しているが四角い把手を貼り付けている。322は須恵器蓋で、その形状から短頸壺の蓋と判断できる。外面全面及び内面の一部に自然釉が付着している。内面には重ね焼きの際に使用したと思われる葉状の植物の痕跡が認められる。これらの須恵器はその形状から8世紀代を中心とした年代が想定できる。323は土師器杯である。324は土師器皿で、短く立ち上がる口縁部のさらに内側に、口縁部よりも高さの低い受け部状のものを有している。仏具のような金属器の模倣の可能性がある。325は土師器の高台付杯としたが、高台付皿の可能性もある。326は土師器壺である。くの字形に屈曲した口縁部を持ち、粗いハケ調整が顕著である。327は土師器高杯の脚部である。面取りをするように縱方向にヘラケズリ調整を施している。これらの土師器もその形状から8世紀代を中心とした年代が与えられる。328・329は平瓦、330は丸瓦である。329は通常の平瓦の倍以上の厚みを持っており、通常とは異なる場所に使用されたものと判断される。330は凹面に布の合わせ目の痕跡が残る。

331～354はN③区出土の遺物である。331は縄文土器深鉢である。波状口縁の波頂部を分厚く肥厚させて、外面に太い沈線文と、上下に貫通する穿孔1個を施すものである。縄文時代後期に位置付けられる。332～334は弥生土器壺である。332は外反気味の口頸部が屈曲して外方へ開く口縁部を有するもので、端部は上方へ拡張し凹線を巡らせている。口縁部内面には竹管文を巡らせた後で竹管による押圧を施した円形浮文を貼り付けている。頸部外面にはハケ原体の小口による連続刺突文を施している。弥生時代中期末頃に位置付けられる。333・334も332と同様の口頸部形態を持つが、頸部・口縁部の長さや屈曲の度合いが異なる。どちらも口縁端部を拡張しており、弥生時代後期初頭頃に位置付けられよ

う。335は弥生土器小型丸底壺である。扁球形の胴部に直線的に外方へ開く短い口縁部を有する。外面はヘラミガキ調整が顕著である。弥生時代末期に位置付けられる。336は弥生土器壺である。倒卵形の胴部に屈曲した口縁部が付き、底部は平底である。形態的特徴から弥生時代後期初頭に位置付けられる。337～339は弥生土器鉢である。いずれも内弯気味に立ち上がり直口口縁となっている、337の底部は突出気味である。339は小さな脚台が付いている。弥生時代後期に属するものである。340は内外面に火拂の痕跡が見られる須恵器皿である。9世紀代のものと考えられる。341は須恵器杯である。底部には回転ヘラ切りの痕跡が明瞭に認められる。西村窯産であり、11～12世紀代の年代が想定される。342は須恵器碗である。浅いボウル状の杯部に高台を貼り付けているが、杯底部の方が高台よりも突出している。



第75図 N③区包含層出土遺物 (1/2, 1/4, 1/5)

るため不安定で据わりが悪い。8世紀代のものと考えられる。343・344は須恵器蓋である。343は端部を折り曲げ気味にしており、扁平な摘みが付く。8～9世紀代のものである。344は内面の返りと端部がほぼ同じ高さであり、7世紀代の杯蓋である。345は須恵器高杯である。形態から7～8世紀に位置付けられる。346は全面に施釉をした綠釉陶器椀の底部である。京都産と見られ、9～10世紀に属すると思われる。347は青磁碗である。削り出し高台の外面まで施釉されており、内面には蛇の目釉剥ぎが認められる。中世の可能性がある。348は土師器杯である。349～351は土師質の管状土錐である。352・353は四面に布庄痕を、凸面に縄目タタキを残した平瓦である。354はサヌカイト製の打製石鐵である。縦長の三角形を呈しており、基部は凹基式である。弥生時代に属するものと考えられる。

(6)小結

N区は縄文時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

縄文時代は自然河川跡N③SR01とその後背湿地とを考えられるN①・②SR01から遺物が出土している。出土量も少なく、土器表面の磨滅が著しいことから、上流から流されてきたものと判断でき、近辺での同時代の遺構の存在は考え難い。ほとんどが縄文時代後期に属するものであるが、サヌカイト製の有舌尖頭器は縄文時代草創期の年代が想定でき、縄文時代の早い段階に付近で人の動きがあったことを示唆している。

弥生時代に入ると自然河川跡の南西側に小規模な溝状遺構や土坑がみられるようになる。自然河川跡N③SR01は前代に引き続き機能していたが、埋没は進んでおり、上層を中心に弥生時代中期～後期の遺物が含まれることから、弥生時代後期にはほとんど埋没していたものと思われる。溝状遺構は小規模かつ不整方向を有しており、灌漑水路や集落を区切る区画溝としての性格は想定し難い。一時的な排水を目的としたものの可能性がある。これらから出土している土器量はわずかである。

古墳時代の明瞭な遺構・遺物は確認していない。

古代になると自然河川跡は完全に埋没しており、その上にも遺構が存在するようになる。規模の小さな掘立柱建物跡と柱穴跡や小規模な溝状遺構等を確認した。掘立柱建物跡はN③SB01、N①SB01の2棟があり、いずれも1×2間の建物である。これ以外に建物跡を復元することはできなかったが、N③区とN②区では柱穴跡が散在しており、居住域として土地利用されたことがうかがえる。一方、溝状遺構は各調査区において検出した。ほとんどの溝状遺構が掘立柱建物跡と同じ方向性、すなわち条里地割の方向と合致しているが、1条の溝状遺構であるN①SD01・N③SD04は方向を概ね一致させながらも西端においては弧を描きながら逸れている。このズレが何に起因するものかは現状では明らかにし難く、今後の課題である。

中世になると、溝状遺構が数条見られるのみとなる。1条の溝状遺構であるN①SD03・N③SD05は比較的規模の大きなもので、前代の溝状遺構を踏襲しつつ新たに掘り直された溝状遺構である。そのために、西端付近で条里地割の方向から弧を描きながら逸れている。溝状遺構以外に当該期に属する遺構は確認しておらず、居住域ではなくなっていることがわかる。耕作地として土地利用されたことが考えられる。

第4節 O区の調査

1. 調査区の概要

南北幅7~25m、東西長137mの範囲を占めるO区は、3つの小調査区に分けて調査を実施した。さらに東端のO③区は地形の制約から東西に二分して調査を行った。高松東道路調査区E区西半の南側に隣接する調査区に当たる。標高はおよそ24.6~21.4mで、東西両端で約3.2mの標高差を有している。調査着手前は水田として土地利用されていた。

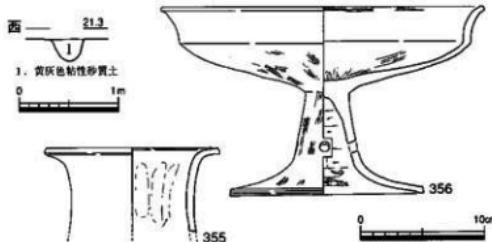
O区では遺構検出面を1~2面検出している。西端のO①区と東端のO③区は1面、中央のO②区の西半が2面となっていた。O②区の西半は上から第1面が古代以降、第2面は弥生時代以前のものと判断できる。O区全体にわたって後世の削平を被っているが、丘陵部にあたるO③区は階段状の著しい削平を受けている。

2. 調査の成果

(1) 弥生時代の遺構・遺物

O①SD05 (第76図)

O①区中央付近で検出した検出長5.1m、幅0.4m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。概ね北から南に向かって続いており、西側に存在する自然河川跡O①SR01とはほぼ同じ方向を有している。断面の形状はU字形を呈している。埋土



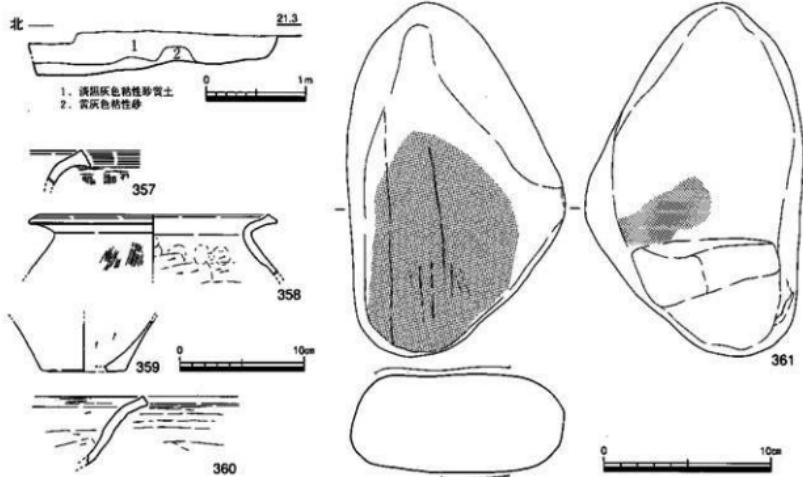
第76図 O①SD05断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

は砂質土層で、弥生土器が出土した。355は弥生土器壺である。直線的な頸部から大きく外方へ屈曲する口縁部が連続し、端部はわずかに摘み上げている。356は弥生土器高杯である。大きな杯部は中位で屈曲させて外反度の高い口縁部を有する。脚部は途中から大きく外反するので、端部を肥厚させて擬凹線1条を巡らせている。脚部中位には4つの穿孔を施している。これらはその形態から、弥生時代後期前半に位置付けられるものである。

O①SX03 (第77図)

O①区中央部の北壁付近で検出した不整形な土坑状を呈する性格不明遺構である。遺構は北側に連続しており、全体の形状は把握できていない。検出した部分で6.4m×2.7m、深さ0.4mを測る。

357~361は埋土から出土した遺物である。357は弥生土器壺である。大きく外反する口縁部で、端部を上下に拡張して凹線を施したものである。358~359は弥生土器甕である。358は強く張った胴部に屈曲する口縁部を持ち、端部は拡張して凹線を巡らせている。359は甕の底部で、平底を呈している。360は弥生土器鉢である。緩やかに内湾する体部に短く外反する口縁部が付く。361は砂岩製の砥石で、2面を砥面として使用している。これらの土器はその形状から弥生時代後期前半に位置付けられるものである。



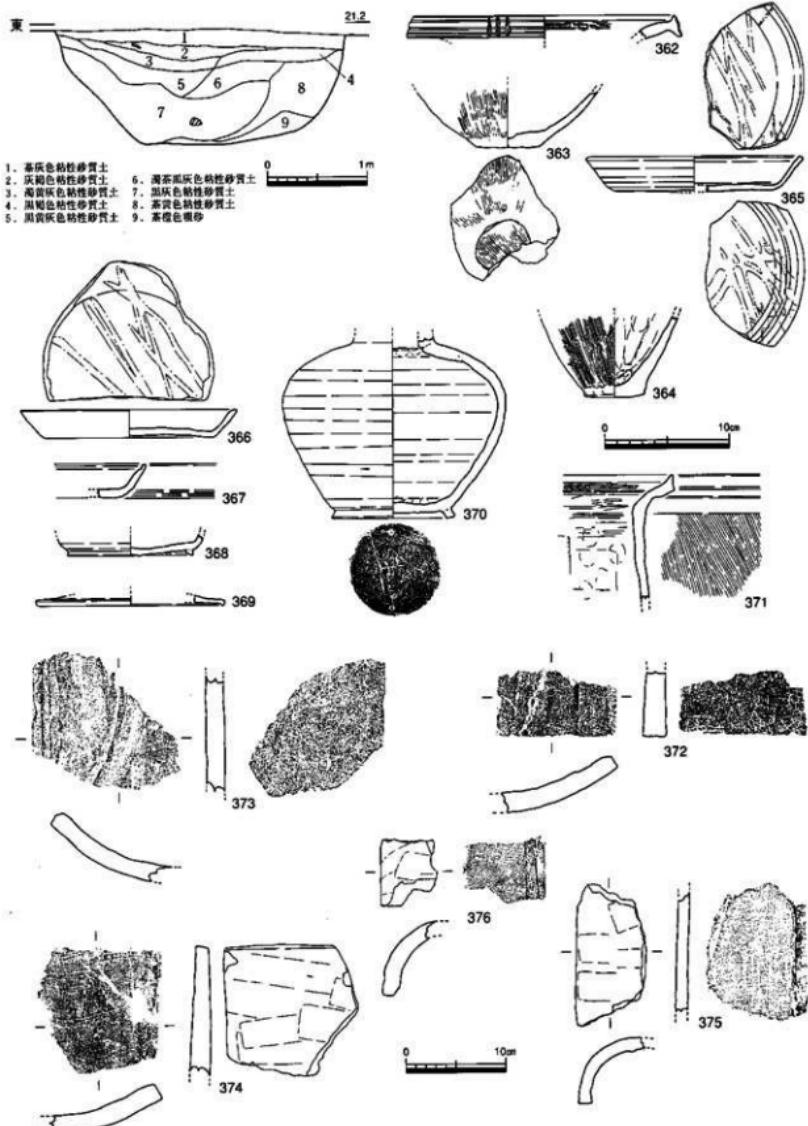
第77図 O①SX03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/3, 1/4)

O①SR01 (第78・79図)

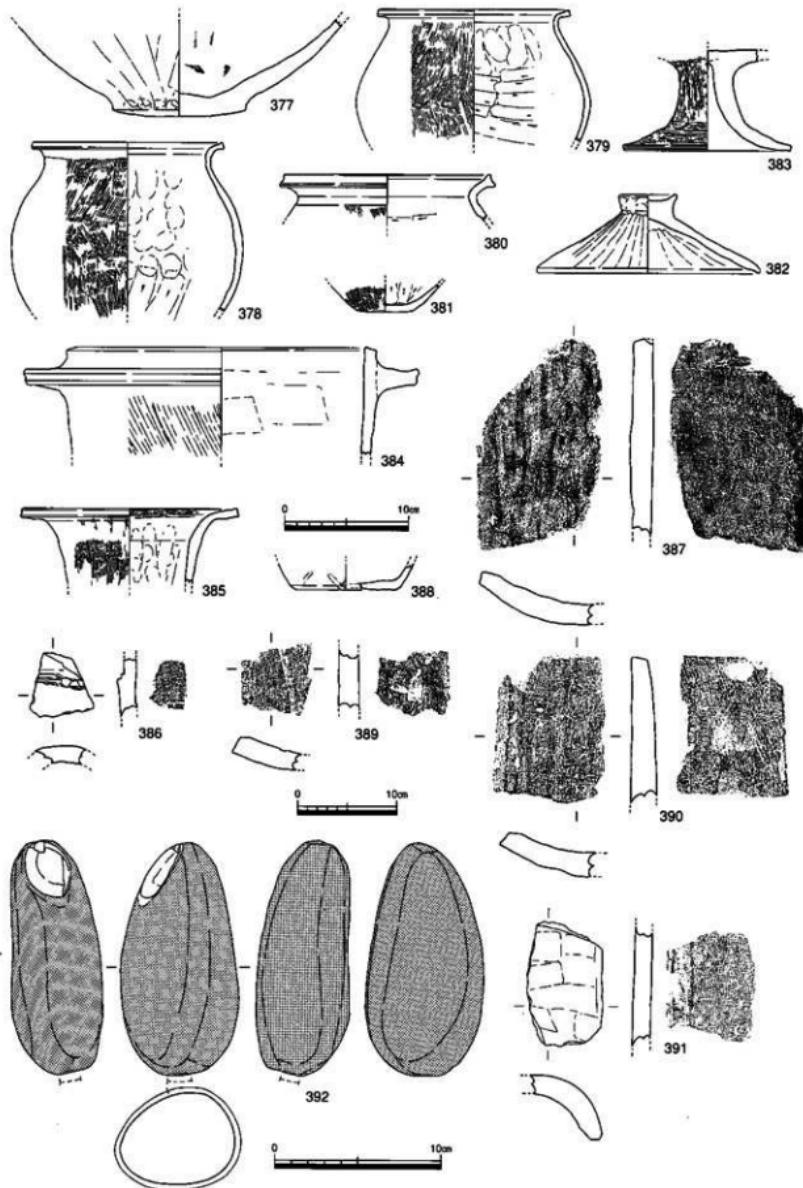
O①区西半で検出した自然河川跡である。検出長7.0m、幅4.2m、深さ1.2mの規模を測り、北東からやや屈曲して南方向に流下している。O①SR01は調査区外の南北に連続しているが、土層の堆積状況から、北方は高松東道路調査E区SX01に連続する可能性が高いと判断できる。河川の床面は著しい凹凸が見られることや砂層と粘質土層が交互に堆積している状況等から、流水と滞水を繰り返しつつ埋没した状況が復元できる。埋土は大きく上下層に二分できたため、基本的に遺物の取り上げもそれに準じたが、狭い調査区が災いしてか、下層に若干の遺物の混入が起ってしまった。

362～376・392は上層として取り上げた遺物である。古代の遺物が中心に出土しているが、若干の弥生土器が認められる。これは下層の土器が水流によって洗い出されたものと判断できる。362は弥生土器壺である。大きく外反する口縁部で、端部を上下に拡張して凹線をめぐらせた後に、ハケ原体の小口による刻み目を施している。363は弥生土器壺の底部で、平底を呈している。364は弥生土器鉢の底部と判断したが壺底部の可能性もある。平底で、外面のハケメ調整が顕著である。これらは弥生時代後期に属するものと判断できる。365・366は須恵器皿である。火搾の痕跡が明瞭である。367は須恵器杯である。口縁部内面に沈線1条を巡らせており。368は須恵器杯、369は須恵器蓋である。370は須恵器壺である。肩部と内面底部に自然釉が付着している。底部外面には「十」のようなヘラ記号が刻まれている。371は土師器壺である外面のハケメ調整が著しい。372～374は平瓦、375・376は丸瓦である。いずれも凹面には布压痕を明瞭に残しており、中には横骨や布の合わせ目の痕跡が認められるものもある。392は安山岩製の磨り石であるが、一端には敲打痕が残ることから、叩き石としても使用したことなどがうかがえる。これらの遺物は須恵器の形態から8～9世紀を中心とした年代が想定できる。

377～384は下層として取り上げた遺物である。377は弥生土器壺の底部である。突出気味の平底を呈している。378～381は弥生土器壺である。378と379は球形の胴部に折り返したような口縁部が付くも



第78図 O①SR01断面図 (1/50)、出土遺物① (1/4、1/5)



第79図 O①SR01出土遺物② (1/3、1/4、1/5)

ので、端部をやや肥厚気味に摘み上げた形態が類似するものである。外面のハケメ調整も類似しているが、内面のヘラケズリ調整の範囲は大きく異なっている。胎土に角閃石を含んだいわゆる「下川津B類土器」である。378には外面にススの付着が認められる。380はくの字形に屈曲する口縁部で、端部は上下に拡張している。381は壺の底部で平底を呈している。382は弥生土器蓋である。笠形の胴部に摘みを付したもので、その形態から壺用と判断できる。これらの弥生土器は壺の形態から弥生時代後期前半に位置付けることのできるものである。383は土師器高杯である。軸部外面には面取りが施されており、赤色顔料を塗布している。8世紀代に位置付けられる。384は土師器羽釜である。口縁端部やや下に水平な鶴部を有するもので、10世紀代に属するものである。

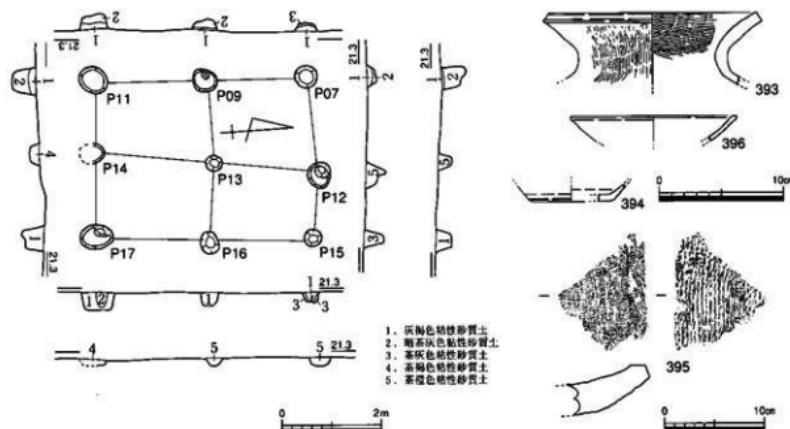
385～387は土層観察用畔から出土したものである。385は弥生土器壺である。大きく外反する口縁部を有しており、弥生時代後期に属するものである。386は有段式の丸瓦である。387は平瓦である。凹面ではなく凸面に布圧痕が明瞭に残っていることから一枚作りによる製品とわかる。388～391は出土層位がはっきりしないものであるが、おそらく上層に属する遺物であると想定される。388は須恵器杯である。外面に火痕痕が残る。9世紀代のものと考えられる。389・390は平瓦、391は丸瓦である。いずれも良好に焼成された須恵質の瓦である。

これらの遺物の埋没状況や年代観から、O①SB01は弥生時代後期にはかなり埋没が進行しており、完全に埋没するのが9～10世紀代であると判断できる。

(2) 古代の遺構・遺物

O①SB01 (第80図)

O①区中央付近で検出した2間×2間の総柱の掘立柱建物跡である。ただし調査区が狭小なため、桁行が2間以上の可能性も残る。3.3m×4.4mの規模を持つ南北棟で、床面積は14.5m²を測る。建物主軸はN 2°Eの方向を有している。SP09・12・15・17の4つの柱穴跡では柱痕を確認している。柱穴跡からはわずかながら遺物が出土した。393はSP12から出土した土師器壺である。大きく外反する口頭

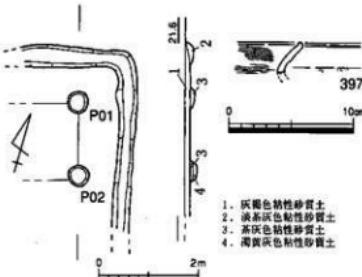


第80図 O①SB01平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/4、1/5)

部で、内外面の粗いハケメ調整が特徴的である。壺の可能性もある。394はSP13から出土した須恵器杯である。底部は回転ヘラ切りである。395はSP15から出土した平瓦である。396はSP16から出土した土師器杯である。これら以外にも図示できなかったが黒色土器碗片も出土しており、その形態から9～10世紀の年代が想定されることから、この建物の年代は10世紀代と判断する。

O②SH01（第81図）

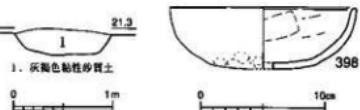
O②区西端付近で検出した、平面形態が隅丸方形を呈する竪穴住居跡である。大部分は調査区外に統合しておらず、全体の約3分の1を確認したに過ぎない。検出部分で2.3m × 3.6m、深さ0.2mを測る。この建物跡の主柱穴跡と判断できる柱穴跡2基を確認しており、外周には壁溝が認められる。これらをもとにすると、一辺約4m、床面積16m²程の規模に復元できる。主軸の方向はN15°Wを測る。埋土中から土器片がわずかに出土している。397は土師器壺で、8世紀代に位置付けることができよう。これ以外にも図示できなかったが8世紀代と思われる須恵器高杯片が出土しており、8世紀代の竪穴住居跡と判断しておく。



第81図 O②SH01 平・断面図 (1/100)、出土遺物 (1/4)

O①SD04（第82図）

O①区中央部南壁付近で検出した検出長3.1m、幅1.1m、深さ0.3mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。北半よりも南半の方が幅広となっている。断面形状は逆台形状を呈しており、N 3°Eの方に向を有している。398は土師器杯である。これ以外にも図示できなかったが、平行タタキ調整を施した須恵器壺の小破片が出土しており、7世紀代の年代が想定できる。



第82図 O①SD04 断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

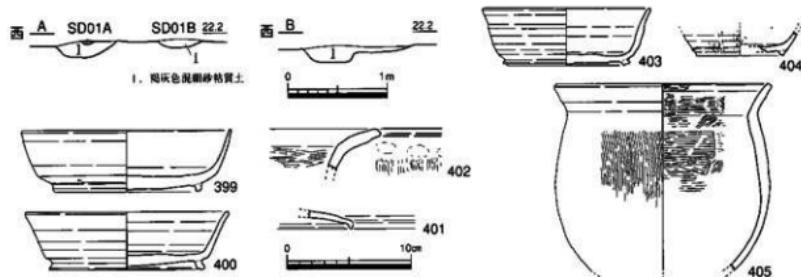
O③西SD01（第83図）

O③西区の西端付近で検出した溝状遺構である。調査区北壁付近では2条であるが途中で合流して、1条の溝状遺構となっている。合流部分の土層断面観察では先後関係がなく、同時に機能・埋没したものである。ここでは西側のものをSD01A、東側のものをSD01Bと呼称して説明する。O③西SD01Aは検出長4.8m、幅1.2m、深さ0.2mの規模で、N 2°Eの方向を有する。O③西SD01Bは検出長4.9m、幅1.2m、深さ0.1mの規模で、N 11°Eの方向を有する。断面形態はどちらも浅い皿形を呈しているが、合流部分ではO③西SD01Aが逆台形、O③西SD01Bがさらに浅い皿形を呈している。いずれも調査区北側へ統合するが、O③西SD01Bは高松東道路調査E区SD08に連続する可能性が高い。

399～405の遺物が出土している。399～402はO③西SD01Aから出土したものである。399・400は須恵器壺である。400は内面見込みに仕上げナデを施している。401は須恵器蓋である。端部を下に折

り曲げて返りとしている。402は土師器壺の口縁部である。403～405はO③西SD01Bから出土したものである。403・404は須恵器碗である。403は内面見込みに仕上げナデを施している。404は内外面に火棒の痕跡が見られる。405は内外面の粗いハケ調整が特徴的な土師器壺である。

これらのうち399・400や403・405などは8世紀代、それ以外は9～10世紀代に位置付けられるものである。O③西SD01の周辺には8世紀代の遺構も見られることから、それらの遺物が混入したものと想定できる。したがって、この溝状遺構の年代は9～10世紀と判断する。



第83図 O③西SD01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③西SD02 (第84図)

O③西区の西半で検出した、検出長5.6m、幅1.0m、深さ0.1mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、N11°Eの方向を有している。この方向は先述したO③西SD01Bと同じ方向である。調査区北側へも続いているが、高松東道路調査E区ではその続きは確認していない。

406は内外面に炭素を吸着させた黒色土器碗である。内面のミガキ調整は4分割ミガキを施している。407は緑釉陶器皿である。内面に沈線を1条巡らせている。これ以外に図示できなかったが須恵器の蓋が出土しており、それらの形態から9～10世紀の年代が想定される。



第84図 O③西SD02・03・SX01断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③西SD03 (第84図)

O③西区の中央付近で検出した、検出長6.5m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を有する直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、N7°Wの方向を有する。遺物は小破片が少量出土したのみである。408は土師器壺である。これ以外に平行タタキ調整を持つ須恵器壺の胴部片や内外面を黒化させた黒色土器片等がある。それらとともにわずか2点ではあるが、409の銅滓（遺物画像のみ掲載、付属CD-ROMに収録）が出土している。ただし、埋土中に炭の破片や灰層等は見られず、近辺に銅製品の鋳造遺構の存在を示唆するような状況は確認できない。

O③西 SD04 (第85図)

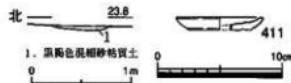
O③西区の南東隅付近で検出した、検出長4.3m、幅1.1m、深さ0.1mの規模を持つ逆L字形に屈曲した溝状遺構である。断面形状は浅い皿形を呈しており、直線的な南北部分でN 4°Wの方向を有している。そこから概ね直角に西方へ屈曲するが、丸まって途切れている。出土した遺物はごくわずかであるが、410の須恵器壺の年代観から8世紀代の溝状遺構と判断される。



第85図 O③西 SD04断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東 SD07 (第86図)

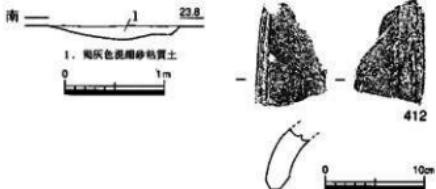
O③東区の中央部北壁付近で検出した、検出長6.0m、幅0.6m、深さ0.05mの規模を持つくの字形に屈曲した溝状遺構である。断面形状はごく浅い皿型を呈しており、直線的な南北部分でN 8°Eの方向を測る。そこから北西方向に鈍角に屈曲して調査区外に延びている。10世紀代の土器片が出土しており、13世紀の年代が想定される土師器小皿411は混入品の可能性が高い。一応当該期とするが、中世の溝状遺構である可能性もある。



第86図 O③東 SD07断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東 SD08 (第87図)

O③東区の中央部北壁付近で検出した、検出長5.3m、幅2.3m、深さ0.2mの規模を持つ直線的な溝状遺構である。断面形状は浅い三角形を呈しており、N62°Eの方向を有している。先述したO③東 SD07に先行する溝状遺構である。調査区北方へと延びているが、高松東道路調査E区ではこの続きは確認しておらず、削平によって消失してしまったものと想定できる。遺物量が僅少であり、固化した丸瓦412以外としては若干の須恵器片・土師器片があるのみである。先述したO③東 SD07に先行することを根拠に、当該期に属するものと判断する。



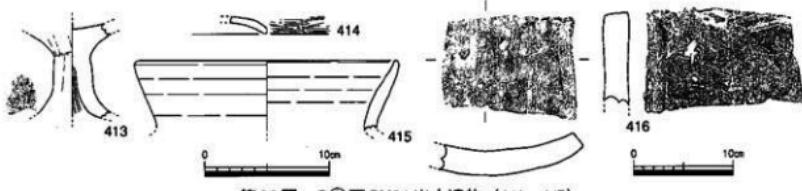
第87図 O③東 SD08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)

O③西 SX01 (第84・88図)

O③西区の中央付近で検出した落ち込み状の性格不明遺構である。検出長8.3m、検出幅7.8m、深さ0.2mの規模を有しており、先述したO③西 SD02・03に先行する遺構である。断面形状は標高の高い東側は傾斜が急で、西側はわずかに立ち上がる程度の逆台形状となっている。北側は高松東道路調査E区SD18に連続することから溝状遺構の可能性がある。

埋土からは413～416の遺物が出土している。413は弥生土器高杯の脚部である。全体的に磨滅が著しいが、軸部の下方にヘラ記号の一部が遺存している。弥生時代後期に属するものと想定される混入品

である。414は土師器蓋である。口縁端部をやや下方に湾曲させたものである。415は須恵器甕で、内湾気味に立ち上がる口縁部をしている。416は平瓦である。凸面の縄目タタキを板状工具によってほどんどナデ消している。414や415の形状から8世紀代に属するものと想定されるが、遺物量が少なく断定できない。O③西SX01の埋没後に先述した9~10世紀代のO③西SD02・03が掘られていることから、8~9世紀の年代が推定される。

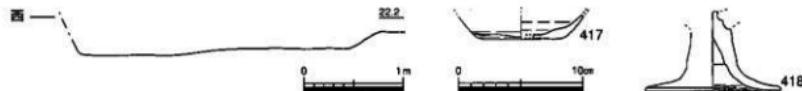


第88図 O③西SX01出土遺物 (1/4、1/5)

O③西SX03 (第89図)

O③西区の西半南壁沿いで検出した不整形な土坑状を呈した性格不明造構である。調査区外へ続いているため全容は把握できていないが、検出長で3.2m×2.9m、深さ0.4mを測る。断面形状は浅い逆台形を呈している。

出土遺物は、団化した須恵器杯417と土師器高杯418以外に、平行タタキ調整を施した須恵器甕肩部や平瓦片等がわずかに見られる。これらの土器の形状から8~9世紀代の年代が想定される。

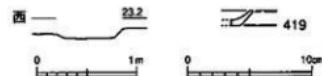


第89図 O③西SX03断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

(3)中世の遺構・遺物

O③東SD06 (第90図)

O③東区の西半中央付近で検出した、検出長1.3m、幅0.6m、深さ0.1mの規模を持つコの字形を呈する溝状造構である。断面形状は浅い逆台形を呈しており、直線的な南北部分でN7°Eの方向を有している。そこから両端が西方へほぼ直角に屈曲するがすぐに途切れている。419は埋土から出土した土師器小皿である。12~13世紀代の年代が想定される。



第90図 O③東SD06断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東SD09 (第91図)

O③東区の西端部、西壁沿いで検出した直線的な溝状造構である。西壁にかかるため全容は確認できなかったが、検出長10.0m、幅0.9m、深さ0.1mの規模を測る。断面形状は浅い三角形を呈しているようで、N1°Eの方向を有する。調査区外の北方へ連続すると思われるが、高松東道路調査E区で

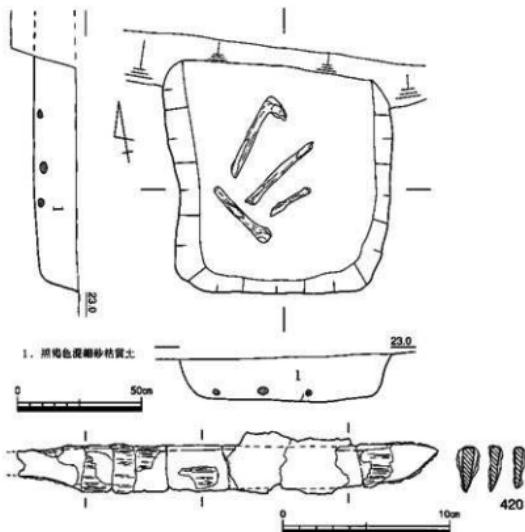


第91図 O③東SD09
断面図 (1/50)

は続きは確認されていない。埋土中から格子タタキ調整を施した須恵器壺腹部破片が出土しており、中世に属する溝状遺構と想定できる。

O③東SK04 (第92図)

O③東区の南西隅付近で確認した土壙墓である。本来ならSTとするべきところではあるが、調査時にはSKを使用したので、その呼称をそのまま使用して報告する。近世以降の搅乱によって北半分を消失しているが、本来の平面形態は隅丸長方形を呈していたと推測できる。検出長0.9m、幅0.9m、深さ0.2mの規模を有する。断面形態は逆台形を呈しており、主軸方向はN10°Eの方向を有する。床面は平坦にしている。床面直上から人骨1体分の下半身部分が出土した。非常に脆弱となっており、両足の大腿骨と脛骨以外は残っていなかった。地中にしみ込んだ雨水等の水によって溶けてしまったものと思われる。骨盤より上の骨は部分的に残っていた可能性が高いが、搅乱によって失われたものと想定される。人骨は当初の埋葬位置を留めているものであり、頭部を北に向けて描えた足の膝を折り曲げて、西方に横向けにされた状態で埋葬された様子が復元される。土層断面や床面の観察からは木棺の痕跡や焼けた痕跡がないことから、穴を掘って直接遺体を納めた土葬であったと判断できる。420は人骨の東側から出土した小刀である。茎の端部を欠損するが、残存長25.4cm、幅2.7cm、厚さ0.6cmを測る。全体に鏽が着いているが、部分的に木質が遺存しており、鞘の一部と判断できることから、この小刀は鞘に収めた状態で副葬されたことがわかる。その他、図示できなかったが、瓦器碗や土師器杯の破片がわずかに出土しており、中世の土壙墓であると判断できる。

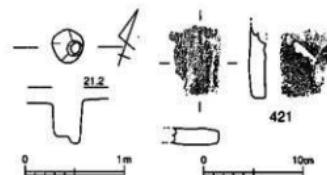


第92図 O③東SK04平・断面図(1/20)、出土遺物(1/3)

(4)O区の柱穴跡・遺物

O①SP01 (第93図)

O①区西端付近で検出した。30cm×20cmの楕円形を呈し、深さ44cmを測る。底面において柱の痕跡を確認している。埋土中から421の須恵器の平瓦が出土している。図示できなかったが古代に属すると思われる土器細片がわずかに出土している。



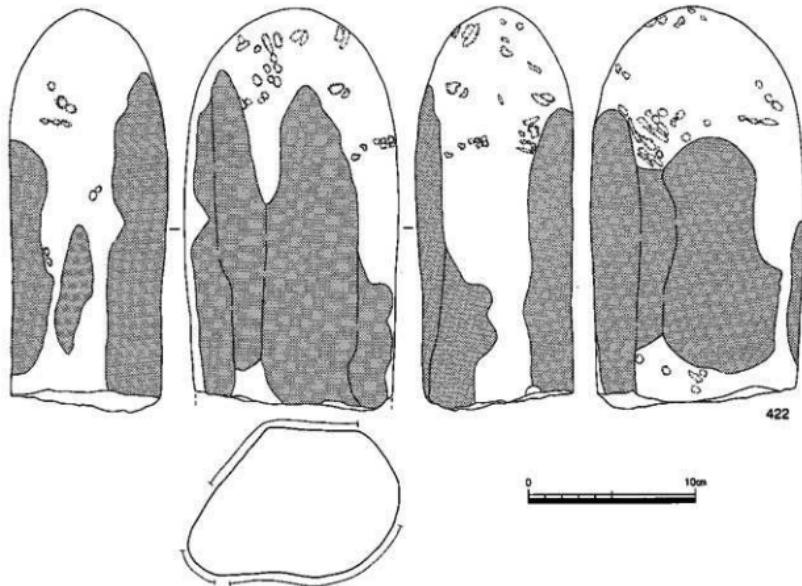
第93図 O①SP01平・断面図(1/50)、出土遺物(1/5)

O①SP18 (第94・95図)

O①区の中央部北壁付近で検出した。50cm×40cmの梢円形を呈し、深さ23cmを測る。埋土の中位からは、柱の詰め石として使用した可能性がある、422の砥石が出土している。砥石は砂岩製で4面を砥面に使用している。一端を欠損しているが、砥面が途中で途切れていることから、使用中に破損したために廃棄された可能性がある。



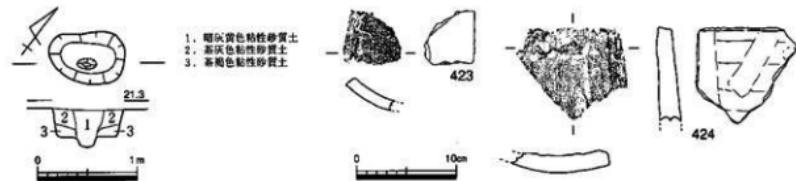
第94図 O①SP18
平・断面図 (1/50)



第95図 O①SP18出土遺物 (1/3)

O①SP21 (第96図)

O①区の中央部南壁付近で検出した。80cm×50cmの梢円形を呈し、深さ37cmを測る。柱穴跡のはば中央で柱の痕跡を確認している。埋土中からは瓦片と古代に属すると想定される土器細片が出土してい

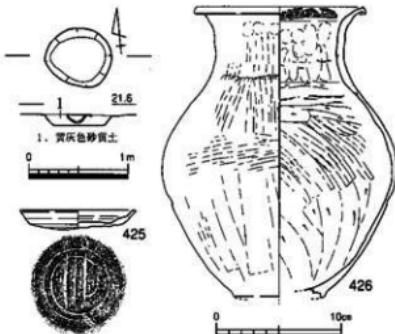


第96図 O①SP21 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/5)

る。図化した423・424の平瓦以外に、丸瓦の破片も出土している。

O②SP06 (第97図)

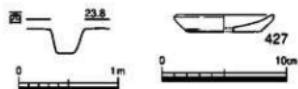
O②区西半の中央付近、第1面で検出した。75cm × 60cmの楕円形を呈し、深さ10cmを測る。柱穴跡のほぼ中央部、埋土の下位で426の弥生土器壺が横倒しの状態で出土した。やや中位が張り出した胴部に緩やかに外反する口径の広い口縁部が付くもので、端部を上下に拡張気味に肥厚させている。底部は平底である。弥生時代後期に属する遺物である。425は12世紀代の土師器小皿で、底面は回転ヘラ切り後の板状圧痕が見られる。見落とした中世の遺構に属していたものを混入した可能性があるため、この柱穴跡は弥生時代後期に属すると判断される。



第97図 O②SP06 平・断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東SP07 (第98図)

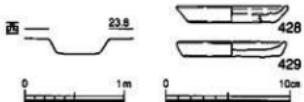
O③東区の中央部北壁付近で検出した。直径30cmの円形で、深さ24cmを測る。古代の溝状遺構O③東SP08の埋没後に掘られている。埋土から427の土師器小皿が出土した。他に図示できなかったが瓦器碗の小片もあり、これらの形状から12世紀代に属すると判断できる。



第98図 O③東SP07断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東SP08 (第99図)

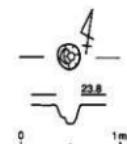
O③東区の中央部北壁付近、O③東SP07の北隣で検出した。直径60cmの円形で、深さ15cmの規模を有する。埋土中から土師器小皿428・429が出土した。形態から12～13世紀の年代が想定される。



第99図 O③東SP08断面図 (1/50)、出土遺物 (1/4)

O③東SP20 (第100図)

O③東区の東半北壁付近で検出した。25cm × 20cmの楕円形で、深さ19cmを測る。柱穴跡底面において柱の痕跡を確認している。中世に属すると想定される土師器壺の小片がわずかに出土している。この柱穴跡のすぐ東側には所属時期の判明しない掘立柱建物跡O③東SP01が存在している。この建物西辺の柱穴跡の並びとほぼ同じ方向でO③東SP20を北端にして3つの柱穴跡が並んでいることから、この建物跡に何らかの関係のある柱穴跡である可能性がある。

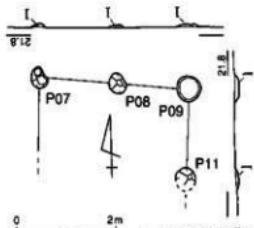


第100図 O③東SP20 平・断面図 (1/50)

(5) 時期不明の遺構

O②SB01 (第101図)

O②区の東半で検出した2間×1間以上の掘立柱建物跡である。調査区外南方へ続いているため全容は判明していないが、柱穴跡の間隔から判断すると、桁間を南北に持った南北棟の建物と思われる。調査区が狭小のため、2間×2間の総柱建物になる可能性もある。検出部分で3.0m×1.7mの規模で、床面積は5.1m²以上を測る。建物の主軸はN4°Eの方向を有している。

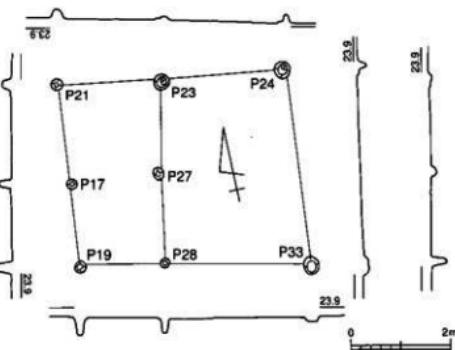


第101図 O②SB01
平・断面図 (1/100)

O③東SB01 (第102図)

O③東区の東半で検出した2間×2間の掘立柱建物跡で、桁間を東西に持った東西棟として復元した。中央やや西寄りに間仕切りを有しているとみられる。西辺の梁間が2間あるのに対し、東辺が1間となっているが、これは東辺の中央に存在した柱穴跡が削平のために失われてしまったのか、あるいは当初から存在しなかったのか、そのいずれかと想定されるがそれを判断する材料は得られていない。4.7m×4.0mの規模で、床面積は18.8m²を測る。建物主軸はN81°Wの方

向を有している。この建物跡の周辺には同じような埋土を有する柱穴跡が散在しており、それは北側の高松東道路調査E区にも続いている。さらにO③区の東方にもさらに広がるものとみられるため、複数の建物跡が存在した可能性が高く、その全容が解明された段階で再検討が必要である。

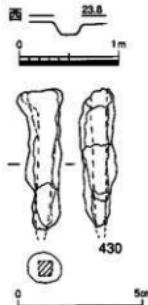


第102図 O③東SB01 平・断面図 (1/100)

O③東SP16 (第103図)

O③東区の東半で検出した。25cm×20cmの楕円形を呈し、深さ12cmの規模を測る。先述したO③東区SB01の西辺中央の柱穴跡に隣接する。埋土中からは図化した430の鉄器が1つ出土したのみで、時期は特定できない。

430は鉄釘である。全体を分厚い錫に覆われており、先端と基部の一部をそれぞれ欠損している。



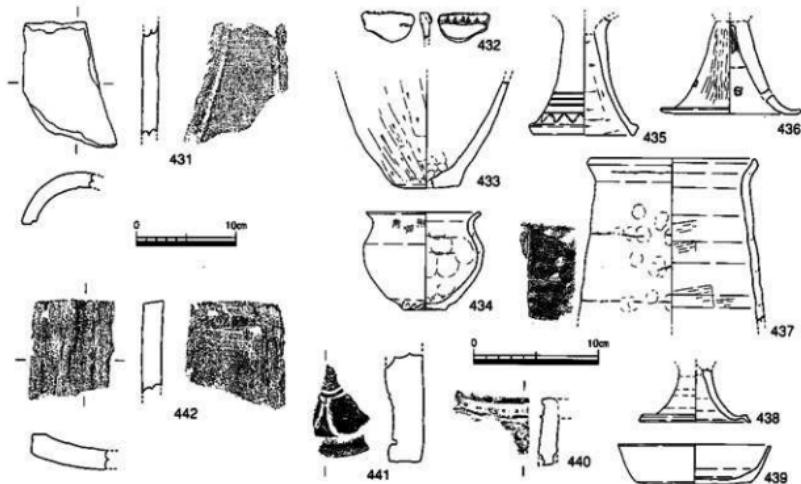
第103図
O③東SP16断面図(1/50)、
出土物(1/2)

(6) 包含層出土遺物 (第104図)

431～442はO区の包含層から出土した遺物のうちの一部を図化したものである。431はO①区の包含層から、432～437はO②区の包含層から、438～442はO③区の包含層から出土した遺物である。

431は丸瓦である。凹面には布压痕と布の合わせ目の痕跡が明瞭に残る。

432・433は弥生土器壺である。432は口縁端部外面に1条の刻み目凸帯を貼り付けたもので、縄文時代晩期の凸帯文土器の系譜をひいた弥生時代前期の壺である。433は外面のヘラケズリ調整が顕著で、平底を呈したものである。434は弥生土器壺である。器高が7.9cmの小型品であり、鉢としたほうが適切かもしれないが、頸部のすぼまりを基準に壺と判断する。突出気味の平底である。435・436は弥生土器高杯の脚部である。435は緩やかに外反する脚部で端部を肥厚させている。外面下半部にはヘラ描きの沈線4条と最下段に山形文を施している。杯部との接続は円盤充填によるものである。436は直線的に外に開いており、端部は強く外方へ開いている。下半部に4つの穿孔を施しており、杯部との接続は挿し込みによるものである。434～436は弥生時代後期に属するものであり、O②区の第1面のベース層である茶灰色粘性砂質土層から出土したものである。437は土師器の真蛸壺である。胴部外面の中位に十字のようなヘラ記号の一部が残っていた。438は須恵器高杯の脚部である。端部を折り曲げており、7世紀代のものと想定される。439は土師器杯である。底部は回転ヘラ切りで、13世紀代に位置付けられよう。440は軒平瓦の瓦当部の破片である。内区には文様が一部残っており、唐草文の中心飾り付近と想定される。外区に施された連珠文のうちの上帯の一部が認められるが、下帯は存在していなかった可能性が高い。7～8世紀代の年代が想定できる。441は軒丸瓦の瓦当部の破片である。外区は素縁で幅1.6cmを測る。蓮弁は素弁で六葉であったと想定できる。蓮弁内の下部に1個の連子が施されている。間弁は蓮弁の先端に備えており、先端は長く延びて中房に接している。中房の周囲には圓線が1条巡っている。高松東道路調査で出土している宝寿寺の創建瓦と同じものと判断できる。442は平瓦である。図化した瓦440～442の3つはすべてO③西区の包含層から出土している。



第104図 O区包含層出土遺物 (1/4、1/5)

(7) 小結

O区では弥生時代から中世にかけての遺構・遺物を検出した。

弥生時代の遺構・遺物は調査区西端付近のO①区に集中する傾向がみられる。ただし、確認できた遺構は溝状遺構、自然河川跡各1条、性格不明遺構1基であり、その数は少ない。いずれも弥生時代後期に属するものである。O②・③区は丘陵の西側斜面に当たるために後世の削平によって当該期の遺構が消滅してしまった可能性もあるが、出土している遺物量も決して多くはなく、居住域としての土地利用は想定し難い。ただし、高松東道路調査E区ではこの丘陵の東斜面において竪穴住居跡1棟と掘立柱建物跡2棟が確認されており、東斜面が居住域であったことが想定できる。なお、自然河川跡は当該期のうちにほとんど埋没してしまったようである。

古墳時代の明確な遺構・遺物は確認していない。

古代では、ほぼO区全体に遺構・遺物が認められるようになる。O②区西端でその一部を確認した竪穴住居跡O②SH01は、わずかな出土遺物の年代観から8世紀代のものと判断した。高松東道路調査E区では作業小屋的な性格を想定した当該期の竪穴住居跡が2棟確認されているが、それらとは建物規模は似ているが、建物の方向が異なっている点に若干の違和感が残る。O③西区で確認した不明遺構O③西SX01は溝状遺構の可能性があり、当該期の遺物が出土している。周辺に当該期の遺構の存在が想定できる。9～10世紀代の遺構は掘立柱建物跡1棟と数条の溝状遺構がある。掘立柱建物跡O①SB01は総柱構造を有しており、倉庫として使用されたものと判断できる。したがって、近辺に住居としての建物が存在する可能性がある。O①SB01の周辺には柱穴跡が存在しており、その可能性は高いと言える。なお、遺物の出土がないために時期不明のO②SB01は柱穴跡の規模や建物の方向、埋土の土質等から当該期に属する建物の可能性が高い。溝状遺構は条里地割の方向に合致するものと、しないものの両者があるが、出土遺物には明確な時期差がうかがえず、その要因については判然としない。

中世の遺構は、O③西区で検出した溝状遺構2条と土壙墓1基、O③東区で検出した若干の柱穴跡が認められるだけである。溝状遺構O③西SD09は条里地割の方向に合致するものである。O③西区南西隅で検出した土壙墓O③SK04では、人骨とともに副葬された小刀1振を確認した。当該期の土壙墓の中には屋敷墓として敷地の隅に埋葬する例もあり、その可能性も考えたが、周囲の削平が著しく屋敷墓と断定するだけの資料がない。また、O③東区の柱穴跡の近辺には時期不明の掘立柱建物跡O③東SB01があるが、建物の方向や柱穴跡の規模、埋土の土質等から当該期の可能性がある。高松東道路E区でも中世の遺構は数が少なく、生活の中心の場ではないようである。

第5節 木製品

前田東・中村遺跡では、現在でも埋没旧河道内を伏流する地下水が豊富であることや、幾重にも堆積した粘土層によって外気が遮断されていたこと等の条件が揃ったことによって木製品が良好に遺存していた。過去の高松東道路調査のみならず、今回の四国横断自動車道調査においても多数の木製品が出土した。ここでは四国横断自動車道調査で出土した木製品を、調査区単位、さらに遺構単位で解説する。

1. H区の木製品

443 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠北側壁の下から2段目の側板である。板材を組み合わせるための両端からやや内側に大きな切れ込みを入れている。切れ込みは板幅の約4分の3に及び、反対側からもわずかな切れ込みが入れられている。

444 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠北側壁の最下段（1段目）の側板である。板材を組み合わせるための切れ込みを入れる。切れ込みは板幅の中ほどまであり、反対側からもわずかに切れ込みを入れている。手斧の加工痕がわずかに残る。

445 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠東側壁の最上段（3段目）の側板である。部分的に欠損するが、組み合わせのための切れ込みを入れている。片側から板幅の約2分の1、反対側から4分の1ほどの切れ込みである。

446 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠東側壁の2段目の側板である。両端の一部を欠損し、中央で2つに割れている。板幅の片側から小さめの切れ込みを、反対側からはわずかな切れ込みを入れているが、他の側板のような大きな切れ込みではない。

447 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠東側壁の最下段（1段目）の側板である。片側から板幅の約2分の1の切れ込みを入れている。板材には隅丸方形形状の穿孔が2個所認められ、他で使用されていた建材を転用したものである。一端付近には鋸による切断痕が認められるが、板幅の約4分の3で止まっており、誤って切り目を入れてしまったものと想定できる。

448 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠南側壁の最上段（3段目）の側板の破片である。板幅の約4分の3に及ぶ切れ込みを入れている。端部は丸みを帯びて切られており、他の用途で使われた建材を井戸枠に転用した可能性がある。

449 井戸枠部材（第105図）

H①SE01の井戸枠南側壁の2段目での側板である。一部を欠損するが、組み合わせのための切れ込みを入れている。片側から板幅の約3分の1、反対側から3分の1ほどの切れ込みである。

450 井戸枠部材（第106図）

H①SE01の井戸枠南側の最下段（1段目）の側板である。組み合わせのために片側から板幅の約2分の1の切れ込みを入れており、反対側にもわずかな切れ込みを入れている。

451 井戸枠部材（第106図）

H①SE01の井戸枠西側の最上段（3段目）の側板である。一部を欠損しているが、組み合わせのための切れ込みを入れている。片側から板幅の約3分の1を、反対側からわずかな切れ込みを入れている。

452 井戸枠部材（第106図）

H①SE01の井戸枠西側の2段目の側板である。一端の一部を欠損している。組み合わせのための切れ込みは、片側から板幅の約3分の1、反対側から約4分の1を切り込んでいる。わずかに手斧による加工痕が残っている。

453 井戸枠部材（第106図）

H①SE01の井戸枠西側の最下段（1段目）の側板である。組み合わせのための切れ込みは、片側からのみであり、板幅の約3分の1を切り込んでいる。

454 板材（第106図）

H①SE01の井戸の内部から出土した板材である。井戸枠側板の一部かと思われたが、木取りが異なり、直接接合もしないことから、別の板材と想定される。

455 柱材（第106図）

H①SE01の井戸枠最下段の外側部分の掘り方内から出土した材である。かなり腐食が進んでいるが、多角形に面取りを施していることがわかる。井戸枠を固定する目的で使用されたものと考えられる。

456 井戸枠縦隅木（第107図）

H②SE01の井戸枠北東側の2本の縦隅木のうちの井筒側のものである。多角形に面取りを施しており、一方向に井筒をはめ込むためのガイドとして溝を掘っている。中位と下位の2個所に枘穴を穿ち、短い角材を用いてもう1本の縦隅木（457）と結合させていた。

457 井戸枠縦隅木（第107図）

H②SE01の井戸枠北東側の2本の縦隅木のうちの板壁側のものである。四角形を基調にした柱状であるが、角はすべて面取りを行っている。中位と下位にはもう1つの縦隅木（456）との結合用の枘穴を穿っている。中位の枘穴のすぐ下の個所と、下位の枘穴には直交する方向の個所に枘穴があり、板壁側の横桟を挿し込んでいた。下位には手斧による加工痕が明瞭に残る。

458 井戸枠縦隅木（第107図）

H②SE01の井戸枠南西側の3本の縦隅木のうち井筒側のものである。多角形に面取りを施しており、一方向に井筒をはめ込むためのガイドとして溝を掘っている。中位と下位の2個所に枘穴を穿ち、短い角材を用いて別の縦隅木（459）と結合させていた。貫通させていない方形の穴が等間隔で3個残つており、他に用いていた建材を転用したものと見られる。

459 井戸枠縦隅木（第107図）

H②SE01の井戸枠南西側の3本の縦隅木のうち井筒側・板壁側と直接繋がらないものである。多角形に面取りを施しており、中位と下位の2個所に枘穴を穿ち、縦隅木（458）と結合していた。下位の枘穴は、正方形の割り込みを入れた上で穿孔している。

460 井戸枠縦隅木（第108図）

H②SE01の井戸枠南西側の3本の縦隅木のうち板壁側のものである。四角形を基調にした柱状だが、角は面取りを行っている。基部は片面を斜めにカットしている。中位に1つと下位に2つの枘穴を穿っている。同じ方向に穿孔している中位と下位の枘穴にはそれぞれ板壁側の横桟を差し込んでいた。

下位の枘穴と直行する方向の枘穴は正方形の割り込みを入れた上で穿孔している。縦隅木459と460は引っ付けているだけで、角材等による結合は認められない。

461 井戸枠井筒（第108図）

H②SE01の直径60cm程度の材を半分に割り、中身を割り抜いて井筒として使用している。底辺のやや上に小さな方形の穿孔が3つ穿たれている。断面の形状はきれいなU字形を呈しており、両端面はきれいに仕上げられている。木樋として使用されたものを井戸枠に転用した可能性がある。

462 井戸枠部材（第108図）

H②SE01の井戸枠の側壁を構成する板材の一つで、上側の板材である。両面に加工痕が明瞭に残る。長辺の上方付近の両側に割り込みを入れている。

463 井戸枠部材（第108図）

H②SE01の井戸枠の側壁を構成する板材の一つで、下側の板材である。全面に加工痕が明瞭に残る。片側の長辺側面に方形の穴を設けており、楔等で同様の板材を繋いでいた可能性が高い。別の用途からの転用材と考えられよう。

464 井戸枠部材（第108図）

H②SE01の井戸枠の側壁を構成する板材の一つで、上側の板材462に接して置かれた板材である。下端を枘状に加工しており、この部分が横桟に接するが、横桟にはこの枘を受けるような加工は見られない。長辺の中ほどに小さな穿孔を1つ施している。他の用途からの転用材の可能性が高い。

465 井戸枠部材（第108図）

H②SE01の井戸枠の側壁を構成する横桟の一つで、側壁中位に設置されたものである。断面正方形の角材の両端を加工して枘にしており、先述した縦隅木457と460の枘穴に差し込んで固定している。

466 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の側壁を構成する横桟の一つで、側壁下位に設置されたものである。断面梢円形の面取りをした角材の両端を加工して枘にしており、縦隅木457と460の下位の枘穴に差し込んで固定していたようであるが、枘は両端とも折損している。

467 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隅木456と457を結合する下位の枘穴に差し込んでいた短い角材である。加工痕が残っている。

468 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隅木456と457を結合する中位の枘穴に差し込んでいた短い角材である。片方の端部から約3分の1のところで腐食が進んだ部分が認められるが、この部分が縦隅木の境目であったためと判断できる。

469 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隅木457の下位の枘穴に入っていた短い角材である。直接接合はしなかったものの、木取りや寸法等から、この角材は下位の横桟466の枘であった可能性が高い。

470 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隅木458と459を結合する中位の枘穴に差し込んでいた短い角材である。部分的に加工痕が残っている。

471 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隔木458と459を結合する下位の枘穴に差し込んでいた短い角材である。片面に加工痕がよく残っている。

472 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隔木460の下位の枘穴に差し込まれていた短い角材である。横桟466の枘が短かったため、補強のための楔として用いられたものと考えられる。

473 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隔木460の中位の枘穴に差し込まれていた短い角材である。横桟465の枘が短かったため、補強のための楔として用いられたものと考えられる。

474 井戸枠部材（第109図）

H②SE01の井戸枠の縦隔木457の下位の枘穴に差し込まれていた短い角材である。木取りがはっきりしないが、横桟の466の枘であった可能性がある。

475 斎串（第109図）

H②SE01の井筒内部から出土した斎串である。やや幅広で厚めの箸状を呈しており、先端を尖らせている。

476 板材（第109図）

H②SE01の井筒内部の下層から出土した板材である。方形の突起部を設けてそこに2つの方形をした穴を穿っている。穴は貫通してはいない。他の部材と組み合わせて使ったものと思われるが、全体の形状やその用途については判明しない。

477 木栓（第109図）

H②SE01の井筒内部の下層から出土した木栓である。全体に加工痕が明瞭に残っている。上端部のみを隅丸正方形に彫り残し、下半部は丸く仕上げている。樽の栓として使われたもの可能性がある。

478 樹皮（第109図）

H①SR01から出土した。片側が黒く炭化しており、板材の一部として認識していたが、樹種同定の結果、炭化した樹皮であることが判明した。加工痕などは確認できず、加工木の一部が剥離したものか、自然木なのかも判明しない。

479 碇版（第110図）

H①SP56の柱穴跡の底面で検出した厚い板材である。礎石の代わりに板を使用した礎版として用いられている。片面の中央部には柱材の重みによる凹みが認められる。

480 碇版（第110図）

H①SP68の柱穴跡の底面で検出した厚い板材である。礎版として使用されていた。なお、前述した礎板479と接合することが判明しており、直方体状の木塊を二分してそれぞれを礎版として使用したことがわかる。

481 柱材（第110図）

H②SP38の柱穴跡の中に遺存していた柱材の基部である。多角形に面取りを施しており、底部は多方向から削っている。加工痕が明瞭に認められる。

482 柱材（第110図）

H②SP40の柱穴跡の中に遺存していた柱材の基部である。多角形に面取りを施しており、不整な十

角形を呈している。底部はほぼ水平に切られており、底面には仕上げ時の加工痕が認められる。

2. I 区の木製品

483 船形木製品（第111図）

I②SR02・03の合流点付近で出土した。一端を欠損するが、形状から船形と判断した。全体を船形に加工した後に内側をV字形に削り込んでいる。船底部分には明瞭に残っている。先端部に貫通した小穿孔の痕跡と削り込み部分の先端に貫通していない小孔が認められる。

484 杭材（第111図）

I②SR02・03で出土した杭材である。体部と先端を欠損している。体部は面取りを施しているようである。先端は4～5方向から切り込んで尖らせている。

485 杭材（第111図）

I②SR02・03で出土した杭材である。基部を欠損している。体部には樹皮が付いたままの状態で、先端を8方向からカットして先端を尖らせている。

486 曲げ物部材（第111図）

I③SK12の井戸枠内部から出土した、曲げ物のタガの破片である。内面には部分的にケビキが施されたり、桜の樹皮で縫じている。

487 曲げ物部材（第111図）

I③SK12の井戸枠内部から出土した、曲げ物の底板である。破損が著しい。

488 曲げ物部材（第111図）

I③SK13の井戸枠として転用された曲げ物の側板である。5つ組み合わされていた曲げ物のうち、最上段に使用されていた。内面にはケビキが施されており、側板を縫じた桜の樹皮の一部が遺存する。

489 曲げ物部材（第111図）

I③SK13の井戸枠として転用された曲げ物の側板である。5つ組み合わされていた曲げ物のうち、上から3つめに使用されていた。内面には3方向のケビキが施されており、側板を縫じた桜の樹皮が遺存している。

490 曲げ物部材（第111図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した、曲げ物の側板である。内面にはケビキが認められ、桜の樹皮で縫じている。側板の幅の中位には木釘孔と思われる小孔が開けられている。

491 曲げ物部材（第111図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した、曲げ物の側板である。内面にはケビキが認められ、桜の樹皮を用いて縫じている。木釘孔と見られる小孔が開けられており、490と同一個体の可能性がある。

492 曲げ物部材（第111図）

I③SK13の井戸枠として転用された曲げ物の側板の破片である。5つ組み合わされていた曲げ物のうち、最下段から2つ目の曲げ物の下部の破片である。底板を固定するための木釘孔が複数開けられている。側板を縫じた部分は縫じ紐が失われ、孔だけが認められる。横方向に割れた部分を桜の樹皮を用いて補修したことがわかる資料である。

493 曲げ物部材（第112図）

I③SK13の掘り方から出土した曲げ物の側板の破片である。内面には斜め方向のケビキが残る。

494 板材（第112図）

I③SK13の井戸枠に転用した曲げ物のうち上から1段目と2段目を接続・固定するために用いられた板材である。2段目の曲げ物の0時・3時・6時・9時の4方向の外側に接して板材を立てて、その板材の外側に1段目の曲げ物を設置することで2つの曲げ物を接続している。一端には小孔が開けられ木釘が遺存していた。1段目の曲げ物と板材を木釘で固定したものと見られる。

495 板材（第112図）

I③SK13の上から1段目と2段目の曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。一端には木釘を打つための小孔が開けられている。

496 板材（第112図）

I③SK13の上から1段目と2段目の曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。木釘を通すための小孔は開けられていない。

497 板材（第112図）

I③SK13の上から3段目と4段目の曲げ物を接続・固定した2枚の板材の一つである。4段目の曲げ物の0時と6時の2方向の外側に接して板材を立て、その外側に3段目を置いて木釘で留めて接続・固定している。小孔は上下に2個あり、それぞれの曲げ物と木釘で接続したことがわかる。

498 板材（第112図）

I③SK13の上から3段目と4段目の曲げ物を接続・固定した497と対になる板材である。上下2段に木釘を通す小孔が開けられている。

499 板材（第112図）

I③SK13の上から1段目と2段目の曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。木釘を通すための小孔は開けられていない。残りの3つの板材とは異なって長さが短いが、497と対になって固定・接続の補助的な役割を果たしたためと考えられる。

500 斎串（第112図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した斎串である。頭部は主頭状で側縁部に3対の切り掛けを施したものである。

501 斎串（第112図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した斎串である。下半部を欠損するが、頭部は主頭状で側縁部に1対の切り掛けが認められる。

502 斎串（第112図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した木製品である。2つに折損しており、直接接合はしないが、木取りや形状から同一個体と判断した。かなり肉厚ではあるが、棒状をした斎串と判断する。

503 櫛（第112図）

I③SK13の井戸枠内部、上から3段目の曲げ物の上面付近から出土した櫛である。2つに折れているが、全容の判明した、細かく歯を挽いた横櫛である。

504 角材（第112図）

I③SK13の井戸枠内部から出土した、棒状の角材である。一端をやや細くなるように加工している。

505 櫛（第112図）

I③SK16の井戸枠内部、下段の曲げ物内から出土した櫛である。両端を欠損するが、細かく歯を挽い

た横櫛である。

506 曲げ物部材（第112図）

I③SK16の井戸枠内部、下段の曲げ物内の505の櫛の横から出土した曲げ物の側板の一部である。桜の樹皮を用いて縫じている。

507 曲げ物部材（第112図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した曲げ物の破片である。桜の樹皮で縫じており、小孔には木釘が遺存している。曲げ物の側板と考えられる。

508 曲げ物部材（第113図）

I③SK16の井戸枠に転用されていた2段の曲げ物のうち、上側の曲げ物に付けられた側板である。幅の広い側板の上に、幅の狭い側板をめぐらせて木釘で固定している。側板には曲げ物側板に固定するための木釘孔が多数認められる。

509 曲げ物部材（第113図）

I③SK16の井戸枠に転用された上段の曲げ物の側板である。内面にはケビキが施されており、下部には底板を固定するための木釘孔が多数開けられている。

510 曲げ物部材（第113図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した板材の破片で、曲げ物の底板と想定される。509の曲げ物側板とは接合しなかったが、井戸枠に転用した以上底板は必要がないため、別の用途で使ったものと考えられる。

511 板材（第113図）

I③SK16の上下2つの曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。下段の0時・3時・6時・9時の4方向の外側に接して板材を立て、その外側に上段を置いて接続・固定させている。木釘用の小孔は開けられていない。

512 板材（第113図）

I③SK16の上下2つの曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。一端付近に木釘用の小孔が開けられている。

513（第113図）

I③SK16の曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。中央の側辺よりに梢円形の孔が1つ穿たれている。511や512とは長さ・幅や加工の具合が異なり、手近な板材を間に合わせて使用したように推測される。

514 板材（第113図）

I③SK16の曲げ物を接続・固定した4枚の板材の一つである。サイズや形状、加工の具合は512・513と類似しているが、木釘用の小孔は穿たれていない。

515 板材（第113図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した板材である。長側辺の一方は弧を描くように曲線で仕上げている。用途はわからない。

516 板材（第113図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した板材である。長側辺の片側には木釘用と目される小孔が3個認められる。反対側にも小孔が開けられていたようで、その痕跡が残っている。用途はわからない。

517 板材（第114図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した板材で、破損が進んでいる。小口の片側付近には板材を浅い溝状に掘り込み、その中に2つの穿孔を施している。用途はわからない。

518 角材（第114図）

I③SK16の井戸枠内部から出土した角材である。断面が長方形を呈した厚みのある角材で、一端を細く削り出している。対反付近には片側から方形の切り込みを施している。用途はわからない。

519 杭材（第114図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。井戸枠の曲げ物を支えるようにして、すぐそばに打ち込まれていた。樹皮はきれいに取り去っており、先端を4方向からカットして尖らせている。

520 杭材（第114図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。調査区の南壁に掛かった部分から出土したため定かではないが、519の杭材と同様に、曲げ物を支える目的で打ち込まれていたものと想定される。先端は2方向からカットして尖らせている。

521 杭材（第114図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。519・520とは異なってかなり太いものであり、先端部は3方向からカットして尖らせているようである。曲げ物の外側で横倒しになっており、支えとして打ち込まれていたかどうかは判明しない。

522 杭材（第114図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。521と同様に太いもので、先端は4方向からカットして尖らせており、加工痕が明瞭に残る。曲げ物の支えとして使われた可能性がある。

523 杭材（第114図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。519・520とほぼ同じ太さで、先端を4方向からカットして尖らせている。曲げ物を支える目的で打ち込まれていたものである。

524 杭材（第115図）

I③SK16の掘り方から出土した杭材である。521・522と同様の太いもので、先端は2方向からカットしている。カット面には加工痕が明瞭に残る。横倒しの状態で検出した。

525 曲げ物部材（第115図）

I③SK16の掘り方から出土した曲げ物の底板である。一部を欠損している。側板との接合は木釘を用いたものと想定される。

526 柱材（第115図）

I③SP201の柱穴跡内から出土した柱材の破片である。多角形に面取りを行った柱材の表面の一部が剥離したものと判断できる。表面には加工痕が明瞭に残り、裏面にはまったく認められない。

527 杭材（第115図）

I③SP212の柱穴跡内から出土した杭材である。先端を2方向からカットして尖らせている。建物の柱の先端を杭状に加工したとは考え難いことから、この柱穴は横列であった可能性が高い。

528 柱材（第115図）

I③SP245の柱穴跡内から出土した柱材の基部である。底面は平らに切り取られている。柱には面取りを行っているようである。

529 柱材（第115図）

I④SP36の柱穴跡内から出土した柱材の基部である。柱は断面が不整梢円形を呈しているが、部分的な腐食によるものであり、本来は円形に近かったものと想定される。底面は平らに切られている。

3. J区の木製品

530 （第115図）

J④SP21の柱穴跡内から出土した柱材の基部である。柱は面取りされて、断面十角形を呈している。底面は平らに切られており、加工痕が明瞭に残る。

4. L区の木製品

531 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠北側壁を構成する板材で、532と組み合う。長側辺の片側下部に方形の割り込みを入れている。両面の下半部には手斧の加工痕が残る。

532 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠北側壁を構成する板材で、531と組み合う。長側辺の片側下部に方形の割り込みを入れる。加工痕が明瞭に残る。

533 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠北側壁を構成する細長い板材である。北側壁の中位に接した状態で東・西側壁の方形の割り込みに差し込まれ、両側壁を支える役割を持った横棟である。

534 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠東側壁を構成する板材である。535と組み合う。縦方向に2つに折損している。長側辺の中位に、方形の割り込みではなく方形の穿孔がなされている。加工痕が明瞭に残る。

535 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠東側壁を構成する板材である。534と組み合う。長側辺の中位に方形の割り込みが入れられている。

536 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠東側壁を構成する細長い板材である。東側壁の下位に接した状態で北・南側壁の方形の割り込みに差し込まれ、両側壁を支える役割を持った横棟である。

537 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠東側壁の外面に置かれた板材である。後述する板材544の上に、長辺を東側壁外面に沿わせて、あたかも蓋をするかのように置かれていたものである。

538 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠南側壁を1枚で構成する板材である。両側の長側辺下部に方形の割り込みを入れている。手斧による加工痕が下半部に見られる。

539 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠南側壁を構成する板材である。一部を欠損するが、両端の下半分を切り取って柄状に仕上げている。片側は先に小孔を開けておき、それをガイドとして鋸で板を切り取ったと思われる。

540 井戸枠部材（第117図）

L③SE01の井戸枠西側壁を構成する板材である。541と組み合う。長側辺の中位に方形の割り込みが入れられている。

541 井戸枠部材（第117図）

L③SE01の井戸枠西側壁を構成する板材である。540と組み合う。長側辺の中位に方形の割り込みが入れられている。なお井戸の内面に当たる面の下端から約45cmの部分は方形に抉られており、厚みが約半分になっている。540には同様の細工は認められず、また、この部位に組み合う材も確認できていないことから、この板材は他の用材の転用の可能性が高い。

542 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠西側壁を構成する細長い板材である。西側壁の上位に接した、井戸の横桟と想定されるが、北・南側壁にこの横桟をはめ込むような加工は見られない。

543 井戸枠部材（第116図）

L③SE01の井戸枠西側壁を構成する細長い板材である。西側壁の下位に接した状態で、北・南側壁の方形の割り込みに差し込まれて両側壁を支える役目を持った横桟である。両端が削り込まれてやや幅細になっており、方形の割り込みの大きさに合わせて削られたことがわかる。

544 井戸枠部材（第117図）

L③SE01の井戸枠東側壁の外面に置かれた板材である。横長の板材の両端からやや内側部分に、片方は長側辺の両側から、もう一方は長側辺の片側から切り込みを入れ、その両端下部を取り除いて両端を枘状に加工しているため、全体の形状としては横長の逆凸字のような格好をしている。この枘状の部分を、東側壁の中位両端に差し込まれた横桟（533と539）に引っ掛けるようにして置かれていた。先述した板材537はこの上に横方向に置かれていたことになる。なぜ外側にこのような細工を施したのかは判明しないが、井戸の補強を目的としたものと判断される。

545 井戸枠部材（第117図）

L③SE01の井戸枠の北西コーナー外側で、井戸の側壁の隙間を防ぐかのように立て掛けられていた板材である。西側壁の横桟543の端部に乗せられていただけであり、接合のための加工などは見られない。他のコーナー部分では、同様の板材は認められなかった。

546 井戸枠部材（第117図）

L③SE01の東側壁の上端と同じ高さの位置に、東側壁に沿うように倒れた状態で検出した。この井戸に関わる部材であると判断できるが、どの部位に、どのように使われたのかを明らかにするような手がかりは得られなかった。

547 木錘（第117図）

L③SE01の井戸枠内部から出土した木錘である。丸太材の中心を細く削って作っており、面取りをしたような状態に仕上がっている。加工痕が明瞭に残る。端部の片側には樹皮が残っている部分も認められる。

548 加工材（第117図）

L③SE01の井戸枠内部から出土した加工材である。欠損部があり、全容が判明しない。上端部分に割り込みを入れているようであるが、そこで欠損しているために用途についてはわからない。

549 加工材（第117図）

L③SE01の井戸枠内部から出土した加工材である。全体の形状は概ね三角形を呈しているが、先端はやや長めに削り出している。先端部に断面三角形の切り欠きを入れている。用途不明の材である。

5. M区の木製品

550 権（第118図）

M①SR01・02合流部の最下層から出土した材である。断面三角形を呈したミカン割り材に加工を施しており、一端をやや丸みを持って尖らせている。反対側は折損しているため全体の形状は判然としないが、権の製作途上の未成品の可能性が高いと判断した。

551 板材（第117図）

M①SR01の砂層から出土した板材である。台形状を呈しており、片面には加工痕が良く残っている。台形の底辺部分には端部をカットした加工痕が明瞭である。何らかの小型品の製作している途中の段階と思われるが、完成形の見当は付かない。

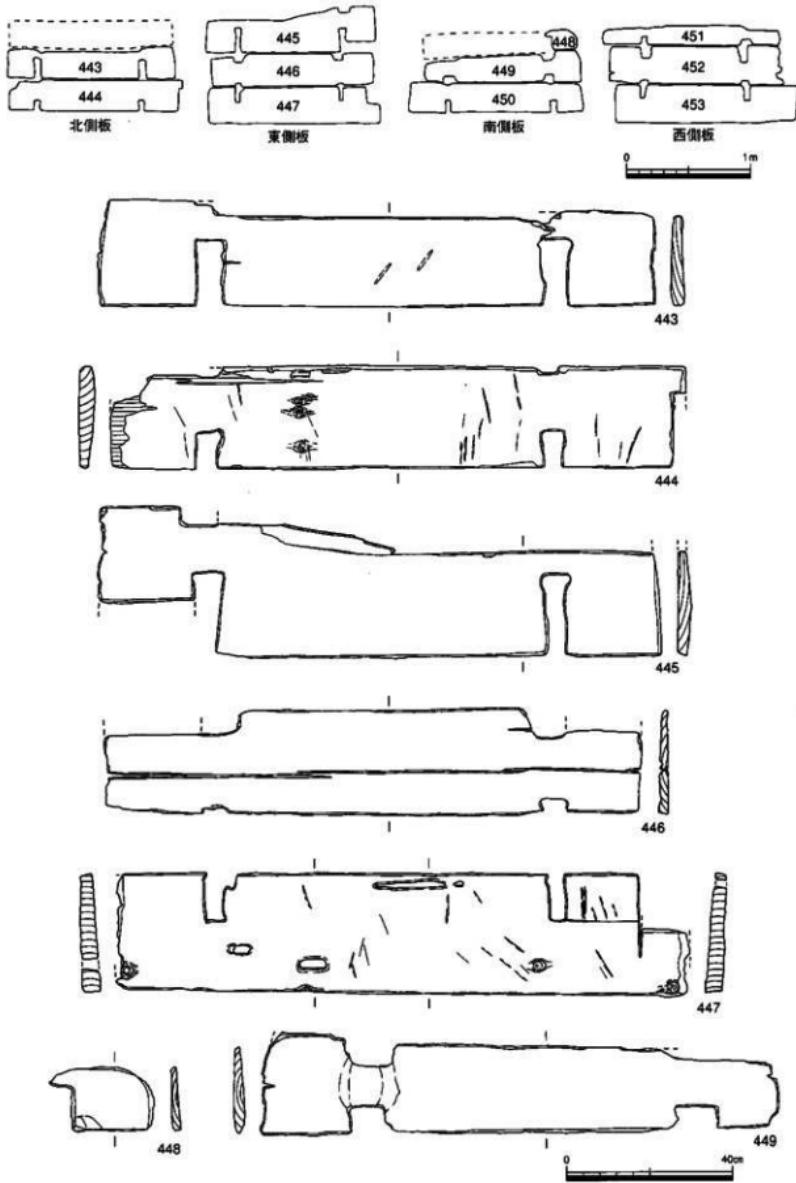
552 曲げ物部材（第117図）

M①SX01の清掃中に検出した曲げ物の底板である。中央で2つに割れている。出土状況がはっきりしないため、M①SX01に伴うものかどうかは定かではないが、M①SX01は弥生時代の遺構であることから、この遺物とは年代観が合わない。

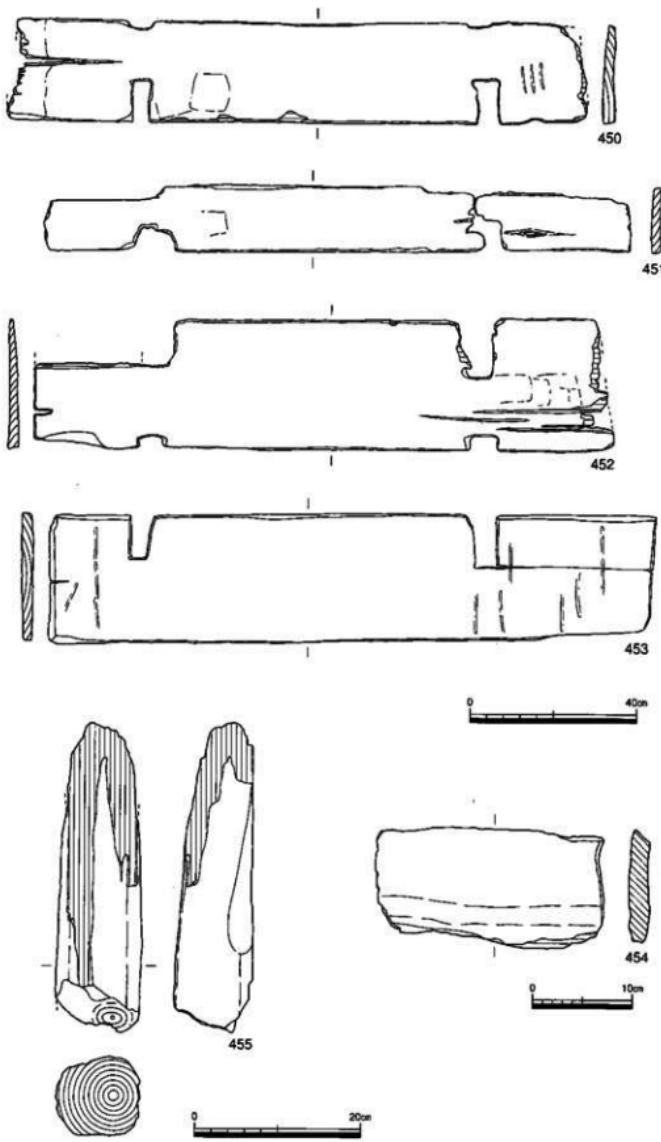
6. N区の木製品

553 柱材（第118図）

N②SP07の柱穴跡の中から出土した柱材の基部である。表面の腐食が著しい。底面は平らに切られしており、加工痕が認められる。

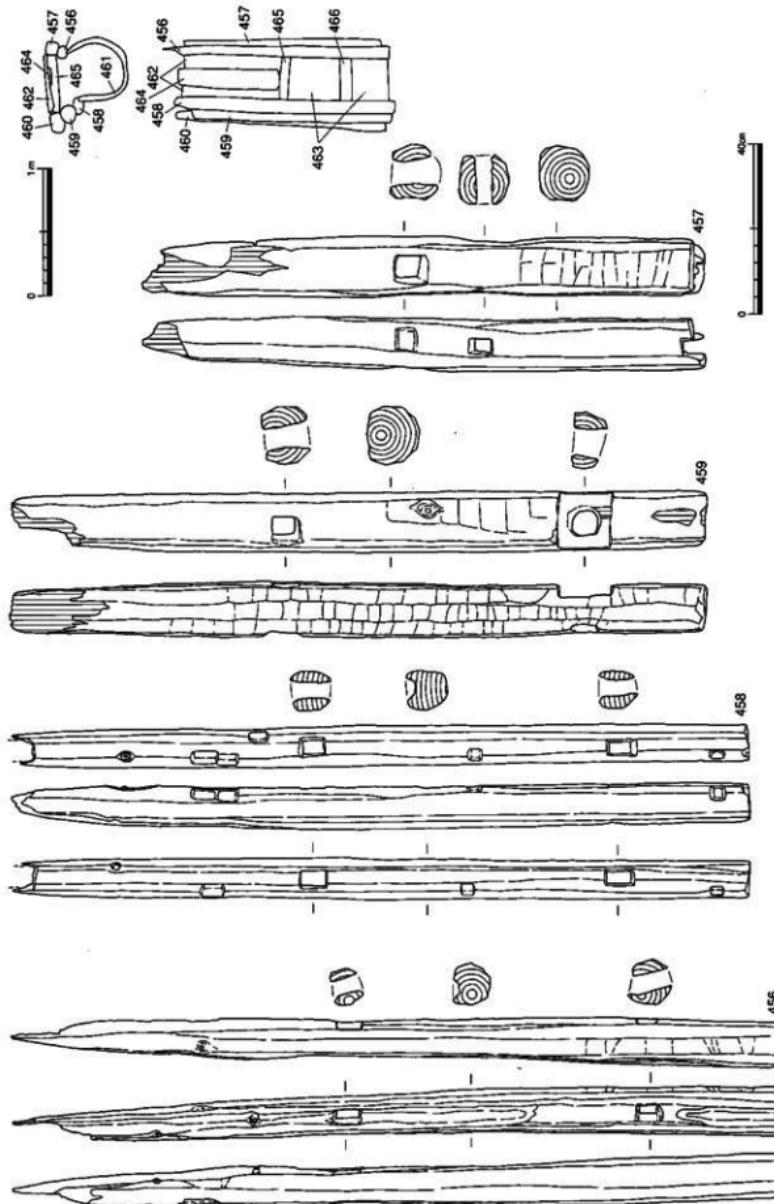


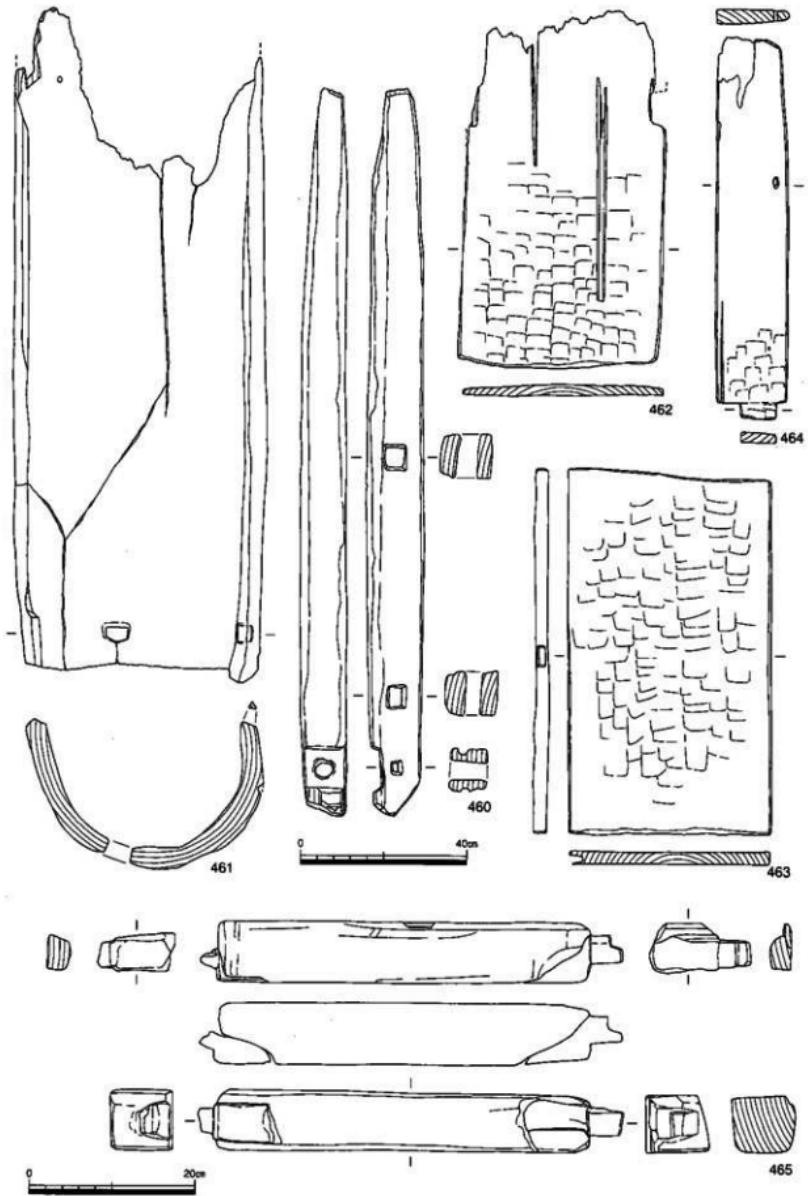
第105図 H①SE01井戸枠模式図(1/40)、木製品実測図①(1/12)



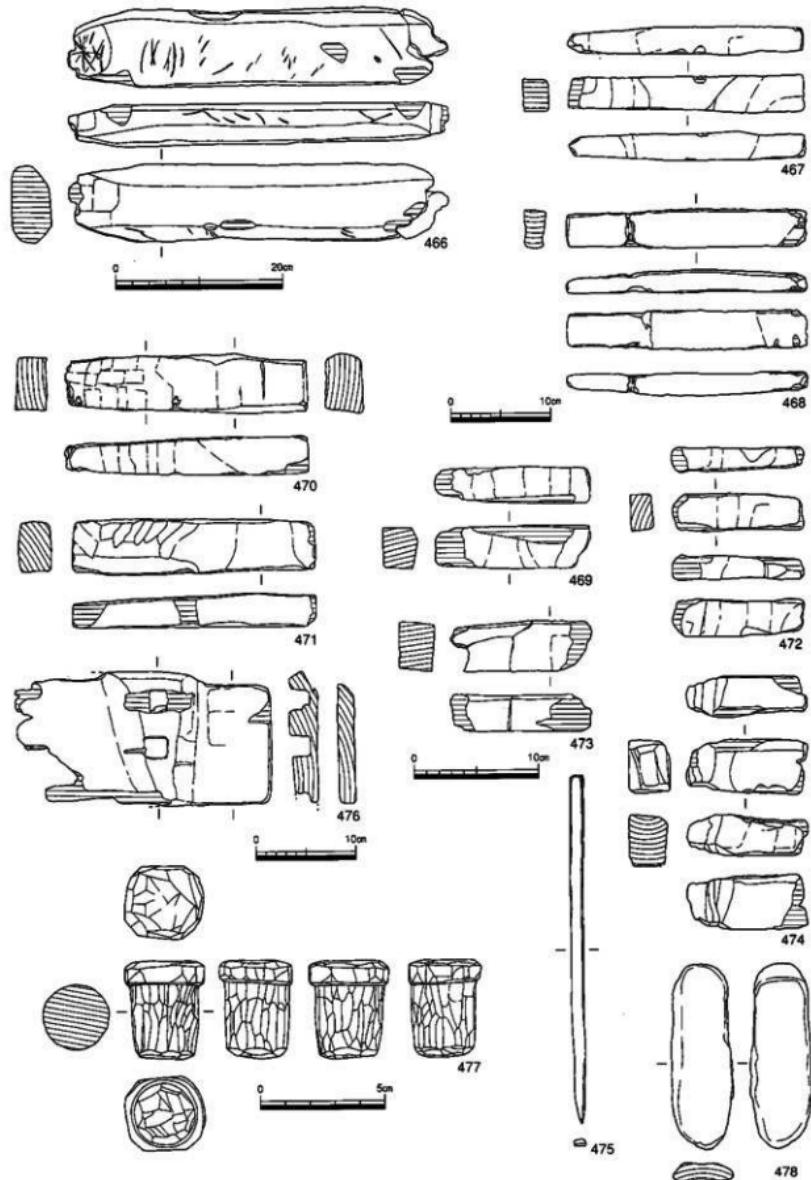
第106図 木製品実測図② (1/5、1/6、1/12)

第107図 H②SSE01井戸桿様式図 (1/40)、木製品実測図 ③ (1/12)

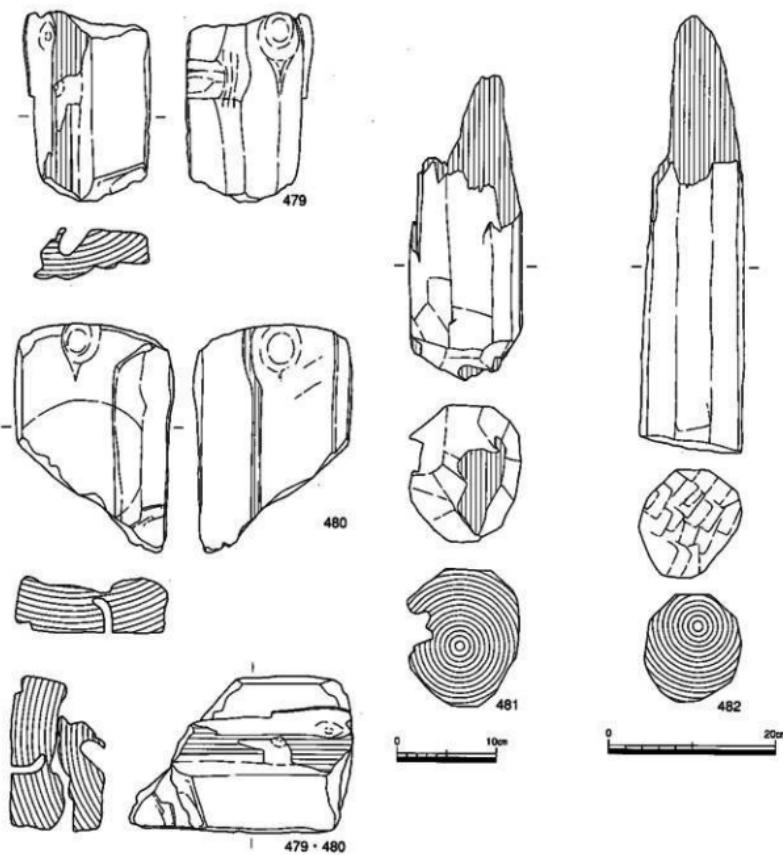




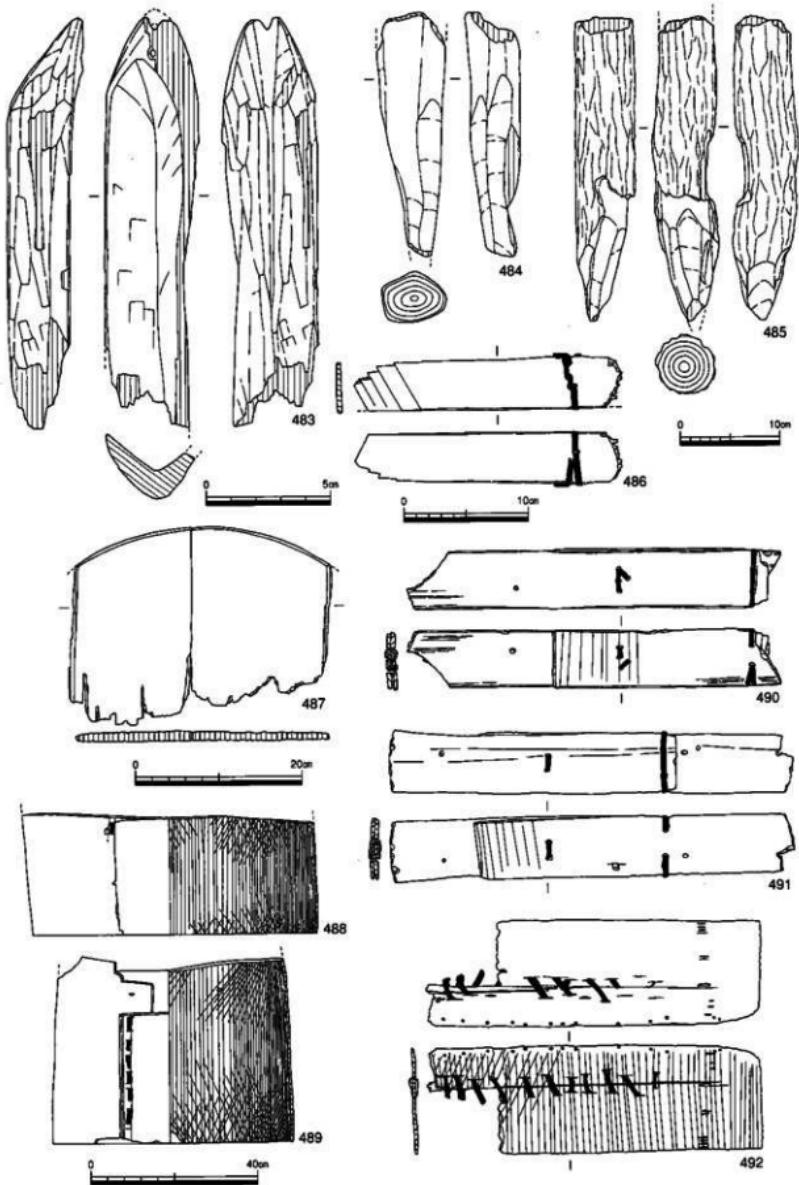
第108図 木製品実測図④ (1/6、1/12)



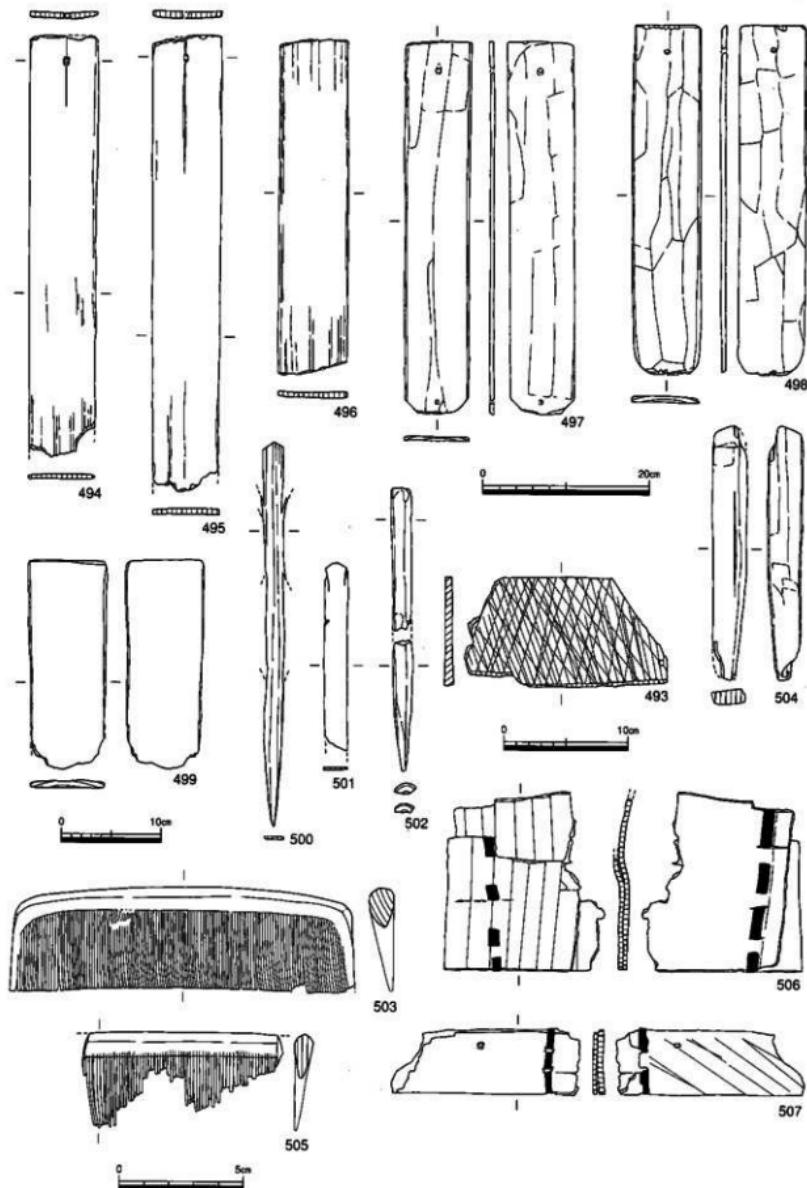
第109図 木製品実測図⑤ (1/2、1/4、1/5、1/6)



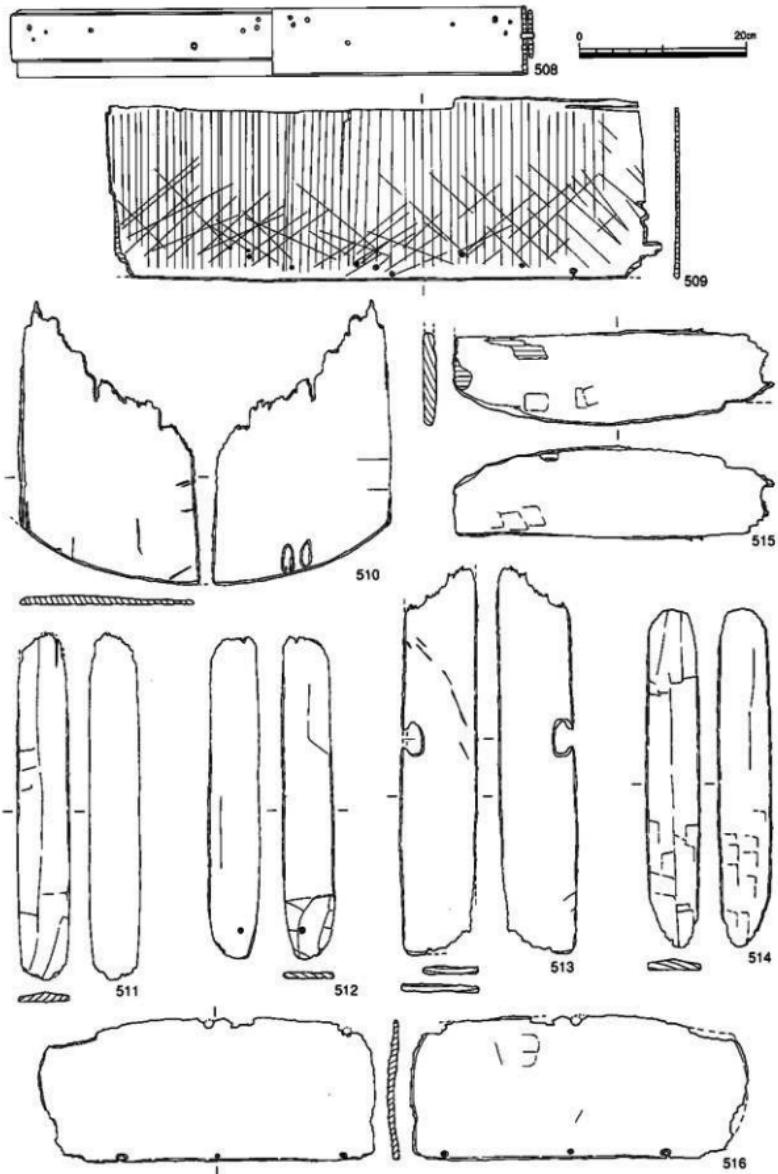
第110図 木製品実測図⑥ (1/5, 1/6)



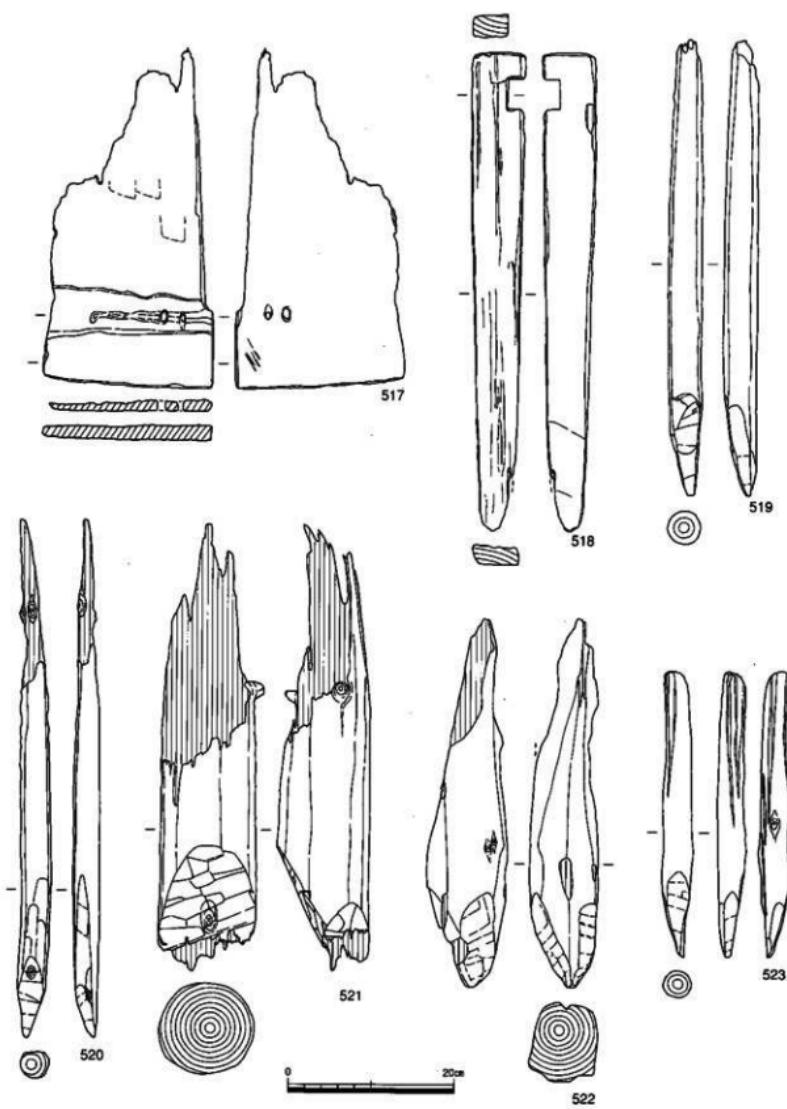
第111図 木製品実測図⑦ (1/2、1/4、1/5、1/6、1/12)



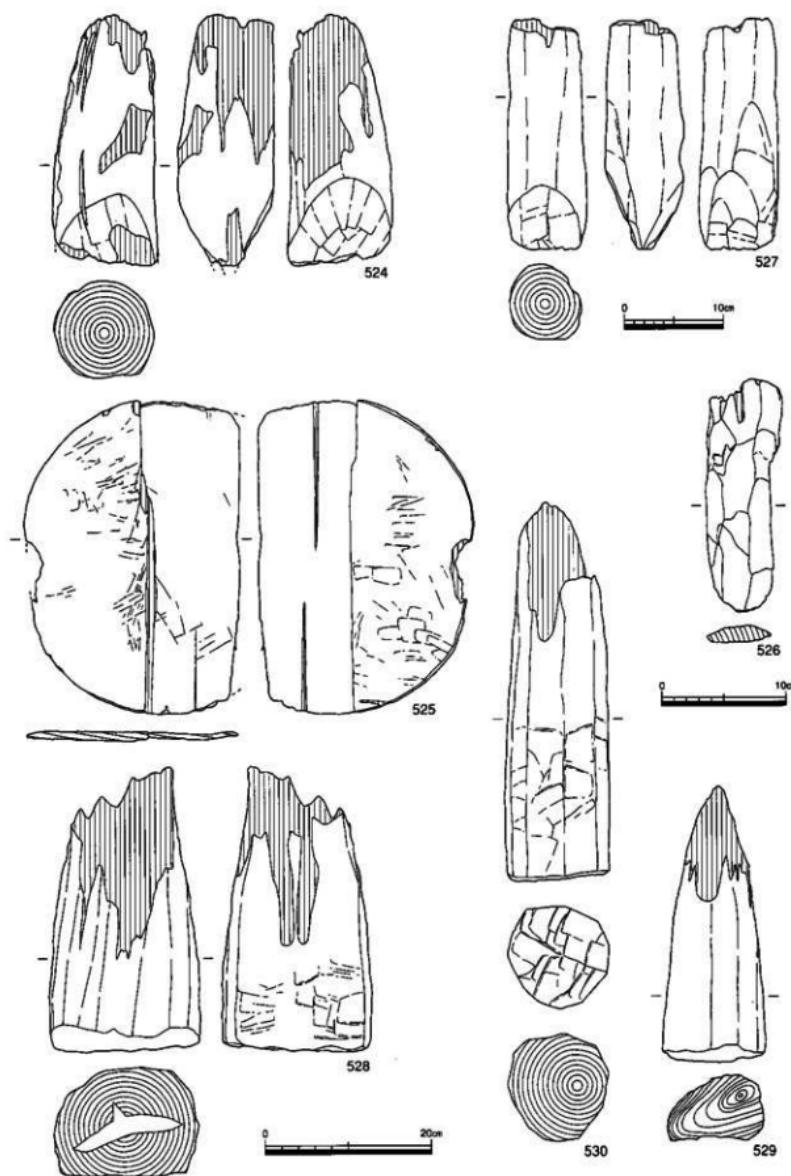
第112図 木製品実測図⑧ (1/2、1/4、1/5、1/6)



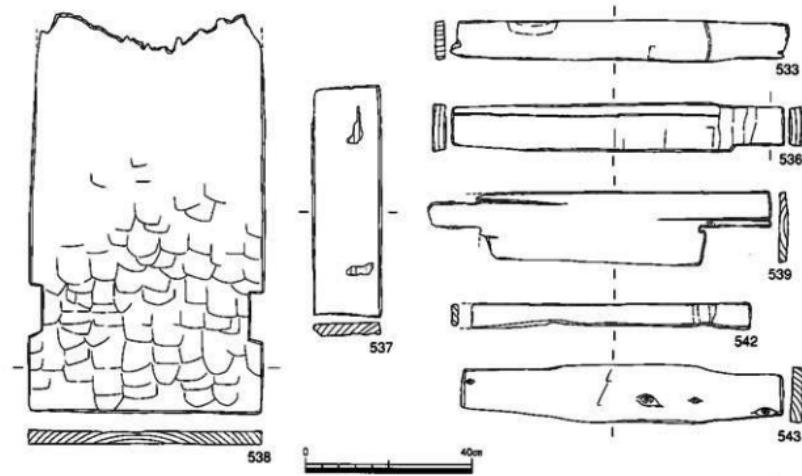
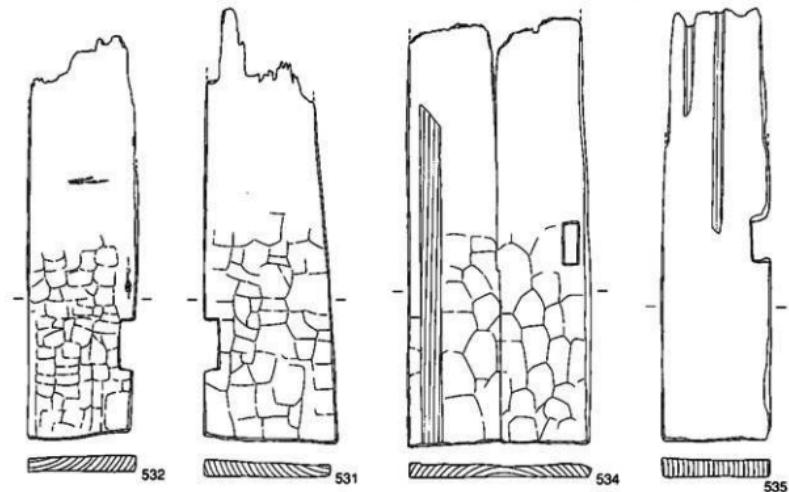
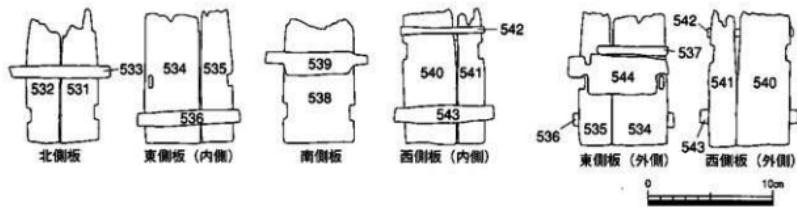
第113図 木製品実測図⑨ (1/6)



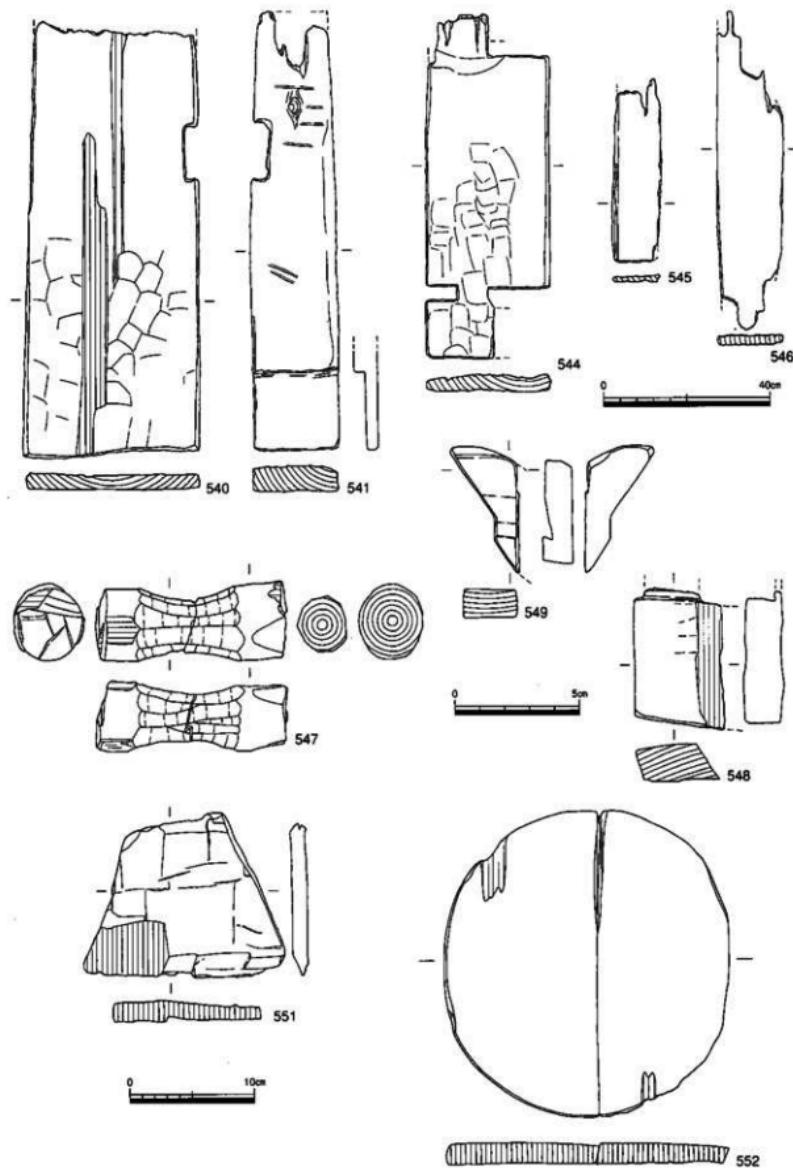
第114図 木製品実測図⑩ (1/6)



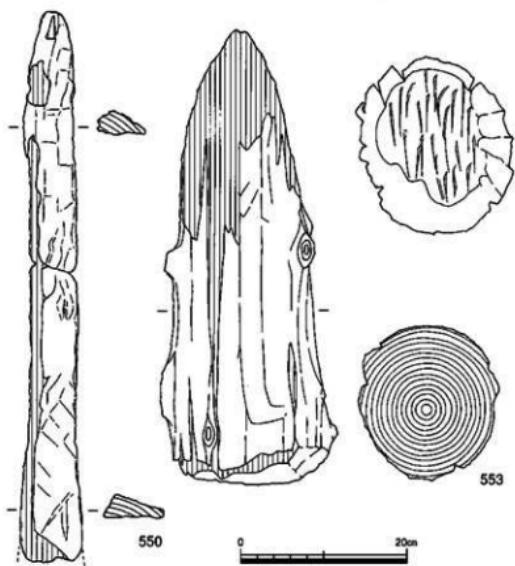
第115図 木製品実測図① (1/4、1/5、1/6)



第116図 L③SE01井戸枠模式図(1/40)、木製品実測図⑫(1/12)



第117図 木製品実測図⑬ (1/2、1/4、1/12)



第118図 木製品実測図④ (1/6)

第3章 自然科学調査の成果

第1節 前田東・中村遺跡から出土した木製品の樹種

パリノ・サーヴェイ株式会社

前田東・中村遺跡は、新川右岸の低丘陵地南端部に位置する。発掘調査により、弥生時代後期の河道、古代の井戸跡、柱穴等の遺構が出土している。これらの遺構からは、土器などの遺物と共に木製品等の木質遺物も出土している。

本報告では、出土した木製品を対象として樹種同定を実施する。

1. 試料

試料は、出土した木製品63点である。各木製品の木取を観察した上で、破損部や接合部を利用して木片を採取した。板状の木製品で、破損部が少なく木片の採取が困難な製品については、木製品の表面から直接切片を採取した。試料採取時の観察では、報文番号478は樹皮の可能性が高い。

2. 分析方法

木片については、剃刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製する。切片は、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。

3. 結果

樹種同定結果を第3表に示す。報文番号478は節部細胞のみで構成されており、試料観察時の所見通り樹皮であった。放射組織が4～5列になる特徴から広葉樹の樹皮と考えられるが、種類の同定には至らなかった。その他の木製品は、針葉樹9種類（マツ属複維管束亞属・モミ属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・アスナロ・ヒノキ科・カヤ）、広葉樹10種類（ノグルミ・コナラ属コナラ亞属クヌギ節・クリ・ケヤキ・ツバキ属・イスノキ・ウツギ属・カエデ属・イボタノキ属・フジキ属近似種）に同定された。各種類の解剖学的特徴等を記す。

・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科

軸方向組織は仮道管と垂直樹脂道で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道は晩材部に認められる。放射組織は仮道管、柔細胞、水平樹脂道、エピセリウム細胞で構成されるが、水平樹脂道とエピセリウム細胞は破損しているものが多い。分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・モミ属 (*Abies*) マツ科

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は比較的緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は粗く、水平壁、垂直壁共にじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はスギ型で1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

第3表 木製品樹種同定結果

報文番号	出土構名	出土位置	種別	時代	木取	樹種
448	H①SE01		井戸枠部材(板)	奈良時代	板目板	アヌラ
451	H①SE01		井戸枠部材(側板)	奈良時代	板目板	ヒノキ科
454	H①SE01		板材	奈良時代	追柾	ヒノキ
455	H①SE01		柱材	奈良時代	芯持丸木	ヒノキ科
464	H②SE01		井戸枠部材(板材)	奈良時代	追柾	スギ
465	H②SE01		井戸枠部材(横棟)	奈良時代		ケヤキ
466	H②SE01		井戸枠部材(横棟)	奈良時代	板目板	カエデ属
474	H②SE01		井戸枠部材(横棟か)	奈良時代		ケヤキ
475	H②SE01	井筒内	斧串	奈良時代		ヒノキ
476	H②SE01	井筒内	板材	奈良時代	板目板	ヒノキ
477	H②SE01	井筒内	木栓	奈良時代		ヒノキ
478	H①SP01		樹皮	绳文時代後期	板目板	櫻皮
479	H①SP56		礎板	平安時代	板目板	コウヤマキ
480	H①SP68		礎板	平安時代	板目板	コウヤマキ
481	H②SP38		柱材	平安時代	芯持丸木	ヒノキ
482	H②SP40		柱材	平安時代	芯持丸木	フガ属
483	I②SR02-03	合流点	船形木製品	弥生時代後期～古墳時代初頭	底が板目	ヒノキ
484	I②SR02-03	灰白色粗砂	杭材	弥生時代後期～古墳時代初頭	芯持丸木	イボタノキ属
485	I②SR02-03	灰白色粗砂	杭材	弥生時代後期～古墳時代初頭	芯持丸木	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
486	I③SK12	曲げ物内	曲げ物(タガ)	平安時代	板目板	ヒノキ科
487	I③SK12	曲げ物内	曲げ物(底板)	平安時代	板目板	ヒノキ
493	I③SK13	振り方内	曲げ物(側板)	平安時代	板目板	ヒノキ
497	I③SK13	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ科
498	I③SK13	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ
499	I③SK13	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ科
502	I③SK13	曲げ物内	斧串	平安時代	半截	ウツギ属
503	I③SK13	曲げ物内	脚(横脚)	平安時代		イスノキ
504	I③SK13	曲げ物内	角材	平安時代		カヤ
505	I③SK16	曲げ物内	脚(横脚)	平安時代		イスノキ
506	I③SK16	曲げ物内	曲げ物(側板)	平安時代	板目板	ヒノキ
507	I③SK16	曲げ物内	曲げ物(タガ)	平安時代	板目板	ヒノキ科
508	I③SK16	曲げ物内	曲げ物(側板)	平安時代	板目板	ヒノキ
509	I③SK16	曲げ物内	曲げ物(側板)	平安時代	板目板	ヒノキ
510	I③SK16	曲げ物内	曲げ物(底板)	平安時代	板目板	ヒノキ
511	I③SK16	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ
512	I③SK16	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ科
513	I③SK16	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ
514	I③SK16	曲げ物内	板材(接続・固定用)	平安時代	板目板	ヒノキ科
515	I③SK16	曲げ物内	板材	平安時代	板目板	ヒノキ
516	I③SK16	曲げ物内	板材	平安時代	板目板	ヒノキ科
517	I③SK16	曲げ物内	板材	平安時代	追柾	ヒノキ
518	I③SK16	曲げ物内	角材	平安時代		ツガ属
519	I③SK16	曲げ物内	杭材	平安時代	芯持丸木	モミ属
520	I③SK16	曲げ物内	杭材	平安時代	芯持丸木	ツガ属
521	I③SK16	曲げ物内	杭材	平安時代	芯持丸木	マツ属複維管束亞属
522	I③SK16	振り方内	杭材	平安時代	芯持丸木	フジ属近似種
523	I③SK16	振り方内	杭材	平安時代	芯持丸木	フバキ属
524	I③SK16	振り方内	杭材	平安時代	芯持丸木	マツ属複維管束亞属
525	I③SK16	振り方内	曲げ物(底板)	平安時代	板目板	ヒノキ
526	I④SP201		柱材	判明せず	板目板	マツ属複維管束亞属
527	I④SP212		杭材	判明せず	芯持丸木	クリ
528	I④SP245		柱材	判明せず	芯持丸木	クリ
529	I④SP36		柱材	判明せず	芯持丸木	コウヤマキ
530	J④SP21		柱材	判明せず	芯持丸木	ノグリミ
533	L③SE01		井戸枠部材(横棟)	平安時代	追柾	ヒノキ
545	L③SE01		井戸枠部材(板材)	平安時代	追柾	ヒノキ
547	L③SE01	井戸枠内	木綿	平安時代	芯持丸木	ケヤキ
548	L③SE01	井戸枠内	加工材	平安時代	不明	ヒノキ
549	L③SE01	振り方内	加工材	平安時代	板目板	ヒノキ
550	M①SR01	最下層	樋	弥生時代後期	ミカン削	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
551	M①SR01	砂層	板材	弥生時代後期	板目板	コナラ属コナラ亜属クヌギ節
552	M①SX01	曲げ物(底板)	判明せず	板目板	ヒノキ	
553	N②SP07		柱材	平安時代	芯持丸木	アヌラ

・ツガ属 (*Tsuga*) マツ科

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成され、仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞は晩材部の年輪界近くに認められるが顕著ではない。放射組織は仮道管と柔細胞で構成される。柔細胞壁は、水平壁は平滑であるが、垂直壁にはじゅず状の肥厚が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～20細胞高。

・スギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1～5細胞高。

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・アスナロ (*Thujopsis dolabrata* Sieb. et Zucc.) ヒノキ科アスナロ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、内壁には茶褐色の樹脂が顕著に認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ科 (Cupressaceae)

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞は晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔は保存が悪く観察できない。放射組織は単列、1～15細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

軸方向組織は仮道管のみで構成され、樹脂道および樹脂細胞は認められない。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。仮道管内壁には2本が対をなしたらせん肥厚が認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。

・ノグルミ (*Pitatycarya strobilacea* Sieb. et Zucc.) クルミ科ノグルミ属

環孔材で、孔圈部は3～4列、孔圈外でやや急激に管径を減じた後、塊状に複合して斜方向～火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1～5細胞幅、1～30細胞高。しばしば結晶を含む。柔組織は周囲状および短接線状。

・コナラ属コナラ亜属クスギ節 (*Quercus subgen. Lepidobalanus sect. Cerris*) ブナ科

環孔材で、孔圈部は1～3列、孔圈外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら単独で放射方向に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～20細胞高のも

のと複合放射組織とがある。

- ・クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔圈部は2~4列、孔圈外で急激~やや緩かに管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

- ・ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) ニレ科ケヤキ属

環孔材で、孔圈部は1列、孔圈外で急激に管径を減じたのち漸減、塊状に複合し接線・斜方向の紋様をなす。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、小道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性、1~8細胞幅、1~50細胞高。放射組織の上下縁辺部を中心に結晶細胞が認められる。

- ・ツバキ属 (*Camellia*) ツバキ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形~角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列~階段状に配列する。放射組織は異性、1~2細胞幅、1~20細胞高で、時に上下に連続する。放射組織には結晶細胞が認められる。

- ・イスノキ (*Distylium racemosum* Sieb. et Zucc.) マンサク科イスノキ属

散孔材で、道管は横断面で多角形、ほとんど単独で散在する。道管の分布密度は比較的高い。道管は階段穿孔を有し、段数は5段前後である。放射組織は異性、1~3細胞幅、1~20細胞高。柔組織は、独立帶状または短接線状で、放射方向には等間隔に配列する。

- ・ウツギ属 (*Deutzia*) ユキノシタ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では多角形、ほぼ単独で散在する。道管は階段穿孔を有する。放射組織は異性、1~4細胞幅、40~100細胞高以上のものまである。放射組織には鞘細胞が認められる。

- ・カエデ属 (*Acer*) カエデ科

散孔材で、管壁は薄く、横断面では角張った楕円形、単独および2~3個が複合して散在し、晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は対列~交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、1~8細胞幅、1~60細胞高。木繊維が木口面において不規則な紋様をなす。

放射組織が大きいタイプのカエデ属であるが、チドリノキほどは大きくない。現生標本との比較から、イタヤカエデ類の可能性がある。

- ・イボタノキ属 (*Ligustrum*) モクセイ科

環孔性を帯びた散孔材で、道管は単独または2個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減させる。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、道管内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅱ型、1~2細胞幅、1~20細胞高。

- ・フジキ属近似種 (cf. *Cladrastis*) マメ科

環孔材であるが、年輪幅が広く、年輪界を挟んだ試料採取ができなかった。孔圈部から孔圈外への移行は緩やかで、小道管ははじめは単独または2~3個が複合して配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性~異性、1~6細胞幅、1~40細胞高。

4. 考察

木製品は、縄文時代後期の流路、弥生時代後期から古墳時代初頭の流路、古代（奈良時代・平安時代）の井戸や柱穴などから出土したものがある。時代別・器種別の種類構成を第4表に示す。

弥生時代後期から古墳時代初頭の木製品は、板材、櫛、杭材、船形木製品がある。櫛は重硬で強度の高い材質を有するクヌギ節であった。香川県内では櫛の樹種を明らかにした例がほとんどないが、全国的にはカヤ、トネリコ属、ヤマグワ、アカガシ亞属等重硬な材質の樹種が多く利用される傾向がある（島地・伊東、1988）。材質面からみれば、今回の製品が櫛としても矛盾しない。杭材にもクヌギ節が出土していることから、周辺での木材入手が可能であったと考えられる。

古代では、曲げ物、板材が多く、その他に礎板、井戸枠横棟、杭材、斎串、木栓、木錘、櫛、角材、加工木がある。全体的にヒノキを中心とした針葉樹材の利用が多い。比較的点数の多い器種について種類構成をみると、曲げ物では側板、底板共に針葉樹のヒノキが多く、他にスギとヒノキ科が認められる。木取りは柵目板と板目板の2通りがあるが、木取りによる木材利用の違いは認められない。板材も同様にヒノキとヒノキ科が多い。曲げ物や板材は、共に板状の加工を施す点で共通点がある。ヒノキは、木理が直線で割り易く、加工が容易であり、特に板状の加工には適している。

一方、杭材は、全て芯持ちの丸木材である。樹種は雑多であり、針葉樹・広葉樹が混在している。雑多な組成から周辺で入手可能な木材を利用した可能性があるが、アスナロとフジキ属は、現在の遺跡周辺には生育していない（倉田、1971）。これらの樹種がかつては生育していたのか、他地域から持ち込まれたものかは、現時点では資料が少ないため、今後古植生も含めた検討が必要である。

その他の木製品では、斎串にウツギ属が認められているが、斎串にはヒノキ等の針葉樹材の利用が多く、ウツギ属が認められた例は報告例がない。ウツギ属は山野の日当りの良い場所に生育する落葉低木であり、直径は大きなものでも7cm程度である。同様の例が他にもみられるのか、今後の資料蓄積が課題である。また、礎板に認められたコウヤマキは、水浸に強いことが利用された背景に考えられる。今回の調査では、時代判別していない柱材にも1点認められており、建築部材として利用されていたことが推定される。香川県内では、丸亀市郡家一里屋遺跡でも7世紀初頭の柱材にコウヤマキが認められた例がある（パリノ・サーヴェイ株式会社、1993）。また、下川津遺跡や井出東I遺跡でも柱材以外の木製品に認められている（能城・鈴木、1990、1995）。コウヤマキは、現在の香川県内では南部の山地に生育しているのみであるが、遺跡の出土例や用途等を考慮すると、過去には平野部にも分布していた可能性がある。しかし、現時点では生育していたことを示す証拠は得られておらず、花粉分析や堆積物中の微細な植物遺体（種・葉等）の検出による古植生調査と合わせた検討が必要である。

櫛はいずれも横櫛で、樹種はイスノキであった。イスノキは、極めて重硬で強度が高く、道管が小さく均一に分布するために木目が細かい。櫛の材としてはツゲに次ぐ良材とされるが、遺跡からの出土例はツゲよりも多い。香川県内では下川津遺跡で出土した櫛14点中11点がイスノキであり、他にカナメモチ属2点、ツゲ1点が認められている（島地・林、1990／能城・鈴木、1990）。イスノキは、主に西日本の暖温帯常緑広葉樹林中に生育しており、九州に多く多いが、香川県内でも西部に自生地があるとされる（倉田、1971）。このことから、地元で木材の入手が可能であったと考えられる。しかし、イスノキの櫛については、新潟県豊浦町（現新発田市）曾根遺跡、長野県更埴市（現千曲市）更埴条里遺跡など、現在のイスノキの分布北限を越えた地域でも出土例があり（川村、1983／高橋・辻本、1999）、広域に動いていた製品の一つと考えられる。そのため、本地域のイスノキの櫛についても搬入品の可能性が残る。

なお、古代の資料は、奈良時代と平安時代に分けられる。このうち、井戸部材の板材と横棟が両時期で検出されている。樹種をみると、奈良時代の井戸部材（板材）がアスナロ、ヒノキ科であるのに対し、

平安時代はヒノキである。奈良時代のヒノキ科がヒノキである可能性もあるため、奈良時代と平安時代とで木材利用に違いは認められない。一方、横棟については、奈良時代が広葉樹のケヤキとカエデ属であるのに対し、平安時代は針葉樹のヒノキであり、木材利用に違いが認められる。しかし、点数が少ないため断定はできず、周辺で他に類例がみられるか等の検討課題が残る。

この他、時代の判別がされていない遺物が6点あり、5点が柱材、1点が曲げ物（底板）である。曲げ物（底板）はヒノキであり、古代の木材利用と調和的である。一方、柱材は複維管束亜属、コウヤマキ、ノグルミ、クリの4種類が認められた。複維管束亜属が板状であるほかは全て芯持ち丸木である。いずれも古代の柱材には認められていない。針葉樹の複維管束亜属とコウヤマキは耐水性が高く、比較的強度も高い。広葉樹のノグルミとクリは強度が高く、クリについては耐朽性も高い。これらの材質が利用された背景に考えられる。

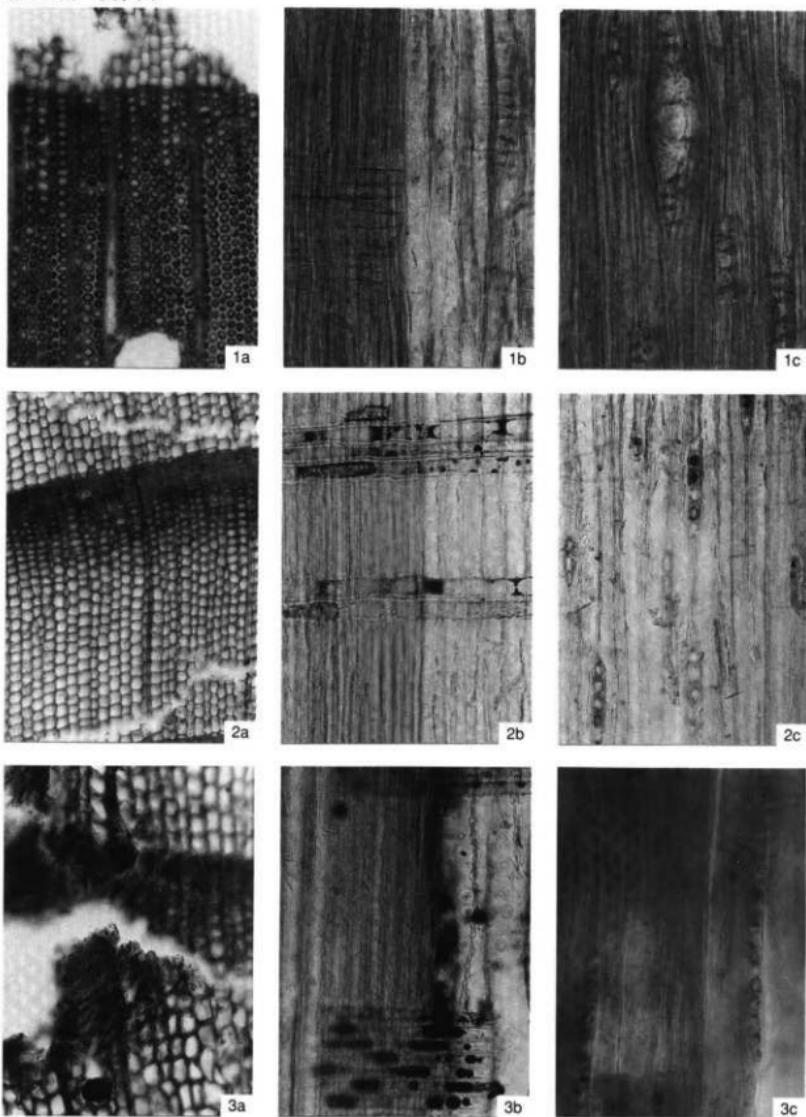
引用文献

- 川村 恵洋（1983）『曾根遺跡出土木材の識別新大演報』16、P.75-82
- 高橋 敦・辻本崇夫（1999）『木製品・自然木、炭化材の樹種』『鈴長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書42 上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書26 -更埴市内その5-
- 更埴条里遺跡・星代遺跡群（含む大境遺跡・窪河原遺跡）-古代1編- 本文』
- 日本道路公団・長野県教育委員会・長野県埋蔵文化財センター、P.333-337
- 島地 謙・林 昭三（1990）『下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告 報告1 昭和61年度調査の分析委託結果』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡 - 第2分冊 -』
- 鈴香川県埋蔵文化財調査センター、P.520-532
- 能城修一・鈴木三男（1990）『下川津遺跡出土木製品の樹種分析委託報告 報告2 昭和63年度調査の分析委託結果』『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 下川津遺跡 - 第2分冊 -』
- 鈴香川県埋蔵文化財調査センター、P.533-567
- パリノ・サーヴェイ株式会社（1993）『郡家一里塚遺跡出土木材等分析委託業務報告』『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第十二冊 郡家一里塚遺跡』
- 香川県埋蔵文化財研究会、P.227-233
- 島地 謙・伊東隆夫（編）（1988）『日本の遺跡出土木製品総覧』 雄山閣、P.296
- 能城修一・鈴木三男（1995）『井手東Ⅰ遺跡出土の木製品の樹種』『一般国道11号線高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 第四冊 井手東Ⅰ遺跡（自然科学分析・考察編）』
- 高松市教育委員会・建設省四国地方建設局、P.1-28
- 倉田 哲（1971）『原色日本林業樹木図鑑 第1巻（改訂版）』地球出版株式会社、P.331

第4表 時期別・用途別種類構成

時代・器種	樹種	種類構成												合計						
		複雜管東亞属	モミ属	ツガ属	スギ	コウヤマキ	ヒノキ	アスナロ	ヒノキ科	カヤ	ノグルミ	クヌギ節	クリ	ケヤキ	ツバキ属	イスノキ	ウツギ属	カエデ属	イボタノキ属	フジキ属近似種
平安時代	井戸枠材(板材)						1													1
	井戸枠材(横桟)						1													1
	礎板			1	2	1	1													5
	杭材	2	1	1												1			1	6
	角材			1						1										2
	曲げ物側板						4													4
	曲げ物底板						3													3
	曲げ物タガ							2												2
	板材(接続・固定用)						3	4												7
	板材						2	1												3
	木鍤												1							1
	櫛												2							2
	斎串?													1						1
	加工材			2																2
奈良時代	井戸枠材(側板)						1	1												2
	井戸枠材(板材)				1															1
	井戸枠材(横桟)											2		1						3
	柱材(芯持丸木)							1												1
	板材						2													2
	木栓						1													1
弥生時代後期	斎串						1													1
	板材											1								1
	櫛											1								1
弥生時代後期～古墳時代初頭	杭材											1					1		1	2
	船形木製品							1												1
縄文時代後期	樹皮																	1	1	
	柱材(芯持丸木)						1				1	2								4
	柱材(板目板)		1																	1
判別せず	曲げ物(底板)							1												1
	合 計	3	1	3	1	3	23	2	9	1	1	3	2	3	1	2	1	1	1	163

第119図 木材(1)



1. マツ属複維管束亜属 (報文番号521)

2. モミ属 (報文番号519)

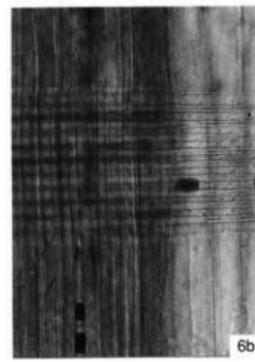
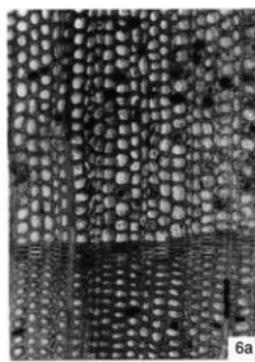
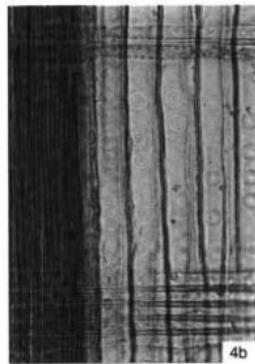
3. ツガ属 (報文番号518)

a : 木口、b : 横目、c : 板目

200 μm :a

100 μm :b,c

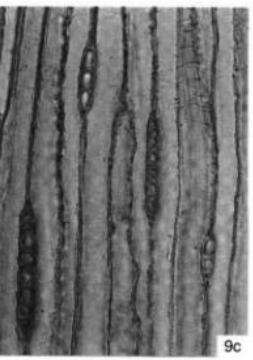
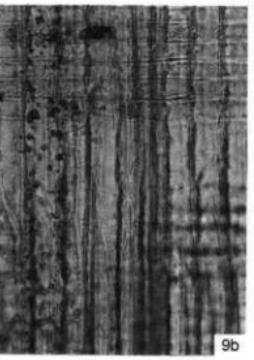
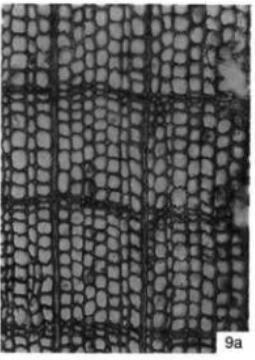
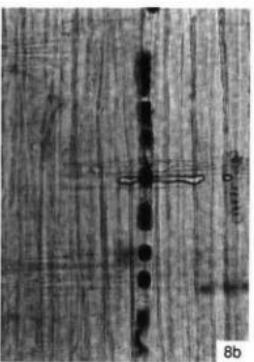
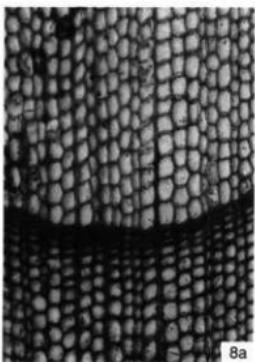
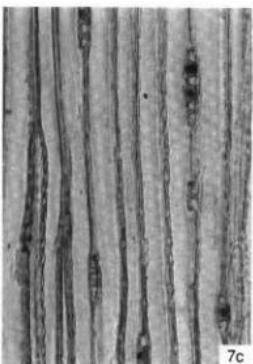
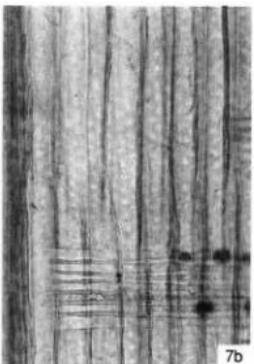
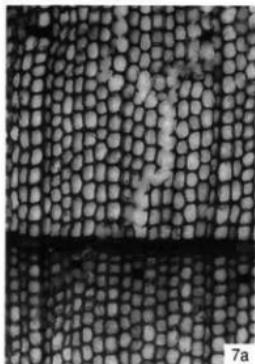
第120図 木材(2)



4. スギ (報文番号464)
5. コウヤマキ (報文番号480)
6. ヒノキ (報文番号477)
a : 木口、b : 番目、c : 板目

— 200 μm :a
— 200 μm :b,c

第121図 木材(3)

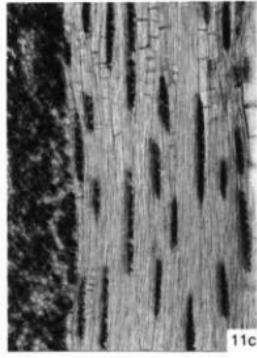
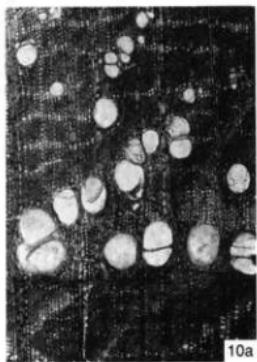


7. アスナロ(報文番号448)
8. ヒノキ科(報文番号507)
9. カヤ(報文番号504)

a:木口、b:柾目、c:板目

200 μm :a
100 μm :b,c

第122図 木材(4)



10. ノグルミ (報文番号530)

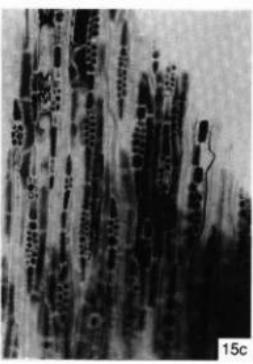
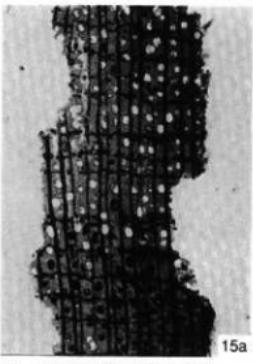
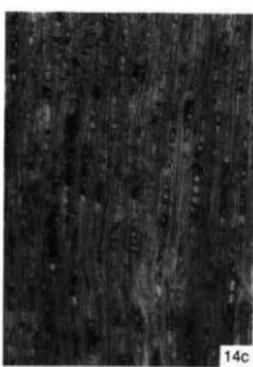
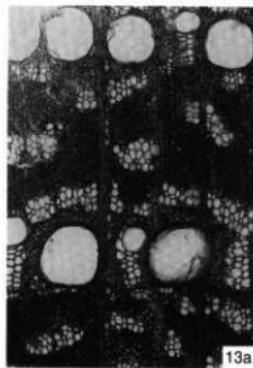
11. コナラ属コナラ亜属クヌギ節 (報文番号550)

12. クリ (報文番号527)

a : 木口、b : 杠目、c : 板目

— 200 μm:a
— 200 μm:b,c

第123図 木材(5)



13. ケヤキ (報文番号465)

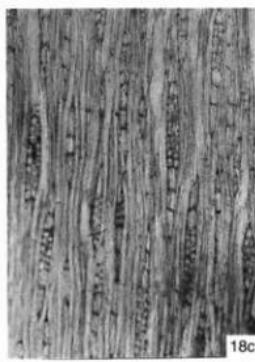
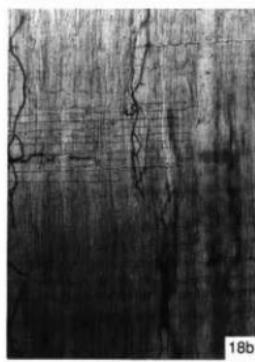
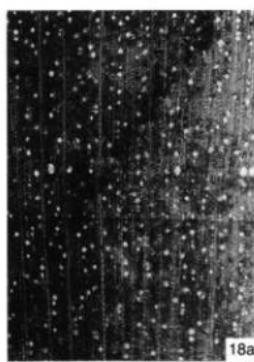
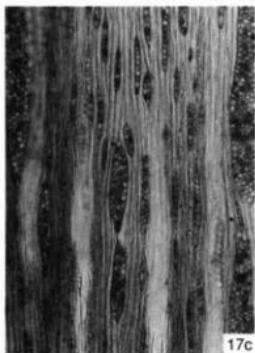
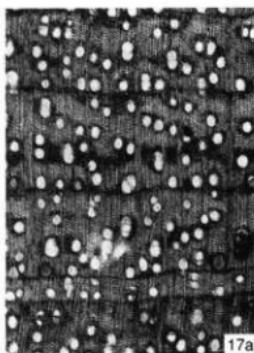
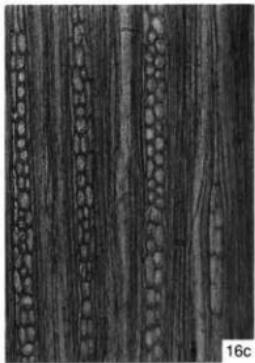
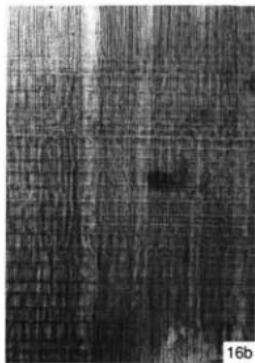
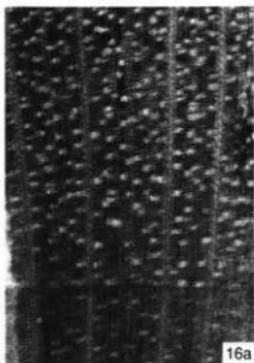
14. ツバキ属 (報文番号523)

15. イスノキ (報文番号503)

a : 木口、b : 横目、c : 板目

— 200 μm :a
— 200 μm :b,c

第124図 木材(6)

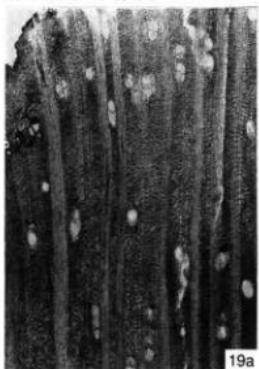


16. ウツギ属 (報文番号 502)
17. カエデ属 (報文番号 466)
18. イボタノキ属 (報文番号 484)

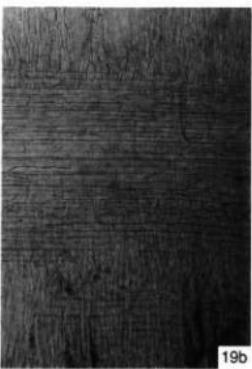
a : 木口、b : 横目、c : 板目

— 200 μm : a
— 200 μm : b,c

第125図 木材(7)



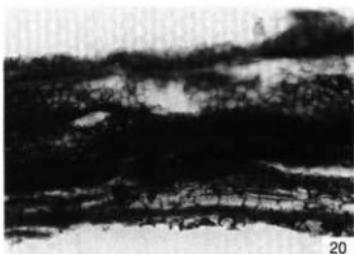
19a



19b



19c



20

19. フジキ属近似種 (報文番号522)

a : 木口、b : 杠目、c : 板目

20. 樹皮 (報文番号478)

■ 200 μm :19a・20

■ 200 μm :19b,c

第2節 前田東・中村遺跡から出土した金属器の材質

株式会社 吉田生物研究所

1. はじめに

香川県に所在する前田東・中村遺跡から出土した金属製品について、以下の通り成分分析を行ったのでその結果を報告する。

2. 資料

調査した資料は第5表に示す金属製品2点である。

第5表 調査資料一覧

報文番号	保存処理 No	遺物名
488	3-7	飾金具(菊花文様)
159	3-11	不明製品(仏具?)

3. 方法

理学電機工業㈱製の全自動蛍光X線分析装置3270E（検出元素範囲B～U）によって資料本体に蛍光X線を照射して分析した。

4. 分析結果

成分分析結果のスペクトルを付し、あわせて下に成分分析の結果表をのせる。この表にはSi,P,Sなどの土壤成分等が含まれているので、あくまで参考資料である。遺物本来の構成金属は、488はCu（銅）、Pb（鉛）、Sn（錫）、Fe（鉄）で、159はCu（銅）、As（砒素）、Pb（鉛）、Fe（鉄）である。

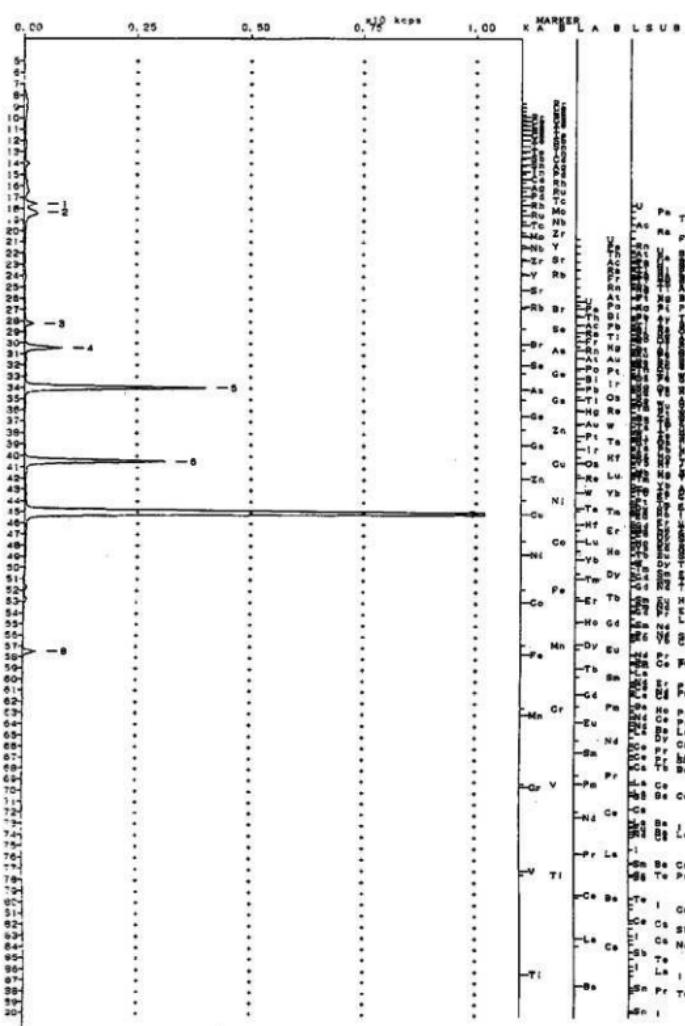
参考資料 第6表 成分分析結果表

元素名	含有率(重量%)	
	488	159
Si	2.5	-
P	0.88	0.36
S	0.42	0.62
Cu	49	65
As	-	29
Pb	27	3.1
Fe	1.7	1.7
Sn	18	-

*** 分析 ***

元素サイクル

2005-09-22

TB ショコロイ 試料名 BR 元素コード
5 STP フルカ 3-11 41 Hv00

第127図 成分分析結果（試料159）

第4章 遺構の変遷

本書（前田東・中村遺跡Ⅲ）では前田東・中村遺跡の8小調査区のうち、前田東・中村遺跡Ⅱで報告した5調査区を除いた3つの調査区について、調査区ごとに述べてきた。ここでは最後のまとめとして、四国横断自動車道調査に高松東道路調査の成果を併せて、遺跡全体の時代変遷について述べてみたい。なお、高松東道路調査の成果は四国横断自動車道調査に接した調査区（B～E区）を中心に扱い、他の調査区（A・F・G区）は必要に応じて記述する。

前田東・中村遺跡において検出した遺構群は時代によってはさらに細別できる可能性も残るが、縄文時代・弥生時代・奈良時代・平安時代・中世・近世のおおむね6つの時期に大別することができる。以下、各時代について概観する。

縄文時代（第128図）

C・D・H・I・J・L・M・N区で検出しているが、そのほとんどは自然河川跡である。縄文時代後期と晩期が主体となる。調査対象地中央付近、I・C・M区を流下する自然河川跡とJ・D・N区を流下する自然河川跡は比較的規模の大きなものである。埋土からは縄文時代後期前半の永井I式に相当する土器群が出土している。同様の土器は西端のH区の自然河川跡からも出土しており、当該地周辺に同時期の遺構が存在する可能性がある。近年の全国的な調査成果からは、縄文時代の定住生活が指摘されており、付近にムラのような定住生活痕が存在している可能性がある。N区では河川跡の埋土から有舌尖頭器も検出しておらず、前田東・中村遺跡周辺における人々の活動は、さらに遡るものとみられる。また、中央の河川跡内からは縄文時代晩期の凸帯文土器も出土している。

弥生時代（第128図）

対象地のほぼ全面で検出しているが、なかでもC・D・E・I・J・M・N区に集中している。弥生時代中期末～後期が主体となるが、ほとんどは後期に属するものである。対象地中央付近の自然河川跡は埋没を経ながらも依然として川としての機能を果たしているが、前代に調査区西半に見られた小規模な河川跡はほとんど埋没してその姿を留めていない。L区で確認した土坑1基は弥生時代前期に属する可能性が高いが、それ以外の弥生時代前期の遺構ははっきりしない。弥生時代中期末の遺構はA区の方形周溝墓とF区の竪穴住居跡があり、墓域と居住域の一端を確認しているが、両者の間にはかなりの距離があるため直接関係するかについては判明しない。中期末の土器は中央の自然河川跡からも出土しており、上流から投棄されたものとすれば、遺跡北東（K区の北方）周辺に同時期の居住域が存在する可能性が高い。

後期になると遺構の数は急速に増加する。中央の自然河川跡の西側では、明確な建物遺構の確認はできなかったが、C区やI区で水を得るために掘られた土坑が見られたり、小規模ながら溝状遺構が掘られたりするなど、I区北西付近の地盤が比較的安定した場所を居住域としている可能性がある。自然河川跡の中からも比較的まとまった量の遺物が出土しており、河川西側の近辺に居住域の存在を想定させる。C区の弧状を呈した溝状遺構が周溝墓の周溝であるならば、墓域がA区から東へ移動してきた可能性もある。

一方、河川跡の東側では、J区やD区に比較的規模の大きな溝状遺構が見られるなど、周辺に居住域

の存在が想定できる。J区の竪穴住居跡や多量の土器を含んでいたJ区の弧状の溝状遺構等は、その一端を示すものと考えられる。最も地盤の安定している低丘陵上（E・F・K・O区）には当該期の遺構が展開していた可能性は高いが、後世の著しい削平を被ったため、今となっては確認の方法がない。低丘陵裾（D・J・N区それぞれの東半）に複数の溝状遺構が作られているのは、丘陵上の居住域を画する目的があった可能性がある。

この後、古墳時代は遺構・遺物が極端に減り、当該地における人間の活動は一旦休止したように考えられる。ただし、前田東・中村遺跡の周辺、特に北方の山塊（通称・前田山）には後期の小規模な横穴式石室墳の分布が知られており、周辺にそれらの造墓主体となった集落の存在がうかがえる。

奈良時代（第129図）

再び掘立柱建物跡や溝状遺構等の遺構の数が増加していくが、全体に散在する状態である。前代まで対象地中央を流下していた自然河川跡は、完全に埋没してその役割を終えている。当該期の掘立柱建物跡に注目するとA区とE区（D区の東端を含む）に2つの大きなまとまりが認められる。このほかに、小さなまとまりとしてC区南端付近やB・H区等があるが、後者はA区のまとまりに含めてもよいかも知れない。縦柱構造の掘立柱建物跡を倉庫とみなせば、A区のまとまりには倉庫が含まれるということになる。H区には建築部材を転用したとみられる井戸枠を持つ井戸が掘られており、井戸をも備えていたことがわかる。一方、E区のまとまりには竪穴住居跡が含まれており、O区のものを加えると、建物における竪穴住居跡の比率が高いという特徴がある。なお、このまとまりにもE区に井戸が掘られている。溝状遺構を見てみると比較的小規模なものが多いが、C区の規模の大きな溝状遺構は出土遺物から見て当該期に作られた可能性が高い。なお、この溝状遺構の延長部分に当たるI区では当該期の遺物がほとんど出土していないが、同様に当該期まで遡る可能性がある。これらの建物跡や溝状遺構の方向は現在も周辺に残る条里制に由来する条里地割の方向と合致しており、当該地の条里制施行は少なくともこの時期まで遡ることは確実視することができる。

当該期を語る上で看過できない遺跡として宝寿寺跡がある。ちょうど前田東・中村遺跡のI・J区の調査区境から約200m北方、小字名が堂床と呼ばれている地点で、民家に挟まれるような形で土壇がありそこに数個の礎石と言われている花崗岩の塊石が存在している。現在のところ、宝寿寺の塔の跡と考えられており、白鳳期と推定される素弁六葉と素弁七葉の軒丸瓦が出土したと伝えられている。この瓦と同じ型式の軒丸瓦や、奈良時代前半の細弁十七葉軒丸瓦が高松東道路調査で数点出土している。また、前者の瓦はF区で集中的に出土しており、その付近にはこの瓦を焼成した可能性も残る平窯1基を確認している。さらに、後者の瓦は丘陵裾部に当たるE区に集中して出土するといった状況を確認している。高松東道路調査では直接宝寿寺に関係する遺構を確認することはできなかったが、これらの状況から宝寿寺の寺域をA区からE区西半の北側部分の平坦地に求め、さらに瓦の変遷や近接する古代寺院との関連から、東大寺の封戸50戸が山田郡宮延郷に置かれた天平勝宝4年（752年）をひとつの契機として、瓦の葺き換えないし宝寿寺の移動が行われ、その際に官寺的な性格が付与された可能性が指摘されている（註1）。今回の四国横断自動車道調査でも、宝寿寺に直接関係する遺構を確認することはできず、新たに検出した軒丸瓦・軒平瓦もすでに出土したものと同じであり、調査対象地内においては寺域内と認められるような施設は確認できなかった。したがって、高松東道路調査の結果同様に、宝寿寺の寺域は調査対象地北側の平坦地の可能性があるとしか現状では言えず、今後の調査に期する部分としたい。先

に述べた A 区・E 区を中心とした建物跡のまとまり周辺からは帶金具、墨書き土器、硯、仏具である「淨瓶」、軒丸瓦を含んだ瓦類等が出土しており、瓦葺きの建物の存在とともに識字層の人々の存在が垣間見える。帶金具は古代の官人の身分を示すものであり、公的な性格を持った建物群とみなすことができよう。G 区の自然河川跡からは当該期の簾串、木製模造品、墨書き土器等が出土しており、付近に公的施設の存在や、この川が祓所であった可能性が指摘されている（註2）。G 区は山田郡と三木郡の郡境付近に当たり、境界祭祀とでも呼ぶべき重要な祭祀の場であった可能性がある。寺院や公的建物等との関連があったことが想定される。

なお、H 区の井戸枠は建築部材の転用が想定でき、近在する建物の建て替えを示唆するようである。先述した東大寺の封戸設置を契機とする宝寿寺の移動・建て替えに伴う廃材の利用であるならば、より興味深いものである。

平安時代（第129図）

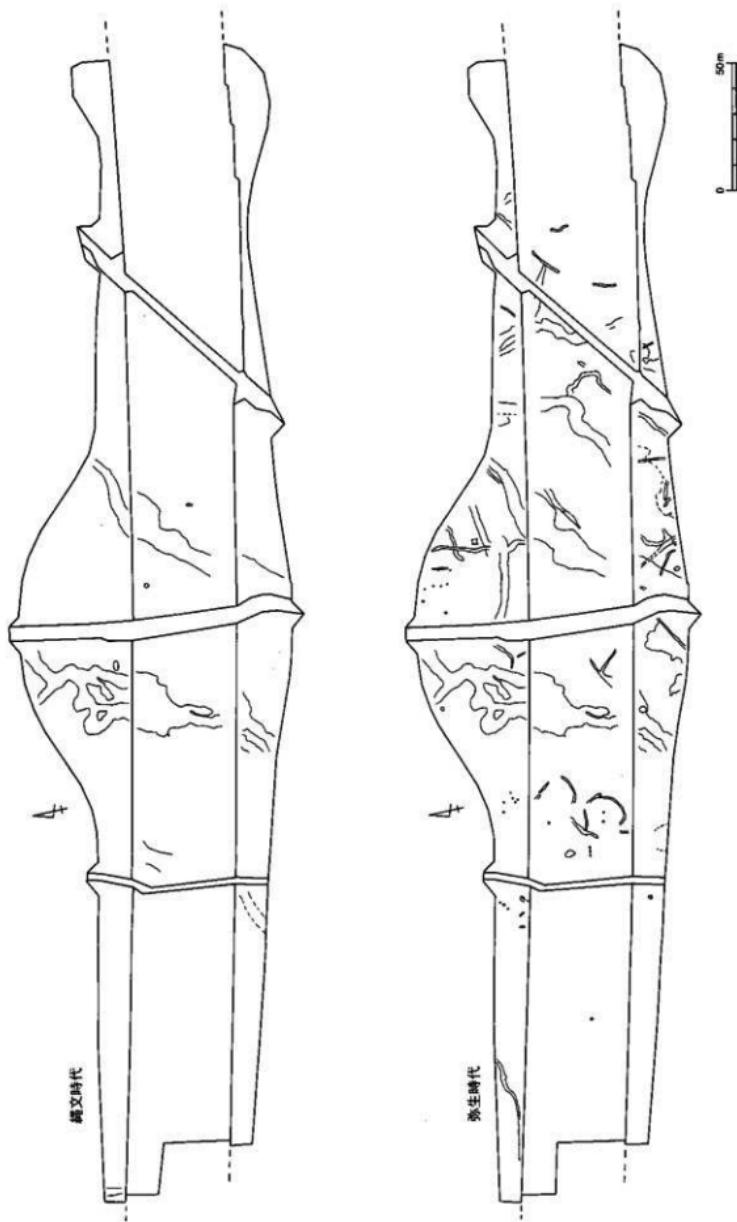
前代よりもさらに遺構の数は増えてほぼ全体に広がりをみせるが、B・J・M 区は比較的希薄となっている。前代の建物跡のまとまりは基本的に継続して営まれており、さらに C・D・I・L・N・O 区等でも新たに建物跡が見られるようになる。前代に A 区を中心としていたまとまりは H・I 区にその中心を移すようで、I 区では 3 基の井戸が設けられている。L 区にも井戸を伴った建物が見られ、このまとまりに含めて考えることができる。C 区の建物跡はほぼ同じ場所で複数回の建て替えが行われており、この場所にこだわった建物であったことがうかがえる。一般の建物とは異なる性格を有していた可能性がある。E 区を中心としたまとまりは、やや北方へずれながらも建て替えを行いながら存続している。建物群の中央に位置する 10 世紀後半の多量の土器が出土した溝状遺構は集落内の区画溝としての性格が想定されている。このまとまりにも井戸が備わっており、さらに炭焼き窯とみられる窯跡 1 基が伴っており、燃料の自給がうかがえる。またこの窯跡の南方に位置する O 区の溝状遺構からは銅滓 1 点が出土しており、銅製品を生産していた可能性もある。これらの建物のまとまり付近からは綠釉陶器、墨書き土器、瓦類等が出土しており、前代の性格をそのまま継承した建物群と見ることができよう。宝寿寺出土と伝わる瓦の中に当該期に属するものは見られないことから、宝寿寺自体は平安時代の早い段階で廃絶してしまったことが予想される。そのような状況の変化の中で、建物群の性格も少しづつ変化して公的な性格が失われていったことが想定される。それが炭の自給に現われていると考えられる。

なお、H 区の溝状遺構から出土した「寶」の文字が想定される陶印は、宝寿寺の寺名の「寶」であるのか吉祥句の「寶」であるのかについては判別ができない。その時期についても当該期に属するか判断したが、前代に遡る可能性も残る。寺名であれば前代に属する可能性が高く、吉祥句であれば前代から当該期にかけてのものと想定することができる。

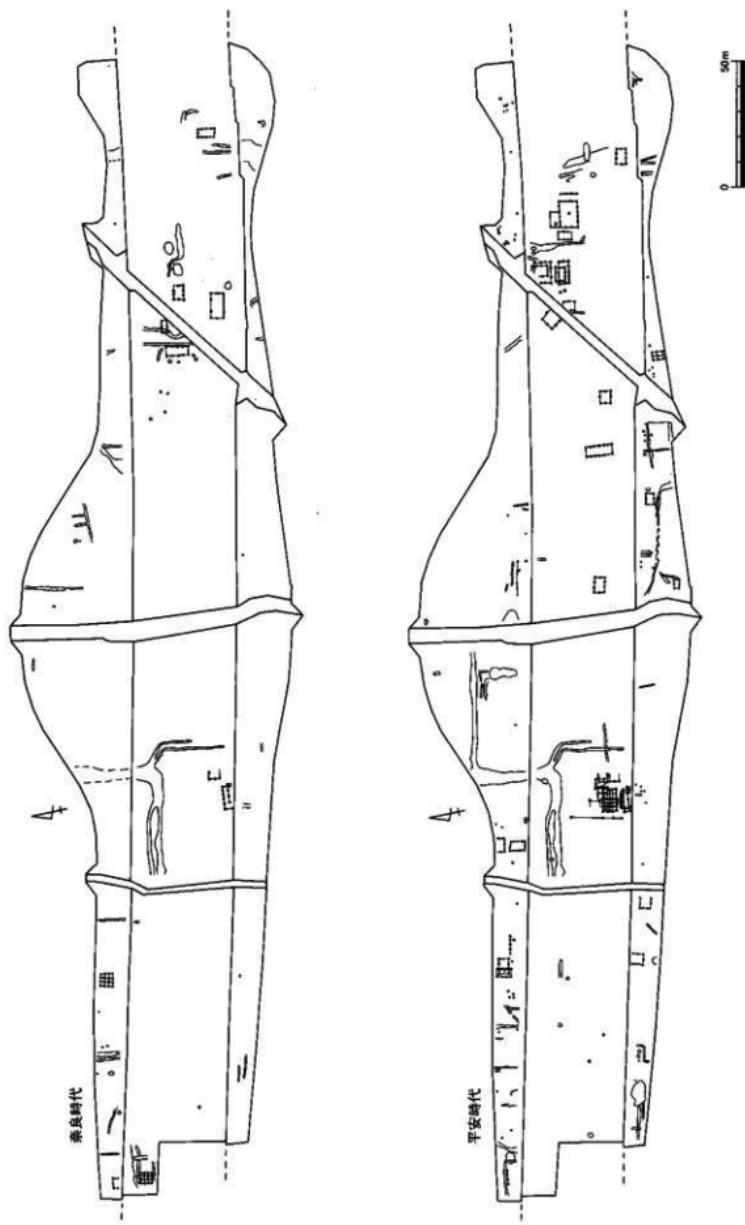
中世（第130図）

前代に比べると遺構の数はやや減少しているようである。H 区は建物跡が確認できていないが、井戸や煙管状土器焼成窯が築かれており、調査区外に建物が存在するものとみられる。C・I・L 区は建物が存在するものの規模が小さくなり、衰退した様子がうかがえる。E 区のまとまりはその中心をさらに北側の K 区に移しているが、建物の数は減少している。これらの調査区に見られるように全体としては衰退する傾向にある中で、M 区には新たに溝状遺構（区画溝）で囲まれた建物が出現していく。区

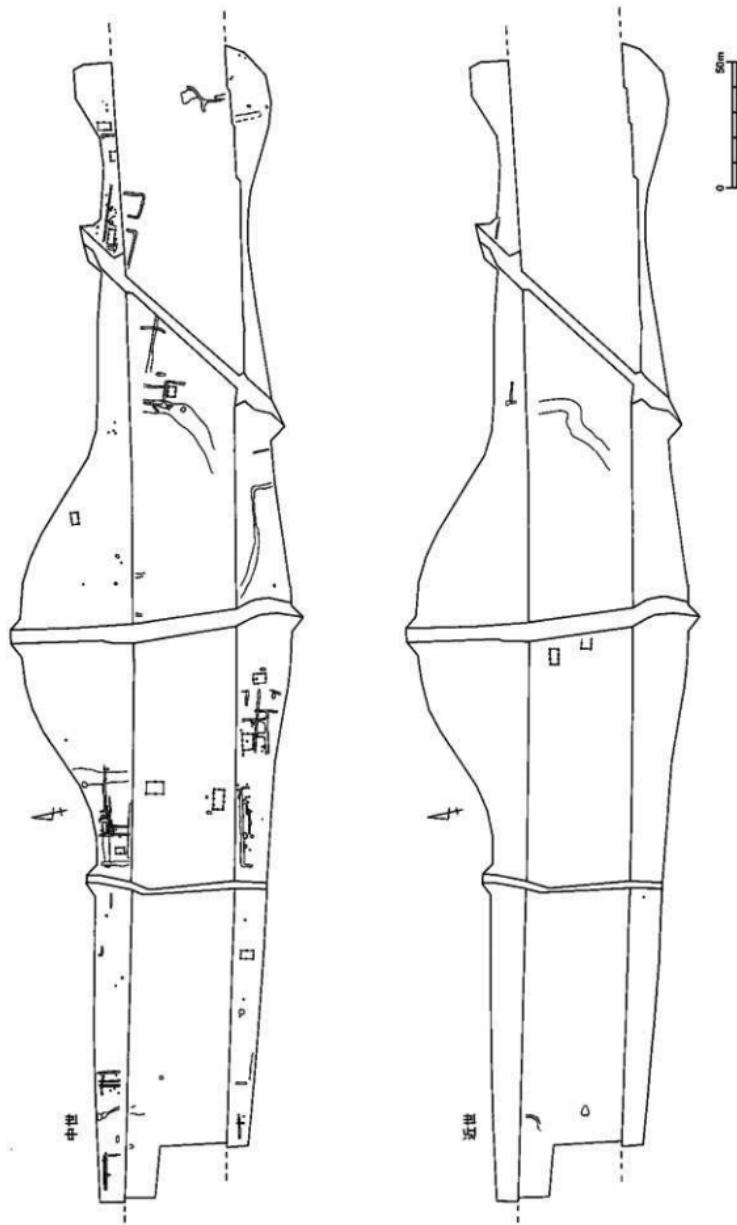
第128図 遺構変遷図① (1/2,000)



第129図 遠野支那図② (1/2,000)



第130図 道構変遷図③ (1/2,000)



画溝の近辺で検出した建物跡には地鎮遺構を伴っているものが多いことが特徴としてあげられる。H・I区の井戸跡に見られるような、石組みを伴う井戸の出現は、この段階からと思われる。なお、遺構が希薄な部分については、I区やJ区で耕作に伴う鉢溝を確認しているように、水田や畑地等の耕作地として土地利用されたものと考えられる。

近世（第130図）

遺構の数は極端に減少しており、わずかに掘立柱建物跡、溝、土坑等が認められるだけとなっている。前代までの居住城はすべて廃絶してしまっており、当該地は主に耕作地として使われていた様子が想定できる。したがって検出した建物はすべて、住み家というより農作業に関連した作業小屋的な性格を持ったものと考えられる。

〈註〉

註1：詳細は高松東道路調査の報告書に記載。

註2：詳細は高松東道路調査の報告書に記載。

〈参考文献〉

- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター他
『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第3冊 前田東・中村遺跡』1995.3**
- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター他
『中小河川大東川改修工事（津ノ郷橋～弘光橋間）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 川津元結木遺跡』1992.1**
- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第18番 国分寺楠井遺跡』1995.10**
- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター他
『空港跡地整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4番 空港跡地遺跡Ⅳ』2000.3**
- ・香川県教育委員会他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第53番 中森遺跡、林・坊城遺跡Ⅱ、東山崎・水田遺跡Ⅱ』
2004.10
- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター
『サンポート高松総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第6番 浜ノ町遺跡』2004.3**
- ・香川県教育委員会・**〔跡〕香川県埋蔵文化財調査センター他
『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第9番 永井遺跡』1990.12**
- ・高松市歴史資料館編 **『第11回特別展図録「讃岐の古瓦展」』 1996.1 高松市歴史資料館**
- ・香川県教育委員会 **『埋蔵文化財試掘調査報告Ⅹ 国道バイパス等事業予定地内の調査』1996.3**

報告書抄録

ふりがな	まえだひがし・なかむらいせき さん							
書名	前田東・中村遺跡 III							
副書名								
卷次								
シリーズ名	四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告							
シリーズ番号	第五十六冊							
編著者名	宮崎哲治							
編集機関	香川県埋蔵文化財センター							
所在地	〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4 TEL0877-48-2191(代表)							
発行機関	香川県教育委員会・国土交通省四国地方整備局・西日本高速道路株式会社							
発行年月日	2006(平成18)年 3月 31日							
総頁数	目次等	本文	観察表	図版	挿図枚数	写真枚数	付図枚数	CD-ROM枚数
121P	10P	111P	(CD収録)	(CD収録)	134P	341枚	なし	1枚
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
まえだひがし・なかむら 前田東・中村 いせき 遺跡	かがわけんたかまつし 香川県高松市 まえだひがしまち 前田東町	37201	582	34度 17分 40秒	134度 07分 12秒	1997.10.1 ～ 1999.6.30	13.146	四国横断 自動車道 建設に伴 う調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項	
前田東・中村 遺跡	集落	弥生時代 中～後期	溝状遺構・土坑・柱穴跡・ 自然河川跡			弥生土器・石器	絵画土器	
		古代	掘立柱建物跡・構列跡・ 溝状遺構・井戸跡・土坑・柱穴跡			須恵器・土師器・ 縄文陶器・黒色土器・ 瓦類・陶印	陶印・ 墨書き土器	
		中世	掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑・ 柱穴跡・井戸跡・窓跡			須恵器・土師器・瓦類		

四国横断自動車道建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告 第五十六冊

前田東・中村遺跡Ⅲ

平成18年3月31日発行

編集 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷5001-4
電話 (0877) 48-2191(代表)

発行 香川県教育委員会
国土交通省四国地方整備局
西日本高速道路株式会社

印刷 太陽印刷株式会社

